
現の黙示録

神崎 ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現の黙示録

【Nコード】

N6151B

【作者名】

神崎 ゆう

【あらすじ】

これぞ神崎ゆうノベルズの原点。天界、人間界、冥界……三つの世界を巻き込む戦いが、宿命を背負った者達によって幕を開ける……！ 某出版社への応募を目的として執筆した、神崎ゆう人生最初の完成作品！

序

既に日は落ちていた。

人工の明かりが全くない闇夜を、ただ一つ、空に浮かぶ月だけが照らしていた。

「ぐっ……！」

とある豪邸の屋根の上で、黒い髪と茶色の服を着た少年が、呻いて膝をつく。右手で押さえられた左肩から、片刃の刃物……つまりは刀を握る左手の指先へ、真紅の血が滴り、青い屋根の色を変えていく。

少年は、自分の前に立つ、自分に傷をつけた黒い獣を睨んだ。

「ガルルル……」

蛇の尾を持った三つ首の獣は、少年の息の根を止めるため、跳びかかるタイミングを待っている。左端の首の傷は、少年の刀によってつけられたものである。

少年の左肩の出血は、止まるという言葉を知らないかのごとく、傷から溢れていく。

少年は焦っていた。早く決着をつけなければ、自分の命が危ない。このまま出血多量で野垂れ死になど御免だ。

意を決した少年は、真っ赤に染まった左手で、怪しく光る刀を、強く握り締めた。

「ガアアアアアッ！」

黒い獣が雄叫びを上げ、三つの首全ての口を大きく開き、少年に向かって跳びかかる。それを見た少年は、刀を縦向きに構え、そのまま低い姿勢で刀を振った。

「ギアアアアッ！」

両端の首が悲鳴をあげた。真ん中の首の下顎から腹までを、少年の刀が切り裂いたからだ。

黒い獣は屋根に倒れこみ、息絶えると、幾つもの光の玉となり、

少年の前から消えていった。

「……っ！」

獣を倒して気が抜けたのか、少年は一瞬苦しそうな顔をしたかと思うと、屋根から地面に落下した。

「ケルベロスが一匹やられたかあ……。でもまあ、問題ないかな。たかが獵犬の一匹ぐらい」

先程の戦闘を見ていたらしき少年が、微笑を浮かべる。幼い容姿をしているが、その背にあるものは、人間という種族の姿形にあるべきものではなかった。

純白の翼……。その姿は、「人間」と言うよりも、「天使」と言うに相応しい。

「どうやら彼女の所への誘導はうまく行ったみたいだし、計画は順調ってところかな。『神威しんいの邪辟じゃはい勅じく』……これからどうなるか楽しみだよ」

純白の翼を羽ばたかせ、少年は何処かへと飛び去った。

「……？」

部屋で寝ていた少女の近くで、大きな音がした。何か重いものが落ちたような音だ。その音に睡眠を邪魔された、赤い髪とは対象的な青い目の小柄な少女は、不機嫌そうにベッドから出る。こんな時間に関何だ。そう言いたげなのが、目でわかる。

しかし、上から落ちてきたものの正体を見た途端、少女の表情が一変した。

「何？」

少女の発した言葉である。当然と言えば当然だ。自分の家の庭に、人が倒れている。少年のようで、酔っ払いの人ではない。

少女は庭へ出て、少年に声をかけた。

「大丈夫ですか？」

「!」

余程驚いたのか、少年は勢いよく少女から離れた。

「動かないでください!」

「……………」

などと考えていると、左肩に激痛が走った。しまった、出血していることを忘れていた。

少年の出血を思い出した少女は、急いで部屋に戻り、どこからかガーゼと包帯を持ってきて、少年の肩に巻いた。

「大丈夫だと思いますけど、出血がひどいです……今日は私の部屋で休んでください」

家に連れて行こうとすると、少年が手を振り払った。

「こ、断……っ!」

言い切る前に激痛に襲われ、少年は気を失った。

第一章 ここに始まる黙示録1

気が付くと、俺はベッドの上で横になっていた。

見ず知らずの人間に、休んで行けと言われた後の記憶がない。気を失ってしまったか。……となると、ここはあの少女の家か。

「気分はどうですか？」

部屋のドアが開き、昨日の少女が顔を出した。俺のために用意したのか、パンと牛乳の乗ったトレイが、少女の両手を塞いでいる。

昨日は時間が時間だったので、パジャマ姿であったが、今は黒が基調の服を着ている。ただ、赤い髪は、昨日と同じであった。

昨日は余裕がなかったから良く見ていなかったが、今見てみると、この少女は綺麗……と、言うのだろうか？うまく説明できないが、まあそういう感じだ。

「出血は止まりました。でも、まだ動いちゃだめですよ」

「……断ると言っただけだ」

とりあえず、殺す気で少女を睨んでみた。俺は一般の人間とは違う。どこにでもいるような奴なら、これだけで、少なくとも一瞬は目を逸らす。まあ、簡単な人柄の調査と言ったところだ。

殺気は十分なはずだったが、少女は俺の目を、真っ直ぐ見返してきた。

どうやら、それなりに度胸は据わっているようだ。

「お節介だ……とでも言いたげですけど、傷の深さや出血の量から見て、あのまま放っておいたら、あなたは確実に死んでしまっていました。自分の家の庭で人が死んでいて、平気でいられると思います？」

少女の意見に、俺は納得していた。

考えてみれば、ある日、知らない人間が、自分の家の庭で、血を流している。しかも、放っておいたら間違いなく死ぬ。そんな状況で、知った事かと言える人間が、一体何人いるだろうか。

ある者は自分の庭を気にして、またある者は周りの目を気にして、そいつを助けるだろう。

「助けてくれた事には礼を言う。だが、これ以上関わるな。それがお前の為だ」

殺意を込めたりはしなかったが、俺は少女を睨んでいた。仕方ない。昔からこうなのだ。

自慢じゃないが、俺は他人との付き合いが苦手だ。

と言うのも、どうやら俺自身が、他の連中には近づきたい雰囲気放っているらしく、相手から話しかけられることも少ない。こっちから話しかける事は全く無い。皆無だ。

俺が非社交的な事はともかく、さっき言った事は本当だ。

俺はこの少女に関わって欲しくないと思うし、それがこいつの為でもある。

「どうしてですか？」

言ってわかるのか、馬鹿が。心の中で悪態をついた。

少女は俺に対して、警戒心を抱いていない（……ような気がする）。相手は初対面の人間……しかも、立派な刃物を携えた、いかにも怪しそうなタイプだぞ。もう少しこう、「私はあなたを怪しく思っています」と言った態度をとっても、なんら不思議は無い。むしろ、警戒心を張らないほうが変であると言える。

「お前には関係のない話だ」

「それじゃあ、関わらない方がいい理由がわかりませんよ」

どうやら、俺が関わるなど言った理由を知りたいらしい。何故だ？ 無知は罪と言う言葉があるが、知らないほうが良い事もある。少女の知りたがっている理由と言うのは、俺にとっては一種のプライベートと言える。

いや、ちよつと違う。どう違うかと言うと、この少女が知りたがっている理由は、プライベート……個人に関すること、自分だけに関係のあるさま……には当てはまらない。その真相を知る者が俺ぐらいしかいないだけだ。

実際、俺が今関わっている問題は、知っている者こそ少ないが、世界規模といっても過言ではない。世の中の連中がのんきに時を過ごししている間に俺は……。

何てことだ。何がプライベートだ。全然違うではないか。

自分の間違いを恥じていると、少女が下を向いている俺の顔を覗き込んできた。

「説明できないことなんですか？」

「ああ。悪いができない」

話したところで、この少女を無駄に巻き込んでしまうだけだ。

一般人は一般人なりに、自分の時間を過ごしていれば良い。

「そう……ですか。きっと深刻な問題なんですね。わかりました、やめておきます」

微笑みながら、少女は追究をやめた。どうやら物分りは良いらしい。教えてもらえそうな事と教えてもらえなさそうな事。その二つを区別できている。

隠す事を面白がる奴は、相手の気持ちなどお構い無しに問い詰めてくる。非常に鬱陶しい。

「あなたの傷が治るまで、少なくとも一週間はかかります。それまでは、ここで安静にしてください」

そう言うと、少女は部屋から出ようとした。しかし、ドアノブに手をかけると、俺のほうに振り返った。

「あ、申し遅れました。フィアラ・レヴィジットです。以後、よろしくお願いしますね」

微笑んで、少女……フィアラは部屋から出て行った。何をしに行ったのか……。

意外と答は単純だった。車椅子を押して、フィアラが部屋に入ってきたのだ。

「折角ですので、屋敷の中を案内致します。歩けないでしょうから、これに乗ってください」

正直どうでも良かったが、助けてもらった手前、無愛想に断るの

も無礼だ。重い体を動かして、俺は何とか車椅子に乗った。自分の体に血が足りていないのがよく分かる。

フィアラはゆっくりと車椅子を押し始めた。いきなりスピードを出しては体に悪いと気を遣ったのだろう。

「フィアラ、ちょっといいか？」

「はい、何ですか？」

俺が話しかけると、フィアラはすぐに車椅子を押すのをやめた。顔を傾けて、俺が何かを言うのを待っている。そうしている間も、フィアラは微笑を絶やさない。

自分から話しかけたことに自分で驚きながら、俺は言うべきことを言った。

「……俺は神崎達哉しんざき たつや。助けてくれた事、心から感謝している。その……ありがとう」

ありがたいの一言を言うのに、俺はかなり戸惑った。こんな言葉今まで言ったことがなかったんだ。大目に見て欲しい。

「……はい！」

満面の笑みを浮かべて、フィアラは快く返事をしてくれた。一切曇りの無い笑顔だ。

フィアラという間、負の感情が湧いてくることはなかった。不思議なものだ。他の奴らが近くにいと、一刻も早くその場から去りたくなるのだが……。

「あ、フィアラ！その人が例のお客さん？」

メイド服……と言うのか？そんな感じの服装をした少女が、こちらに走ってきた。

どうやら食事を運んでいる最中らしい。一切手が付けられていない料理の乗った台車が、少女の後ろに見えた。

「ええ、神崎さんです。神崎さん、私の昔からの友達で……」

「レイディル・ニアスよ。この屋敷の使用人をやってるわ。よろしくね！」

片手を腰に当て、もう一つの手で敬礼をし（堅い敬礼ではない。

「よっ」って感じた）、上半身をこちらに傾けた。こいつなりの自己紹介なのだろう。パアッ！と言う効果音が適切な笑顔だ。緑色の長い髪を、リボンで縛っている。

一目見て、こいつは使用人に向いていないと思った。

レイディルがフィアラに仕えている立場なのだろうが、そのフィアラに、レイディルは対等な立場で話している。使用人としては微妙なところだ。

ところで、レイディルからわかる通り、この屋敷には何人もの使用人がいる。

最初に俺が寝ていた部屋から出て、初めて気付いたのだが、この屋敷はかなりでかい。広すぎて目が回るほどだ。

つまりフィアラは、この屋敷を所有している者の娘……良家のお嬢さんというわけだ。

「レイディル、食事を運ばなくてもよろしいのですか？」

「あ、そうだった。昼食の時間だから、フィアラも早く来てね！」

ガラガラと音を立てて、台車はレイディルに引かれていった。数秒後に「ガシャアンッ！」と言う音が聞こえたのは、気のせいと言う事にしておく。

「む、昔から、元気な子でしたから……」

苦笑いをしながら、フィアラは何とかレイディルをフォローしようとする。あいつ……フィアラの友達じゃなかったら、確実に首だっただろうな。

レイディルの言った通り、少ししてからフィアラは昼食をとりに行った。

俺は行かなかった。行ったところで、向こうは得体の知れない俺と、気まずい時間を過ごすだけだ。と言うわけで、俺は自力で車椅子を走らせ、元いた部屋に戻った。

しばらくすると、昼食をとらなかった俺に気を遣い、フィアラが部屋になかなか豪勢な食事を運んできてくれた。

使用人以上に使用人らしい行動をとるフィアラは、とても良家の

お嬢さんには見えなかった。とは言っても、白いワンピースを着て、話し方は上品で……。傍から見れば、お嬢さん以外の何者でもないわけだが。

「どうして来られなかったのですか？父上や母上は、不思議な方とお会いできるって、楽しみにしていましたのに」

父上や母上……。か。いかにもお嬢さんらしい呼び方だ。

「お気を遣ってくださいたのはうれしいのですけれど、夕食の際にはお会いになってくださいね」

そのフィアラの頼みは、決して叶えられなかった。

何故ならこの時、宿命の歯車は、新たな段階へ進んだからだ。

ドゴオッ！

「うわああああああああああっ！」

「キヤアアアアアアアアアアッ！」

突如、何かの壊される音がして、その直後に屋敷の人間の悲鳴が聞こえてきた。玄関あたりからだろうか。

「皆……！一体何が……」

扉の方へ向かおうとしたフィアラの手を掴み、彼女の行動を制する。

俺の考えが正しければ、相手は危険度の高い招かれざる客だ。しかし、狙いは何だ？「奴ら」が俺個人を狙ってきた事は無い……。まさか、いるのか？この屋敷に「あれ」が。

「何するんですか！皆に何かが起こって……」

フィアラが俺にそう叫んだときだった。俺はフィアラの右手の甲に、模様が付けられている事に気づいた。

「……！」

まさか……。彼女が「そう」なのか？もしそうだったとしたら、「奴ら」の狙いは……。

「おい、フィアラ。その手の紋章は……」

「今それに何の関係があるんですか！とにかく離してください！」
何の関係がだと……？大有りだ。

俺は手を離し、再度フィアラに問うた。

「答えろ、この紋章は何だ？いつからあった？」

部屋の外の様子を気にしながら、フィアラは答える。

「これが何なのか、私にもわかりません。生まれたときからあったらしいんですけれど……」

間違いない。俺は確信した。

何か作画的なものを感じるが……これは幸運だ。

「そうか……。こんな所にいるとはな……『せいけつ聖血の封冥者』」

「え……？」

そのとき、俺達のいる部屋の扉が開き、誰かがその場に倒れた。レイディルだった。

「フィアラ………」

「レイディル！大丈夫ですか？一体何が……」

倒れたレイディルに駆け寄り、血の流れる腕の傷口を押さえる。

出血は少ない。外傷はあるが、致命的な傷ではない。しかし、その様子に反し、レイディルは死に掛けの人間の様に衰弱している。

「内部破壊だな。狂犬どものやりそうな事だ」

俺はベッドの隣に置いてあった刀を取り、その刃を鞘から解放した。

「今すぐにここから離れろ。狂犬どもの狙いはお前だ」

今この屋敷を荒らしているのは、間違はなく、昨日も戦ったケルベロスだ。奴は決して一匹じゃない。現段階で数十匹はこの人間界をうろついている。

そして、ケルベロスの狙いは……間違いなくフィアラだ。

「待ってください！私が狙って何ですか？それにあなた、その傷で動いては……」

先程からわけのわからない事だらけなのだろう。

狂犬とは何か？とか、自分が狙いとは？とか、何故レイディルが怪我を……？とか、数え切れないほど聞きたいことがあるだろう。

俺の見たところ、フィアラの頭脳は悪くない。だが、こう未知の

ことが多すぎては、冷静に状況を把握する事もできないのだろう。当然と言えば当然だ。

「説明している時間は無い。とにかく俺は今、お前に死なれるわけにはいかないんだ。早くここから離れろ！」

俺が突然叫んだ事に驚いたのか、フィアラは後ろに下がった。今にも泣きそうな顔をしている。

しかしその直後、フィアラの表情は一変した。彼女の視線は、俺の手の甲にある紋章に向けられている。そうだ。お前も、俺と同じような宿命を背負っているんだ。

「あなたは……一体……」

ドゴオオッ！

「ガアアアアアアッ！」

フィアラが小さな声で俺に問うたときだった。

部屋の扉を壁ごとぶち壊し、三つ首の黒い獣……ケルベロスが現れたのだ。

「きゃあああああっ！」

フィアラが悲鳴をあげた。その恐怖に、そのまま腰を抜かし、尻をついてしまう。

ケルベロスの全ての牙には、人間の血が付いている。恐らく、屋敷の人間は全滅だろう。

「ちっ！フィアラ、さっさと逃げろ！」

俺が叫ぶが、返事は無い。

「あ……ああ……」

獣の姿がよほど恐ろしかったのだろう。フィアラはまだ腰を抜かしている。こうなっては、逃げることもできそうに無い。仕方ない。今のうちに渡しておくか。

俺は刀の刃を、フィアラの頭上に向けた。

「！……神崎さん、何を……」

「受け取れ、『聖血の封冥者』」

お前がここで死ぬことは許されない。許されない理由があるんだ。

俺はフィアラの頭上で刀を振った。

バリバリバリバリ……ッ！

大きな音をたてながら、時空が切り裂かれていく。フィアラの上に、空間の穴が開いている。更なる未知の現象に、フィアラはただその切り裂かれた時空を見ていた。

時空の穴からフィアラの手に、一冊の本が落ちる。俺達の宿命の証が……。

「それは『光の黙示録』。お前を『聖血の封冥者』だと証明するものだ」

本の表紙には、フィアラの手の甲にある紋章と全く同じものが描かれている。

「疑問が絶えないのもわかる。だが、今はそれを持って、ここから離れてくれ。その本とお前はどちらも欠けてはならない存在だ。後からいくらでも説明はしてやる。だから……今はここから逃げろ！」

フィアラは無言のまま頷き、立ち上がり、窓から外へ出て行った。それを確認し、俺は刀をケルベロスに向けた。

「わざわざ待っていてくれるとは、珍しくお人好しな狂犬だ。……来い！」

第一章 ここに始まる黙示録2

「ガアアアアアアッ！」

バチッ……バチバチバチッ！

真ん中の首の口の中で、光の珠が電気の走る音を立てて形成されていく。ケルベロスが冥界へ迷い込んできた者を焼き払い、無に帰する際に使われる技だ。

「ガアアアッ！」

左右の首が雄叫びを上げると、真ん中の首の口から、光の珠が放たれた。

カッ……ドオオオオオオオオオオオオオオオオッ！

「あ……ああ！」

白い閃光が走り、爆発によって屋敷が丸々吹き飛んだ。

余程強力なダイナマイトでも使用しない限り、起こりえない自宅の消滅に、フィアラはただ悲鳴にならない悲鳴をあげているしかなかった。

この時、フィアラは勿論、俺もケルベロスですら気付かなかった。爆発が起こる直前、レイディルがその姿を消していた事に。

「ちっ……！」

俺は跳躍で爆発を回避し、燃え盛る屋敷の跡に着地した。直後、瓦礫の中からケルベロスが姿を見せる。

「グルルル……」

辺りを見回してみた。

屋敷の住人であろう者達の死体が、十は転がっている。その中の殆どに、ケルベロスに噛みつかれたり、体の一部を引きちぎられたりしている。

昨日は周りに死体が無かった為実行できなかったが、今なら……。 「……十分か」

俺は刀を左斜め下に構えた。今なら……。 「あれ」が実行できる。

オオオ……。

刀が怪しげな光を放ち、小さな光……魂が、宿っていた死体から次々と離脱してきた。そのまま魂は刀に宿り、一つ魂が宿っていく毎に、刀は光を増していく。

「ガ……」

その光に、ケルベロスが後退していく。己の武器に魂を宿らせる……。それは太古から伝わる、『冥界の黒狂犬ケルベロス』を打ち倒す手段だ。

「ガアアアアアアッ！」

やけくそか、ケルベロスが突進する。だが、俺は跳躍で突撃をかわす。

刀を下に向け、そのまま……。

ズンッ！

「ギアアアアアアアアアッ！」

ケルベロスの背から腹を、鋭い刀が貫いた。魂を宿した刀に貫かれたケルベロスの傷口から、少し煙が発生する。

「冥界より出でる狂犬よ、『神威の邪碎靱』の名の元に、『光の黙示録』の舞台から滅する！」

刀を抜き、それと同時にケルベロスの背中から跳躍した。俺が上に掲げると、刀は長さを増していく。

冥界へ帰れ、『冥界の狂犬ケルベロス』……！

「うおおおおおおおっ！」

刀の刃が強く輝いた。その巨大な刃を、勢いよく振り下ろした。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！

「きゃあっ！」

とてつもなく強い衝撃と突風が、フィアラの立っている地面を揺らし、彼女の長くはない髪を引っ張るように揺らす。彼女の目の前では、ただ白い光が屋敷跡を包んでいた。

「……私の家、跡形もなくなってしまいましたね」

振り向くわけでもなく、フィアラは後ろに立つ俺に話しかける。

フィアラの目の前には、屋敷で一緒に暮らしていた家族、使用人らの名が刻まれた小さな墓が、十数個並べられていた。

その中に、彼女の親友であるレイデイルの墓もある。

「……………」

言葉がない。こういう時にかけるべき言葉を、俺は知らない。もう少し気の聞いた言葉を言えると良いのだが、俺はそこまで器用じゃない。

「……神崎さん」

「ん……………」

フィアラが俺のほうに振り返る。

「説明……………してくださいませよね？」

表情こそ暗いが、彼女の目からは光が失われていなかった。

真実を知ろうとする意志と、彼らの死を弔おうとする意志……………。

それらに満ち溢れた目は、真相へ迫るには十分だ。俺は彼女に、自分達の宿命を話すことにした。

「もうかなり昔……………神話の時代の事だ。まだこの人間界と神界の関係が断たれていなかった頃、俺たち人間と、一人の神の戦いがあった」

世界がまだ成熟しきらぬ頃……………人は徐々に、神々からの独立しつつあった。全ての神が人の成長を認め、彼らの独立を喜んだ。ただ一人……………天使たちを司る神、神天使しんてんしを除いては。

当時人は、天使達の管理下にあった。天使に木を伐採せよと言われれば、人は森の木を伐採した。殺し合えと言われれば、人々は殺し合った。そしてそれに逆らえば、天使達の強大な力によってこの世から消えていった。

人々の労働によって、天使達は安定した日々送っていた。それは、

天使達の長である神天使も同じ事である。

ある日、神々全員が集結し、人々の今後についての会議が行われた。ほぼ全ての神は、人々の独立を認めたが、神天使だけは、決して同意しなかった。しかし、神天使の反論は、神々の意志を突き動かすには及ばず、近い内に、神界と人間界を繋ぐ扉が閉ざされる事となった。

己の立場が危うくなった神天使は、冥界の扉を開き、当時冥界に多数生息していた、『冥界の黒狂犬ケルベロス』の大群と、天使たちを率い、人々と神々に戦いを挑んだ。

この事態に対し、神々と人は同盟を結び、圧倒的な数を誇る神天使の軍と戦う決意をする。

数の差は神と人の連合軍一に対し、神天使軍二十。人と神は諦め始め、神天使は勝利を確信していた。しかしその状況は、冥界の王が、連合軍に味方したことによって覆される。

突如冥界から参戦した冥王は、天使達を遥かに凌ぐ神々をも遥かに凌ぐ力を見せ、次々に襲い掛かる天使達やケルベロス達を、傷一つ負わされること無く蹴散らした。

そしてついにただ一人となった神天使は、神々の手によって裁かれた。しかしその時、神天使は己の魂の半分をある一族の一人に。もう半分をある本に宿らせた。

魂がばらばらでは、神天使はその力を振るうことができない。神々は魂を宿された者に封印術を施し、本を二つにすることによって、神天使の覚醒を不可能なものにした。しかし、しばらく後、神々は重大な事に気づく。

宿された魂は、その者から子へ、その子から子へと、受け継がれてしまう事が判明した。しかも施した封印は、魂と共に受け継がれているものの、世代が進む毎に力を失っていく。これに対し神々は、人のある三つの一族にそれぞれの異名を与え、万が一、神天使が覚醒し、冥界の扉が開かれたとき、その名を継ぐものが覚醒するようにした。そしてその者達に、開かれた冥界の扉を閉じ、神天使を倒

す使命を与えた。

人にあらん限りの備えをさせた神々は、神界へと帰り、人間界との関係を断ち切った。

巨大な屋敷が無くなり、平原と化した地には、そよ風が吹き続けていた。

「……それぞれの異名を継ぐ三人のうち、一人は俺。もう一人はお前だ。俺は『神威の邪砕靱』。お前は『聖血の封冥者』の名を継いでいる」

この時初めて、フィアラは自分が、何故『聖血の封冥者』と呼ばれたのかを理解したはずだ。つまり、彼女の継ぐ異名を、俺は呼んでいたわけだ。

「お前の宿命を証明するものが、その『光の黙示録』だ」

フィアラは自分が持っている光の黙示録を見つめた。彼女と同じ紋章が描かれたその本は、常に何かを求めているように見えた。

いや、事実求めているのだ。相対する……もう一つの本を。

「……どうやらわかつているようだな。そう、俺たちの手には『光の黙示録』があり、神天使の魂を半分宿した者の手には、『闇の黙示録』と呼ばれる本がある。これは、神天使のもう半分の魂を宿した本を、太古の人間が二つにしたものだ。この『光の黙示録』を敵の手から守る事も、俺達の使命のひとつだ。もし、『光の黙示録』と『闇の黙示録』が敵の手に渡り、魂を封印された本が一つに戻ったら、神天使は完全に覚醒し、太古に起きた惨劇が、現代で再現される事になる。それだけは……何としても避けなければならない」

『光の黙示録』には記されていないが、当時の戦いでも、数え切れないほどの命が散っていったはずだ。その戦いが現代で起きれば、世界人口の半数はその命を散らすだろう。すでに、百匹ほどのケルベロスがこの人間界に浸入してきている。一般に明かされてはいないが、それだけでも、今までの間に約三百人が犠牲となっている。

実は、これでも少ないほうなのだ。

俺が覚醒した事によって、ケルベロス百匹のうち七十は、『光の黙示録』の舞台から滅している。この異常事態に、現在の警察や特殊部隊が役に立つはずも無く、ケルベロスの処理は、事実上、十六歳のガキである俺に任せきりになっている。

「……『聖血の封冥者』の役目は、開かれた冥界の扉を閉ざす事だ。それは『聖血の封冥者』以外では実行できない。お前が今まで、自分が覚醒している事に気付かなかったのは、覚醒した力が、目に見える力じゃなかったからだ。お前は冥界の扉を閉じる力を持ち、俺はお前を守る為の力を持った。つまり俺は、お前専属のガーディアンと言うわけだ」

『聖血の封冥者』は扉を閉じる為に冥界の扉へ向かい、『神威の邪碎靱』は『聖血の封冥者』を守る為に行動を共にする。それが宿命だ。

「フィアラ、『光の黙示録』はお前に預ける」

「え……でも、奪われてはいけないのでは……」

冥界の扉を閉させる分、フィアラには戦う力が無い。頼りない自分に、そんな大事な物を預けて良いのか、それが不安なのだろう。「どちらにしても守らなければならないのは同じだ。なら、守るべきものが一つにまとまっていたほうが、俺にとってはややすい。それに『光の黙示録』は、お前が持つてはじめて意味を成すものだからな」

後半の言葉の意味は、フィアラには理解できなかっただろうが、自分が持っていたほうがいいと言う事を理解したフィアラは、人世界の運命そのものである『光の黙示録』を、責任を持って、自分が預かることを承諾した。

納得したフィアラが立ち上がりとする。俺は手を差し伸べた。

言っておかなければならない……歓迎の言葉を言う奴を。

「よく来たな、フィアラ・レヴィジット。『光の黙示録』の舞台に……！」

眩いほどの笑顔で、フィアラは俺の手に自分の手を重ねた。

気が付くと、暗い空間に少女はいた。

自分にだけ、光が当たっていて、光の届く範囲以外は、真っ暗である。

「気が付いたかい？」

真っ暗である為、明確な距離はわからなかったが、自分から五メートルほど先を、突然光が照らした。その光で、背に翼を生やした少年が姿を見せる。

レイディルは思った。雰囲気こそ違うが、あの人に似ている……と。

「あ、あなたは一体……それに、ここはどこ？」

「僕はレミネス。そしてここは、君の生と死の狭間。本来なら、君はあの場で死んでいるところだったけれど、今回は僕が、君に選択肢を与える事にしたんだよ」

一瞬の間に、意味不明な言葉を次々と並べられてしまった。困惑する少女とは対照的に、レミネスと名乗る少年は、ずっと微笑を浮かべている。

困惑すると同時に、少女は自分がついさっきまでどういう状況に立たされていたのかを、徐々に思い出してきた。

確か、黒い三つ首の獣が……。

「君に与えられる選択肢は二つある」

レミネスがそういうと同時に、光が二人の間を照らした。照らされた狭い場所では、銃が一丁だけ、台の上に乗っていた。

「一つ、その銃を手にとって、自分の頭を撃ち、このまま冥界へ向かう事。そしてもう一つは……これから始まる喜劇に、その銃を君の力として使うこと。今すぐ決断してね」

正直言って、全く意味がわからなかった。

これから始まる悲劇とは一体何なのか……。しかも、この少年の

言葉の意味が、とてつもなく深いことを少女は一瞬で読み、それが余計に少女を混乱させた。

「……一つ確認させて。あの時、私を助けてくれたのは、あなた？」
「うん、まあね。ほんの気まぐれだったけれど」

この言葉で、少女は決断した。この恩義、返さないわけにはいかない。

「ならこの銃、恩人であるあなたに尽くす力として使わせていただきます」

少女が銃を取る。少年は微笑を浮かべる。

「ようこそ、レイディル・ニアス。『闇の黙示録』の舞台に……」

第二章 光と闇の道標1

俺とフィアラは、これからの拠点を手に入れるため、レヴィジツト邸跡の近くにある街に来ている。

なかなか大きな街で、でかい建物に囲まれた道を、たくさん人間が歩いている。実に居心地が悪い。しかし、回りの人間は気にならないのか、フィアラは嬉しそうに辺りを見回している。

良家のお嬢さんともなると、屋敷の外に出してもらえる事は殆どないらしい。

買い物などは無論使用人が行くし、学問においては専属の教師が屋敷を訪れ、フィアラの家庭教師を担う。そう言った事情から、まともに外を出歩いたのは、今回が初めてだと言っていた。

「あ、神崎さん、この林檎美味しそうですよ」

「……お前、一体何しにここに来たんだ？」

いくら珍しいからと言って、はしゃぎ過ぎだ。いつ何時、ケルベロスがフィアラを狙っているかわからない。あいつらは夜行性だ。本格的に行動を開始するまで時間があるが、油断ならない。

街に入る前に注意はしておいたはずなのだが……。

「家を探しに来たんですよね？大丈夫です。今まで通ったところには、不動産屋はありませんでしたから」

フィアラはそう言いながら、色々な場所に目を向けている。

俺の注意など……まるで無視と言うわけだ。

「……仕方ない。家は俺が探す。その間、お前はこの街を自由にきて来い。これだけ人がいれば、ケルベロスは現れないはずだ。夜十時までに、ここに戻って来い。いいな？」

正直言って不安である。夕方、それでも人はたくさんいる。ケルベロスが現れる可能性はこの上なく低い。しかし、万が一と言う事がある。

もしケルベロスが現れて、フィアラが殺されてしまったら、その

時点で俺達は敗北確定だ。

とは言え、フィアラも自由時間ぐらい欲しいだろう。家なら俺が探せばいいし、場所と時間の約束もした。問題ないだろう……恐らく。

「本当ですか？ありがとうございます！」

俺に礼を言って、フィアラは走っていった。さて……適当に家を探すとしよう。

「ん……？」

歩き始めようと思ったとき、俺はちよつとした事を思い出した。

「あいつ……この街に来る直前まで、かなり疲れていたはずじゃ……」

本当に大きな街だと思います。

道は広いはずなのに、いつも誰かが、タイミングを見計らっているみたいに道の隙間をなくしている。でも、それはここが広い道だからで、狭い道にあまり人はいませんが。

この街は大きいから、多くても当然だと、神崎さんから聞きました。私が家でのうのうと暮らしている間に、皆さんは一生懸命に働いていたんですね。この街に来て、そんな事を思います。

この街に着くまで、意外と時間がかかりました。

それは、私が長時間歩いた経験がなくて、すぐに疲れてしまう私に、神崎さんがペースを合わせてくれていたからです。そのせいで、三日をかけて、ようやく街に来る事ができました。

本当は今日もくたかなのですけれど、疲労よりも好奇心が勝ってしまって、神崎さんが自由時間をくれたときに、思わず走り出していました。

神崎さん、すみません。

そう、心の中で謝罪しているときでした。目的もなく街を歩いていると、稲妻の模様が入った黒い服を着た男の子……私よりも少し

幼い感じの……と目が合いました（あ、眼鏡をかけてます。でも何となく聡明なタイプではないような……）。別に何かがあったわけではありません。ただ、何となく目が合ったんです。

「……よう」

対応にお困りになったのか、男の子は私に声をかけてきました。

突然知らない人と目が合ったりしたら、困っても仕方ないですよ。ね。
「あ、どうも。おはようございます」

今は夕方の六時。挨拶を間違っている事にも気づかず、私は頭を下げていました。ふとしたことで間違う……大丈夫です。よくあることです……多分。

何年も世の中を生きていたら、そういうことって、結構あるものです。今みたいに時間によって違う挨拶を間違えたり、間違えた文字を、もう一度同じように書いてしまったり。あ、勉強を教えるもらっているときに、自信満々で言った答が間違っていたなんて事もありましたっけ。

とにかく、結構あるんです。

向こうも気づかなかったのか、それともあえて突っ込まなかったのか……それはわかりませんが、男の子はそのまま言葉を繋ぎました。

「見ない顔だな。この街は初めてか？」

とりあえず、はいと答えておきました。

だって、本当に初めてですし……。

「そうか。この街はでかいからな。あんまり適当歩いてると迷っちゃうぞ？」

確かにそうでした。

何の当てもなく歩いていたのは良いのですけれど、見たことの無い街で放浪していた私は、約束の場所がどこか、さっぱり分からなくなっていました。つまりは迷子……と言うわけです。

「あ……」

「あ……って、もうなってんのかよ！ おいおい、一度迷っちゃうと

なかなか迷走状態から抜け出せねえぞ？」

まるで前から私を知っているかのように……慣れ親しんだ友達を話すように、この人は私と話している。人と関わるのが上手って言うか……。神崎さんとは対極に位置する方の方です。

あの人は冷静で、自分のことを話すことは滅多になくて……。世渡り下手……と言ったらわかりやすいでしょうか。

「ま、まあ、あれだ。こんなに人が多くちゃ場所を探しにくいだろ。ある程度人が減るまで、どっかで時間潰そうぜ。飯でもどうだ？」ナンパ（……と言うのでしょうか？）をされているような感じもしましたが、きっと私の時間つぶしに付き合ってくれる気なのでしょう。そうだとしたら、優しい方です。

「あ……はい」

私の答を聞くと、彼は体の向きを百八十度変え、そのまま歩き出しました。

意外と早い足取りの彼に、私は慌ててついていく。

「……にしてもお前、何かポケットとしてて危なっかしいな。何でこの辺をうろうろしてたんだ？」

斜め後ろを歩いている私に、彼は顔だけを向ける。

ポケットとしている……。実は、私はよくそう言われます。今まで……数十回は言われました。

本を読みながら歩いていて、曲がり角に気付かないまま壁にぶつかったり、考え事をしながら屋敷を歩いていたら、危うく階段から転げ落ちそうになったり……。その度に言われました。

ポケットとしている……と。

「あの……実は一緒に来ている人がいまして……それで、今は別々に」

「……ふうん。ってことはもう会ったんだな」

「え……？」

後半で声が急に小さくなり、その部分が聞き取れませんでした。

「いや、何でもねえよ」

そう言って、彼は前を向く。何か、とても大切な事に繋がる言葉を聞き逃したような気がします、その後いくら聞いても、彼は答えてくれませんでした。

そのまましばらく歩き、ラーメン……と言う食べ物を扱っている店に案内されました。

「悪いな。あんまり金がねえんだ。ここで勘弁してくれ」

「い、いえ、元はと言えば私がいけないんですし……」

あれ……？ただ目があっただけですよ？私、何か悪い事しましたっけ……？

自分で言った事に疑問を覚えました、今更訂正するのも変なので、何も言いませんでした。

「……へえ、お前がレヴィジット家の嬢さんかよ。ま、何となく高貴な感じはしてたんだけどな」

店に入った後、私達はラーメンを食べながら、いろいろなことを話していました。例えば、それぞれの名前とか……。ええっと、とにかく、いろいろです。

彼はレイト・アレクジールさん。年齢は十五歳。私よりも二つ年下で、でも身長は私と同じくらい。

私の屋敷で何があったのか。そのことを話さないように、気をつけながら、私達は楽しい会話を続けています。

「いえ、私なんかは全然高貴じゃないです。私のお母様に比べたら……」

「そ、そこまで神々しいオーラを放ってるのか？」

何かに焦るように、彼は聞いてきました。そこまでって……私も神々しく見えてたんですか？

「……ええ。高貴を形にしたような人で、でも高貴さのせいで優しさが失われているわけでもなくて……。それこそ神々しい雰囲気の人でした」

あの人は、私のよき母であり、憧れでした。私も、こんな人になりたい……そう思って、お母様の姿を見てきました。でも、その憧

れはいなくなってしまった……。

私の言い回しに気付いたのか、彼の表情が変わりました。

「……でした？」

「亡くなったんです。三日前に」

何故か……？それを話してしまわないよう、三日前に亡くなったと言うところで、私は言葉を切りました。

迂闊に話してしまつては、レイトさんも巻き込んでしまうかもしれない。そうになると、彼の命まで危なくなってしまう。そう思ったから。

それが無駄だったと言う事に気づくのは、もうちょっとだけ後のこと。

「亡くなったって……親父さんは？」

「母と一緒に……」

普通、二人の人が同時に亡くなる事なんてないはずです。

でも、レイトさんはそれ以上聞いてはきませんでした。

「そうか……。じゃあ、俺と同じだな」

え……。？と、私は首を傾げました。

今の言葉はつまり、私とレイトさんに、何かしらの共通点があるということ。突然だったからよくわからなかったけれど、話の流れから、何が共通しているか理解しました。

「俺も両親がいらないんだよ。俺がまだ小さいときに、二人とも死んでしまった。もう十年になる」

私と同じように、何が原因で亡くなったのか、レイトさんは話しませんでした。

けど、言いたくないことを無理に聞くのも申し訳ないと思い、私は黙っていることにしました。

「……と、悪い。空気重くしちゃったみてえだな」

「いえ、私も、嫌な事を思い出させてしまつて……」

私達は、互いに頭を下げ合いました。

私は深く頭を下げたので、ラーメンの器に思い切り頭をぶつけて

しまいました。ガツンと。

「痛っ！」

「おいおい、何やってんだよ。本当に天然だなお前」

レイトさんが笑いました。ははは……と。私も笑いました。

そのおかげで、場が少しだけ和みました。私のポケットとした性格が、幸いしたようです。

食事を終えて、私達は外に出ました。入ったときよりも、空が暗くなっている、人も少なくなっています。

「九時半……か。思った以上に長話しちまったな」

神崎さんとの約束の時間まで、あと三十分。

レイトさんがいたおかげで、自由時間を楽しめました。

「じゃあ、連れとの約束の場所を探すとするか」

「え……いいんですか？」

私が問うと、レイトさんは今更か？と言いたげな顔をしました。

「いいも何も、今ここでお前を置いていったら、お前はずっと迷子じゃねえか。こちらの道を把握してないお前がいくら彷徨っても、まず帰れねえぜ」

いくら人が減っていると言っても、この辺りがどこなのか、私には全然わかりません。

下手に歩き回ったら、神崎さんと合流するどころか、約束の場所からどんどん離れていってしまう可能性も高いです……と言うより、確実にそうなりそうです。

「まあ、そういうこった。ほら、行くぜ」

「あ……はい！」

さっさと歩いていくレイトさんの背中を、私はあわてて追いかける。

「……で、何か覚えてないのかよ？その場所の特徴とか」

闇雲に探したところで、たどり着ける可能性は低いです。私は少し考えました。

神崎さんと別れたとき……確か近くに……ええっと、何だったの

かな……あ、そうだ！

「林檎です。すぐ近くで、林檎を売っていました」

「林檎ねえ……この辺で林檎を売っているところと言えば……。よし、行くぞ！」

場所が思い浮かんだのか、レイトさんが走り出しました。は……速い！

私は慌てて追いました。しかし、彼は陸上選手さながらの足の速さで、一直線に走っていきます。私のために向かっているのに、私を置いていつてどうするんですか！

私の心の叫びが通じたのか、かなり離れた場所で、レイトさんが足を止めました。

よかった……。もう少しで見失ってしまうところでした。

「わ、悪い。そういやお前、良家の嬢さんだったな。まともに走ったこともねえのか？」

「はあ……。あまり、屋敷から外に出る事がなかったの……」
今考えてみると、とても不健康な生活をしていたような気がします。

大切にされていたのは嬉しいですけど、今度ばかりは困りました。

そんなことを考えながら、レイトさんと一緒に歩いていると、誰かが店じまいをしているのが目に付きました。その人が今片付けているのは……間違いなく林檎です。

「あ、ここです！」

「九時五十分か。良かったじゃねえか、間に合って」

レイトさんは、はははと笑っています。私が間に合ったのを、まるで自分のことのように喜んでくれている……。そんな彼の様子が、自分よりもしっかりした弟のように見えました。

「ほ、本当にありがとうございます！」

私は深々と頭を下げました。多分、九十度ぐらい。

「気にすんなって。別に大した事じゃ………！」

突然レイトさんが怖い表情でどこかに目を向けました。

まるで……獲物を狙う狩人のように。

「あ、あの……」

「悪いな。俺、もう行くぜ」

どこに向かうのか、レイトさんが走り出しました。が、すぐに止まって、こちらに振り返りました。こちらを見たとき、レイトさんの目には、先程の狩る者の目はありません。

「またな、『聖血の封冥者』！」

「……え……」

程なくして、神崎さんが戻ってきました。

第二章 光と闇の道標2

「『聖血の封冥者』を知っている奴がこの街にいるとは……！」

私と神崎さんは、レイトさんを追って、彼の走っていった方に走っています。

『聖血の封冥者』……。私の継ぐその名を知る人が、この街にいたのです。それを知っていると言う事は、彼も関係者であることを意味しています。

神崎さんと合流したあと、当然私は彼にレイトさんの事を話しました。私の話を聞くと、神崎さんはすぐに走り出しました。残っても仕方ないので、私も一緒に。

「し、神崎さん、あまり早く走らないでください！」

「……………」

突然、神崎さんが私の腕を掴みました。そのまま腕を引っ張られて、私が一瞬間に浮く。すると神崎さんは、私の浮いた両足を左腕で持ち、両足が持たれた事で、横向きに落ちそうになる私を、右腕で受け止めました。

「え……ちよっ……神崎さん？」

驚きました。要するに私は、「お姫様抱っこ」をされているのです。

私を受け止めると、神崎さんはもう一度走り始めました。多分神崎さんは、二人で移動するのに一番早い方法をとったつもりなのでしょう。けど、さすがにこれは恥ずかしいです。

誰も見えていないから良いようなものです。

「?……どうしたフィアラ。顔が赤いぞ」

「えっ? あっ、何でもありません！」

慌てて顔を背けた私に、神崎さんは? マークを浮かべています。この抱っこがどういふときに使われるのか、やっぱり神崎さんは

理解していないみたいです。

とは言え、下ろされると置いて行かれてしまうので、この状態のままにいるしかありませんでした。

それにしても、女と言う生き物はよく分からないものだ。

走るのが辛そうだったから抱えてやっただけなのに、顔を赤くしている。一体どこに、赤くなる要因があるのだろうか？見当がつかない。

しかも顔を背けたまま、ずっと黙っている。

やはり、女と言うのはよくわからない。

そんなことを思いながら、夜の街を走っていると、裏路地に入る道から黒い何かが飛んできて、俺達の目の前を転がった。

「きゃああああああああっ！」

その物体が何であるかを確認した途端、フィアラが悲鳴をあげた。俺も今回は、悲鳴をあげても仕方ないと思った。きっと、その辺にいる屈強な男でも、腰を抜かしただろう。

その物体は、冥界の狂犬ケルベロスの生首だった。大きく口を開け、ぴくぴくと動いている。しかし、決して息があるわけではない。大量出血のショックで、筋肉が痙攣し、自動的に動いているだけだ。俺はその場にフィアラを下ろし、首の飛んできた道へ入った。

そこに待っていたのは、誰もがゾツとする光景だった。

少年がいる。稲妻形の模様が入っている黒い服に、灰色の髪。これは問題ない。眼鏡をかけているようだ。これも問題ない。よくいる何処かの少年だ。

問題なのは、その少年の手に、大鎌が握られている事だった。一体どこに、大鎌を持った少年がいる？

その大鎌には血が付いている。恐らく、それを持っている少年の前に倒れている、ケルベロスのものだろう。

俺の存在に気付き、少年が振り返った。俺たちに向けられたその

目は、狩る者の以外の何ものでもなかった。

「何だお前？ 見せ物じゃねえぞ」

そう言った直後、少年は俺の後ろにフィアラが立っていることに気づいた。

「ああ、お前か。ってことは、こっちが『邪砕靱』か？」

まるで面白い物でも見るように、少年は俺に目線を戻す。その目は、未だに狩る者の目だ。

この眼鏡男……強い……。その目と、少年自身が放つオーラで、そのことが一瞬で理解できた。

少年は無傷である。そして少年の後ろには、ケルベロスの死体がある。つまり、この少年はケルベロスを相手に、傷一つ負うことなく料理した……と言う事だ。

俺はいつ仕掛けられても良いよう、抜刀の準備をした。

「……何者だ」

「名前ぐらいい話したはずなんだけどな。まあいいや。自己紹介してやるよ」

少年は大鎌を肩に寄せ、不敵な笑みを浮かべる。

「俺はレイト・アレクジール。またの名を『命狩の執行人』……お見知りおき願うぜ、『神威の邪砕靱』」

「……！」

『命狩の執行人』……。それは、『聖血の封冥者』を守る者として、神々が与えた異名の一つであった。

私達二人は、刀を持った少年と、大鎌を持った少年が対峙しているのを、建物の上から見ている。

一人は『命狩の執行人』。一人は『神威の邪砕靱』。そして『邪砕靱』の後ろには、『聖血の封冥者』がいる。つまり、私の真下では、太古の異名を告いだ三人が、全て揃っていると言う事になる。

「……今のうちに叩かなくても良いのですか？」

私は隣に立つ、ご主人様……レミネス様に問いました。

その問いに、レミネス様は微笑を浮かべる。

「必要ないよ。仮に彼らが束になって僕にかかって来たとしても、神の力の前には無力だよ」

レミネス様の身体には、レミネス様の魂と、古代の神の魂が同居している。と言っても、神の魂は本来の半分しか復活していないから、レミネス様自身は、自分の意志を持っていられる。

もし神が完全復活したら……その時レミネス様は……。

「大丈夫だよ、レイディル」

私の心境を悟ったのか、レミネス様は優しく、私に語り掛けました。

「僕だって、そう易々と自分の体を神に渡すつもりはないよ。何とかするさ」

顔では微笑んでいるけれど、一番不安なのは、レミネス様自身だと思う。自分の体が誰かに取られるかもしれないと思うと、とても怖くなるはず。私だったら、とくに逃げ出しているのに……。

「仕方のないことさ。これは神の魂を継いでしまった僕の宿命だからね。かと言って、逃げるわけには行かない」

「……………」

現代で冥界の扉が開かれたのは十年前。

レミネス様の話だと、ある事がきっかけで神を抑えていた封印が解け、当時子供だったレミネス様は、不覚にも神に操られてしまい、冥界の扉を開いてしまったらしい。

そのときに、私の真下のいる三人が覚醒した。もともと、『聖血の封冥者』だけは、覚醒したのが内部だったから、本院は気付いていなかったみたいけど。

神の魂が半分目覚めたとき、レミネス様からは成長と言う自然現象が消えてしまった。十年前……十二歳だったレミネス様は、当時の身体と全く変わらない。

それも神の影響かもしれないと、レミネス様は言っていた。

「……レイディル、君に聞いておきたい事がある」

「？」

いつの間にか、レミネス様の表情からは微笑が消え、真剣な目で私を見ていた。

「君は……その銃で、『聖血の封冥者』を撃てるかい？」

撃てる。私は心の中で即答していた。

勿論、気はすすまない。けれど私は、命を救ってもらったレミネス様への恩を、何としても返したい。その為なら、たとえ彼女が昔からの友達でも。

「……撃てます。必ず、この手で彼女を」

「そうか……。でも、僕はそうならないことを祈っているよ」

「え……？」

私が問う前に、レミネス様は体の向きを変えた。

「帰ろう、レイディル。と言っても、すぐにまたここに来るけどね」

そう言ったレミネス様の表情は、優しく微笑んでいた。

『命狩の執行人』……。思った以上に早く見つかった。と言うより、むこうから『聖血の封冥者』であるフィアラを見つけてくれたのだが。

「むかつくぜ……」

しばらく沈黙を保っていると、向こうから口火を切った。どうやらあまり落ち着きのない性格らしい。

「お前、何でそんなに涼しい顔してんだよ？自分の宿命に納得してるのか？」

妙な質問だ。宿命は宿命。避ける事などできない。納得するしない以前の問題だ。

「……どういう意味だ？」

「そのままの意味だっつもの。どうなんだよ！」

これは避けられる問題じゃない。それだけじゃないのか？

「……納得していると言わざるを得ないだろう。これが俺の宿命だ」
「俺が聞いているのは宿命がどうのとかの話じゃねえ！」

レイト（……と言ったか）が突然叫びだした。

かなりいらいらした様子で、頭を抱えている。

「お前自身はどう思ってるんだよ！お前個人はよ！」

「俺……個人だと？」

十年前に、これが宿命だとわかったとき、特に俺は何かを思ったわけじゃない。いや、あることはあったが、少なくとも宿命の事に關しては、何も考えなかった。

これが定めだと、流れに任せてケルベロスと戦ってきた。

しかし、この男は違う。

覚醒から十年たった今でも、己の宿命に納得できず、ずっと頭を抱えてきたのだろう。

「俺は……俺は絶対に嫌だ。何で突然、今まで過ごしてきた日常を、わけのわからない問題に壊されなきゃいけないんだよ！俺は普通に……俺は十年前まで、普通に人生を送ってきたんだ。なのに、古代の神だの何だの、どっかの夢物語みたいなありえない話のせいで、自分の手を血で染めねえといけなくなったんだ！何で……なんで俺なんだよ！」

俺に答を求めているのか、一人でただ叫んでいるのか、その判断さえつかなかった。少なくともこいつは、自分の宿命を憎んでいる。自分を黙示録の舞台へ上げた、己の宿命を。

「俺は嫌なんだ。宿命とか運命とかに左右されるのは。だから、お前みたいに『仕方ない』って顔した奴を見ると、この上なくむかつくんだよ！」

正直、むかつかれても困るのだが、己の意志をはっきりしない俺にも責任があるようだ。

俺にもフィアラにも言えることだが、古代よりの宿命がなければ、俺達はそれぞれの、なんら変哲のない人生を送ってきたはずだ。

一般人として世を生き、一般人としてこの世を去っていただろう。確かに『仕方ない』のかもしれない。けどな、最低限の抵抗ぐらい、してみようと思わないのかよ！」

現在に至るまで、レイトはこの宿命から逃れる術を探していたのだろう。とても常人とは言えない力を持った自分自身を、恐れていたのかもしれない。

願わくは、かつての普通な日常に戻りたいと……。

「お前みたいな自分の意志を持ってない奴に、『聖血の封冥者』は守れねえ。人間って言うのは、意志を持つからこそ、強くなるんだからな」

『狩る者の目』だったレイトの目が、さらに殺意を帯びた。

来る……！俺は刀をから解放した。相手は『命狩の執行人』……油断しては瞬殺される可能性もある。

「反抗的な目えしてるじゃねえか。そこまで俺は弱くない……ってか。なら、『神の威力』と呼ばれる『邪悪を砕く靱』の力、俺が試してやるぜ！」

レイトの大鎌が紅い光を帯びた。『命を狩る』ための力……あの紅い光は、血を表しているのか……。

奴の大鎌と同様に、俺の刀が蒼い光を帯びる。この光は、『邪を砕く』ための力を表す……。俺と奴……それぞれの力を示す色は、対照的なものだった。

そして、『冥を封じる』力……それを表す白き光を持つフィアラは、これから始まる戦いに、怯えているように見えた。

「……フィアラ、ここから離れろ」

「どうして……どうして争うんですか！同じ定めを持った仲間じゃないんですか？戦う事なんてないのに……」

最初、一目見た瞬間にわかった。フィアラは戦いを好まない。何事も、何とかして平和的に解決しようとする。

そんなフィアラにとって、本来共に戦う立場であるはずの俺達が始めようとしている戦いは、不毛なもの以外の何ものでもなかった。

「大丈夫だ。どちらも死にはしない。あいつもこっちに協力する気がないわけじゃない。だから俺に『封冥者』は守れないと言ってきたんだ。それ相応の力が無いと、お前は守れないからな」

本当に俺を殺すつもりなら、いちいち話をせずに、むかついた時点でかかってきたはずだ。しかし、それをしなかった。宿命を憎んではいるものの、自分の背負った責任は、全うしようとしているのだろう。

「早く離れろ。巻き添えを食らうぞ」

「……………」

納得はしていないようだが、フィアラは後ろに下がってくれた。

よし……これで心置きなく戦える。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！」

大鎌を上に掲げ、レイトが唸りだす。

ゴオオオオオオオオオオオオオオオッ！

突風が巻き起こり、ただならぬオーラがレイトを包んだ。

「……………」

「いくぞおおおおおおおおおおおっ！」

そう叫び、レイトは跳躍した。

第三章 同じ宿命を背負う者1

「うおらあああっ！」

ギインッ！

「くっ……！」

レイトの大鎌の刃が、俺の刀を斬りつけた。力任せに振っているため、元々勢いのある攻撃が、落下する勢いをのせて、衝撃を増している。

だった。相手は大鎌……あの形状はやりにくい。

俺が今まで相手にしたことがあるのはケルベロスのみで、人間と刃を交えた事などない。その初めての相手が、剣とかをもった奴なら、まだマシだったかもしれない。だが、レイトは大鎌だ。何度も言うが、やりにくい。一体世の中に何人、大鎌を持った奴と戦った人間がいるだろうか。もしいたなら、そいつが戦ったのは人間ではなく、死に神だ。

それはそれで凄いが、間違いなく負けたはずだ。このやりにくさは尋常じゃない。

「おおおっ！」

「ちっ……！」

俺の鼻先ぎりぎりを、大鎌の刃が通過する。今のは危なかった。避けた勢いのまま、俺は後ろに下がった。

「おい、どうした『邪砕靱』？ さっきから逃げてばっかじゃねえか」
レイトは俺を挑発するように、不敵な笑みを浮かべている。

やりにくい原因は大鎌の形状だけじゃない。俺とあいつでは、戦闘の仕方が明らかに違うのだ。

俺の場合、防御に長けていない刀では、無駄な攻撃は即、死に繋がる。そのため、確実に当たる状況でのみ、攻撃のチャンスが回ってくる。だが、あいつは違う。

レイトの大鎌は、元々やりにくい形状に加え、たとえ当たらなく

とも即攻撃してくる。その特攻の如き攻撃のせいで、こっちは攻撃態勢を取りづらい。

やりづらさ二倍と言うわけだ。

「……フン、冷静に分析中ってか。けどな、いくら分析しようが、無駄な事だぜ！」

地を蹴り、レイトは俺に向かってくる。

かなりのスピードだ。陸上選手かこいつは。

「ついてこれるか？ 『邪碎韌』！」

「……ぬっ！」

こいつ……分身した？

四人のレイトが、俺を中心に、円形に走る。

くそ……どれが本物だ？

「オルター……」

四人を順番に見比べているときだった。突如、四人のうち一人が一瞬で俺に近づき、斬った……はずだった。だが、俺を貫いたはずの刃は俺をすり抜け、レイトと共に消えた。偽者か……。

「イゴウ……」

安心したのも束の間、もう一度、今度は二人常時に接近してきた。

「うお……っ！」

慌てて攻撃を防ぐが、守れるのはどちらかだ。もし守れていないほうが本物なら、致命的な攻撃を受けてしまう。しかし、二人のレイトもまた、すり抜けた刃と共に消えた。

「俺はこっちだあっ！」

「………っ！」

振り向いたとき、すでに本物のレイトは、大鎌を振り上げていた。

「スラッシュ！」

ザンッ！

大鎌の刃が俺の肩を切り裂き、傷口から大量の血が噴き出した。危なかった……ぎりぎりで避けたからかすり傷で済んだものの、あと少しでも反応が遅れていたら、間違いなく心臓ごと切り裂かれて

いただろう。

分身と連携して敵を切り裂く技……。あのスピードがあつてこそ
のものだ。

「手ごたえねえなあ。本当に『神威の邪碎靱』かお前？どこが『神
の威力』なんだよ？」

奴は相変わらず不敵な笑みを浮かべている。眼鏡の先にあるのは、
挑発的な目だ。

誰だ、俺に『神威の邪碎靱』なんて異名を与えたのは？奴の言う
とおり、『神の威力』など欠片もないぞ。

あるとすれば……。

「……ちっ、つまらねえ。やる気あんのか？」

レイトはいらいらしている。

『神の威力』……その力を示すには、かなりの時間が必要だ。こ
の状況で、なんとか時間を稼がなくてはならない。

傷を抑えて、俺はダメもとで口を開いた。

「……聞かせて欲しい事がある」

「ああ？なんだよ」

どうやら問答無用で戦うつもりはないらしい。俺の言葉に対応し
てくれている。

それとも、ただ俺と戦う気がそがれたのか。

「何故フィアラが『聖血の封冥者』だと気付いた？少し見たぐらい
では、あいつは一般人にしか見えないはずだ」

ああ、そのことか。と、レイトは呟いた。

「簡単なこった。見たのが少しじゃねえんだよ。目的もなく街を歩
いてたら、やたらな女がいたんだ」

フィアラが反応した。

かなり恥ずかしそうな顔だ。挙動不審に見えていたことを恥じた
のだろう。

「まあ、わかってるみたいだし、あんまり言うのもかわいそうだけ
どよ、そいつがフィアラだったわけだ。いやあ、怪しかったぜ。か

なり」

レイトの言葉に、フィアラは恥ずかしさで赤くなっていた顔を、さらに赤くした。

レイトの奴……わかって言ってるな。

「で、怪しい奴だなど思ってみてたら、手にでっかい本を持ってるのに気付いたわけだ。その本がまた怪しい」

さっきから怪しい怪しいと連呼している。まあ確かに、怪しいかもしれない。

フィアラに『光の黙示録』を預けてからと言うもの、あいつはずっと『黙示録』をその手に握っている。その手から『黙示録』が離れた場面を、俺は見たことがない。

「紫色の表紙に、黄色い『封冥者』の紋章。それを見れば、その本が『光の黙示録』だってことはすぐにわかったぜ。確か、『闇の黙示録』は向こうさんが持つてるはずだからな」

レイトの言う向こうさんとは、勿論『神天使』のことだ。

以前にも言ったとおり、俺達側には『光の黙示録』が、『神天使』側には『闇の黙示録』がある。その二つが同化し、元々の書物に戻る事によって、『神天使』の封印が完全に解ける。

その辺の情報も、レイトは知っているようだ。

「まあ、それを見てから、フィアラが『封冥者』だって事に気付いたわけだ。それで、お、こいつがそうか。とか思いながらまたずっと見てたら、いきなりフィアラがこっちを向いてよ。いやあ、焦ったぜ。俺のことが怪しく見えたりしたら面倒だからな」

知らない誰かが自分をずっと見ている。女であるフィアラには、とんでもなく怪しく見えただろう。

「けど幸い、フィアラは自分から目を合わせたと思ったらしくてな。こっちから挨拶したら、普通に返してきたぜ」

流石だフィアラ。

天然もここまで来ると、賞賛に値する。ん？この場合、天然関係あるのか？

どちらでもいい。今はそんな事を考えている場合じゃない。

「まあ、それから二人で時間潰して、フィアラをお前との待ちあわせ場所に送ってったわけだ。大体わかったか？」

要するに、こいつがいなければ、俺はフィアラと合流できなかったわけだ。礼を言おう。心の中だけで。

しかし、思った以上に早く終わってしまった。まだ時間がある。

「じゃあ、そろそろいくぜ」

「ちょ、ちょっと待て」

俺は慌てて、向かってこようとするレイトを制した。今来られては困る。

「何だよ、まだあんのか？」

がっかりしたように、レイトはうな垂れた。

こいつ……そこまで戦いたいのか。

「いや、特に……ないが……」

まだ来ないでくれ。とは言えない。

どこに待ってくれるお人よしがいるものか。

「どっちなんだよ！ まあいい、そろそろ再開しようぜ」

そう言ったものの、様子を伺っているのか、レイトはなかなか来ない。俺にとっては好都合だ。

あと五秒でいい。そのまま……。

「行くぜ！」

レイトが向かってくる。

間に合え……間に合ってくれ……！

「やっぱりお前には『封冥者』は守れねえ！」

二……一……いける！ 魂の数は少ないが、放てる。

見せてやる……『神の威力』を！

ゴオオオオオオオオッ！

『神威の邪碎靱』に対する第一印象は、「世渡りが下手そう」だ。

だってそうだろ？

例えばあんな無愛想な野郎が、学校で先生に向かって、「おはようございます」って笑顔で言う。考えてみる、あり得ないだろ？

しかも常に「近づく者は斬る」的な雰囲気放ってるし、そんな奴が世渡り上手なわけねえんだ。

にしても、そんな奴に攻撃態勢を整える時間を与えちまうとは、俺も落ちたな。

ゴオオオオッ……！

『邪碎靱』の刀を中心に、竜巻のような風が起きてやがる。

刀自体もなんか光ってやがるし、こりゃ、ちよつとやばいかもな。「望みどおり見せてやるぞ！」

光る刀を上に掲げ、『邪碎靱』が跳躍する。

「受ける……『神の威力』を！」

刀の帯びた光が長く伸びていく……げっ、攻撃範囲は広そうだな。今から避ける……ってのは無理か。しゃあねえ、何とかして防ぐか。

「コンヴィクション・ソウル！」

馬鹿でかい光が、夜の街を照らす。その光は、俺に向かって振り下ろされた。

ドゴオオオオオオオオオッ！

「……なっ？」

マジで驚いた。

でかい音が響いても、一向に痛みを感じないから、目を開けて様子を見てみたんだ。

そしたら、俺の前にフィアラが立ってた。俺をかばったんだろうな。けど、フィアラも何ともなさそうにしてる。本人も不思議そうだ。

でかい音が響き続ける中で、俺はようやく状況を理解した。

フィアラを中心に、何か特殊な領域が円形に発生し、『邪碎靱』の攻撃から、俺やフィアラを守っている。

なるほど……そういうことか。俺は目撃したんだ。

『聖血の封冥者』の力を、この目で……！

やがて光が消えていき、『邪碎靱』が地面に着地するのが見えた。
「な……何？」

無傷の俺を見て、『邪碎靱』は本当に驚いていた。

いや、違うな。何よりも、フィアラが俺の前に立っていることに驚いていた。

そして、フィアラが無事であるのを見て、ほっとしていやがる。

「フィアラ……何とも無いのか？」

「え……あ、はい」

情けねえ返事だ。でもま、仕方ないよな。ついさっき起きたことに一番驚いているのは、フィアラ自身だ。

「……『命狩の執行人』」

「あ？」

フィアラの返事を聞いたら、今度は俺に話しかけてきやがった。どうやらもう、戦いがどうの言ってられる状況じゃないらしい。

「教えろ。ついさっき、何があった？」

「癒す……？」

「そう。『聖血の封冥者』の力は、ありとあらゆる攻撃を癒し、無効化すること。と言っても、防ぐ事ができるのは、僕の『神威の邪碎靱』や『命狩の執行人』の特殊な力に限られるけどね」

暗闇の空間で、私達は水晶玉を使って、彼らの様子を見ていた。私達のいるところだけを、上からの光が照らしている。だから、私とレミネス様の距離は、必然的に近く……。

何かが起こる度に、レミネス様は私に『謎』のことを話してくれる。『黙示録』の舞台についても、同様だった。

第三章 同じ宿命を背負う者2

『闇の黙示録』には『過去』が記され、『光の黙示録』には『未来』が記されている。

かつて、光と闇、二つの『黙示録』の元型である書物を所持していた『神天使』は、その本を持っていたが故に、他の神をする力を持っていたと言われている。

けど、その書物に何が記されていたのか。それはレミネス様も知らない。

『過去』と『未来』の両方か、それとも……。

今起こっていることのすべては、『光の黙示録』に記されているらしい。けれど、古代の文字で記されている為、解読は不可能……らしい。『邪碎靱』達やレミネス様は、それに記されている一連の事件の全てを、『黙示録』の舞台と呼んでいる。

「そして、その『聖血の封冥者』の力こそが、今回の『宿命の輪廻』……それらの決着をつける鍵となる」

太古より受け継がれてきた宿命。果てしなく長い間続いてきた『宿命の輪廻』を断ち切るための鍵……『聖血の封冥者』は、そういう意味を持って存在している。

でも、本人はそう思っていないような気がする。
皆そうなのだ。

たとえば大きな存在によって、自分の存在理由が決められていたとしても、自分で自分自身の存在価値を見出そうとし、日々迷走する。けど、もし自分自身で存在理由を見つけることができれば、人は限度のない力を発揮する。

これもレミネス様から聞いたのだけど、『神威の邪碎靱』や『命狩の執行人』、そして『聖血の封冥者』に備わる力は、それぞれ必要とされる意志がある。

それが何なのかは本人にもわからない。けど、必要とされる意志が

強ければ強いほど、彼らは強大な力を発揮する。

神の威力を持つはずの『邪碎靱』の攻撃が防がれたのは、『邪碎靱』に必要とされる意志が欠けていて、一方、『封冥者』に必要な意志が、強かったと言う事。

果たして彼女は、どういう意志を持って、宿命と戦っているのか……。

「レミネス様……」

「物分りが早くて助かるよ。さあ、行こう」

レミネス様が体の向きを変えた。

「……十年ぶりだね」

レミネス様が微笑む。でも、心からの微笑じゃない。

「決して祝福されることのない……兄弟との再会だ」

事情は聞いた。

まさか、『封冥者』にそんな力が備わっているとは……。ただ冥界の扉を閉じるだけではないと言う事か。

「おいフィアラ、もしあの力がなかったら、どうするつもりだったんだ？間違いないで死んでたぞ」

俺の横で、レイトがフィアラを叱っている。

フィアラがレイトをかばおうとした事に怒りはしない。問題は、もし彼女が死んでしまったときだ。彼女がいなければ、この宿命に決着をつけることができなくなる。

いや……俺にとって、それは本当の問題じゃないのだが。

「すみません。何も……考えていませんでした」
実にフィアラらしい返答だった。

彼女は馬鹿がつくほどに、子供のような純真さを未だに保っている。

普通、この年齢まできたら、現実を知り、世の中に絶望しているものだ。そこから新たな光を見出すか、絶望の闇に沈むかは、人に

よって違うが。

もつとも、俺にはそんな下らない事で悩んでいる余裕はなかった。悩もうともしなかったが。

「本当に……すみません」

「あ、いや、元はと言えばかばわれた俺が悪いんだけどよ……」

ずっと謝り続けているフィアラが心を痛めたか、はたまた、自分が情けなくなったのか。どっちであるかは知らないが、レイトが逆に謝りだしていた。

まるで下っ端が上官に、ぺこぺこ頭を下げているように見える。

レイト……お前、会社員に向いているかもな。

「……レイト、お前はこれからどうする気だ？」

いつまでもこんな緩い雰囲気のままと言うわけにはいかない。奴のこれからの行動によって、俺達の行動もかなり変わってくるのだ。「俺達と一緒に来る気があるのなら、そうしてほしい。俺一人ではいつまで『封冥者』を守れるか、わからないからな。しかし、それを望まないのなら、無理強いはいしない」

いくら宿命とは言え、俺たちは他人だ。

他人が他人の行動を決める権利など、ありはしない。

「……言ったら、俺は宿命に納得してないって」

つまり、俺たちと行動を共にするつもりはないと言う事か。戦力不足だが、仕方がない。

何とかして、俺がフィアラを守ろう。

「それは困るね」

突如、何者かの声が響いた。

この声……俺は知っている。十年ぶり……か。

「君達にはまとまって行動してもらわないと面倒なんだよ。妥協してもらえないかな？」

暗闇の奥から、小柄な少年が姿を見せた。

レイトよりも背が低く（俺よりレイトのほうが小さい）、その身長に見合った、幼い顔をしている。青い服、白いズボン……そして

その背中には、純白の翼がある。

「?……どなたですか?」

フィアラはのんきだが、レイトは違った。

「あの翼……おい、『邪碎靱』!」

やはりわかつているか。

俺は鞘におさめていた刀を解放した。

「ようやく出てきたか……『神術しんじゅつの仮面児かめんじ』!」

『神術の仮面児』……それは、『神天使』の魂が宿っている者が呼ばれる異名。未来を見据え、古代の神が残した名。

俺達の敵と呼べる存在であり、そして……。

『神術の仮面児』は、やっぱりか……。と、ため息をついた。

「思ったとおり、異名で呼ぶんだね。冷たい弟を持ったものだよ」

「……………」

「え……ええっ?」

「な、何だってえっ!」

フィアラとレイトがた。

レイトは当然だが……フィアラにも話していなかったか。

「お、弟……?じゃあ、あいつは……『邪碎靱』、お前の……」

「お、お兄さん……?」

「達哉が世話になっているね。『命狩の執行人』……そして、『聖血の封冥者』」

『仮面児』め……余計な事を。

確かに血縁はあるが、今の俺たちに、そんな事は関係ない。

「お前と俺は今や赤の他人だ。気安く名を呼ばないでもらおうか」

「変わらないね。まあいいけれど」

まあいいと言いつつ、『仮面児』はため息をつく。

変わらないのはどっちだ。いつも穏やかな表情を浮かべて……。

見ていて腹立たしい。

昔からそうだった。幼い頃の俺があいつに何をしようが、『仮面児』は常に微笑を浮かべていた。怒るわけでもなく、悲しむわけで

もなく、ただ微笑んでいた。

しばらくの間は、奴を気性の穏やかない兄だと思っていたが、ある程度年月を重ねると、段々奴の事が腹立たしく思えてきた。

兄としてのプライドもなく、ただ微笑んでいるだけ……。

そのうち俺は、奴と一切会話をしなくなっていた。

そして今も、俺は長時間奴と話すつもりはない。

「来るのかい？ 構わないよ。君じゃ僕には勝てないからね」

「フン……。どうやら、『神天使』が目覚めて、さらにたちが悪くなつたみたいだな。

しかしその方が、敵として認識しやすい。

俺は刀を構え、奴に向かって走った。しかし、結果的に届かなかった。

「怒りと言う名の破壊魔よ、全てを焼き尽くせ！」

前に出された『仮面児』の手に、火球が発生した。その火は、徐々に大きさを増していく。

「ゴウマッド・ブレイズ！」

火球が『仮面児』の手から放たれ、高速で俺に向かってくる。

神術……。神の力が持ちうると言われる魔術。いや、魔術と言う言葉そのものが、神の持つ神術を、人が真似たもの。人を遥かに超える者の力である。

人である俺は、刀を盾に、防御態勢を取る他になかった。

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……！

「神崎さん……！」

「やばい！ フィアラ、離れるんだ！」

火球が炎の柱へと変化し、雲を貫いて燃え上がった。やがて燃え盛る音が大きくなり、爆発した。

爆発によって、俺は近くの建物の壁に叩きつけられる。

「がはあっ！」

「神崎さん！」

フィアラが駆け寄ってきた。見たところ怪我はないようだ。

レイトに感謝しなければならない。もしあいつがとっさにフィアラと、あの火災から離れていなければ、フィアラが死んでしまっていたところだ。あの爆発によって、半径二十メートル程の地面が吹き飛んだ。フィアラの元々いた位置では、確実に巻き込まれていた。先程フィアラは、『封冥者』の力を見せたばかりだが、それが必ずしも発動するとは限らない。

「大丈夫だ……。お前は離れている……」

何とか立ったが、そうしたところで打つ手はない。

正直、今自分が立てていることさえ不思議なぐらいだ。運がいいのか、それとも……。

「さっきの勢いはどこに行ったのかな？……と、悪役にありがちな事を言ってしまったね」

仮にも『神術の仮面児』と言ったところか。

神の力を半分持っているだけあって、さすがに圧倒的な力だ。

……そう、半分だ。

「勘違いをしているようだから言うけど、別に僕は戦う為にきたわけじゃないんだよ」

「何……？」

目的はフィアラではないと言う事か。では、一体何を……。

「折角僕の敵が三人とも揃っているわけだし、まとめて掃除する方法を思いついたから、それを実行しようと思ってね。生き地獄とも言おうかな」

どうやら神術で俺たちをまとめて消し去るわけではないらしい。

相変わらず中途半端な手を使ってくるものだ。腹立たしい。

「我、神の名の下に、太古に閉じられし扉を、今一度解き放たん！」

「……なっ！」

俺は今、『仮面児』の言葉の意味を理解した。

生き地獄……まさしくその通りだ。奴が今開こうとしているのは……！

「冥界の扉よ、開け！」

ヴオオオオオオオ………。

俺たち三人がいる周辺の地面が、黒く色を変えていく。三人とも冥界へ送ろうと言うのだ。生きたまま……だ。

「おい、どうすんだよ！」

「くっ……！フィアラ、俺に捕まれ！」

「は、はい！」

黒い地面に飲み込まれ、俺達は闇へと落ちた。

それにしてもあっさり片付いたものだね。

まあ、冥界への扉を開いたわけだし、当然と言えば当然だけど。

「……レイデイル」

「はい」

建物の上から、レイデイルが降りてきた。

僕が彼らを相手にしている間、レイデイルには隠れていてもらった。

そっちのほうが、面白そうだからね。

「君も冥界へ赴いて、彼らの追撃を行ってくれるかな？落ちただけじゃ、彼らは死なないからね」

「……レミネス様、一つお聞きしたい事があります」

おや、さっきのお返しかな？

「何？」

「レミネス様は、本当に彼らを殺すおつもりなのですか？」

……なるほど、流石に鋭いね。確かに、僕の真意は別にある。けれど、今は……。

「もちろんだよ。だから君を差し向けるんだよ」

「……わかりました。行ってきます」

納得はしていないようだけれど、どうやらそっとしておいてくれるつもりらしい。

彼女は三人を追って、冥界へ入った。

「……君にもいつか話すよ。本当のことをね」
もつとも、それを話すときには、この『宿命の輪廻』は断ち切られて
いるだろうけど……ね。

第四章 現の裏世界1

十年前、そのときが来るまで、俺と『仮面児』は、仲が良かった。でもなく、悪いわけでもなく……要は普通の兄弟だった。どこにもいそうな感じの……だ。

あいつだって、何も生まれた瞬間からあんな感じだったわけじゃない。もしそうだったら、即両親は殺され、俺は生まれてこなかっただろう。

あいつの中で『神天使』の封印がとかれたのは、あるきっかけがあったからだ。

ある日、俺が部屋で寝ていると、兄さんが俺を起こした。

「達哉、起きてくれる？」

「……何、兄さん？」

当時俺は七歳だった。

物事を深く考えられる歳ではなく、人間の醜い感情などを知っている年齢でもなかった。

人間というものは、幼い時期は夢と希望にあふれ、本当に自分が何でもできるかのように思える。しかし、時がたつにつれて己の小ささを知り、夢のままでは何も叶わないことも知る。そこから先、『目標』と言うものを携えて世を生きるか、一度絶望した人生に光を見出せず、世を細く生きるかは、人によって違ってくる。

俺の場合、現実というものを知るのは、この直後だ。

「達哉、開かずの部屋へ行ってみない？」

俺達の家には、両親から決して入ってはいけないと言われている部屋があった。その部屋の扉には常に、通常の鍵に加え、さらに無駄にでかい錠前がかけられている。

俺たちはその部屋を、開かずの部屋と呼んでいた。安易な名前だ

が、ガキだった当時の俺達は、その名前が気に入っていた。

「え……いいの？父さん達に怒られるよ？」

我ながら情けなくなるほどの気の弱さだ。

当時の俺は泣き虫なほうで、今とは別の意味で周りから孤立していた。まあ、幼い時期には良くある事だ。

「見つからなければ何も言われないよ。もし見つかったら、僕が強引につれてきたことにするから」

俺はこのとき、何故『仮面児』がそこまでして、俺を連れて行くとするのかわからなかった。しかし、今考えてみると、全くわからないと言うわけでもない。

もしかしたら、兄さんは止めてほしかったのかもしれない。

勿論、兄さんはまだ、自分に『神天使』の魂の半分が封印されている事を知らない。しかし、兄さんは本能的にそれを知っていて、俺に同行を求めたのではないだろうか。

「う、うん……」

結局、俺は兄さんと一緒に開かずの部屋へ向かった。

正直、開かずの部屋の中に何があるのか、興味があった。

ガキというのは好奇心で、見たもの聞いたもの、手当たり次第にそれが何であるかを知らうとする。世の中には知らなくても言いものがあると言う、年寄りの気持ちがよく分かる。

本当に世の中、触れれば怪我をするものばかりだ。それを知っているからこそ、親は子が、全てを知る事を恐れ、何とかして止めようとする傾向があるのだ。

開かずの部屋の前に着いた。同じ家の中にあるのだから、早く着くのは当然である。

やはり、扉は硬く閉ざされている。だから開かずの部屋なわけだが。

しかし驚いた事に、兄さんはどこから持ってきたのかは知らないが、懷から次々と工具を取り出し、開かずの部屋の扉を開ける作業を始めた。

まずはキーピックを取り出し（こんな物家の中にあつたか？）、
でかくて重い錠前を外しにかかった。どこで学んだのか、兄さんは
その錠前を、やけにあっさりと外してしまった。

それを見た俺は、本気で兄さんの器用さに感心していた。

次に、扉そのものの鍵を外し始める。まずは金具を部分について
いるネジを、ドライバーで外していく。俺は何をするわけでもなく、
その様子をただ黙ってみていた。

全てのネジを外すと、金具の部分が勝手に落ちてきた。

「あ……！」

このまま落ちてしまつては、両親に見つかつてしまう。緊張の一
瞬だったが、兄さんがそれを受け止め、ゆっくりと床に置いた。

兄さんはほっと胸をなでおろし、次の作業に取り掛かる。

金具だけを外しても、鍵は開かない。もう一度キーピックで、さ
っきのように鍵を開ける必要があるのだ。

五分ほどして、カチッという音と共に、扉の鍵が開いた。俺達は
顔を見合わせた。

「行くよ、達哉」

「うん」

扉を開け、俺は兄さんに続いて、開かずの部屋に入った。

真っ暗だった。辺りを見回したが、照明もそれをつけるスイッチ
も見つからなかった。

「達哉、あれ」

「……え？」

兄さんの指差す方向に目を向けると、台座の上に分厚い本が乗っ
ているのを、何とか見る事ができた。真っ暗な部屋に、目が慣れて
きたせいかもしれない。

そんなところに本が置いてあるのだ。取りに行かないわけにはい
かない。

兄さんが本へ無造作に歩み寄り、その本を手を取った。

「？……何だろう、この本。これが父さん達の隠していた物なのか

な？」

と、兄さんが本を開いた、そのときだった。

ブアアアアア……ッ！

突如本から光が発せられ、糸のような細い光が兄さんを包んだ。

「え……え？」

「に、兄さん、大丈夫？」

実際に光に包まれているのは兄さんなのだが、本人よりも俺のほうが慌てていた。

当然だとは思わないか？目の前で未知の怪奇現象が起こっているのだ。むしろ、冷静でいられる兄さんの神経を疑いたい。

「何だろう……なんか面白いな」

しばらくは興味深そうに微笑んでいた兄さんだったが、その微笑みはすぐに消えてしまった。

兄さんを包んでいた光が一本になり、兄さんの胸部を貫いたのだ。

「！……兄さん！」

「う……あ………」

確かに光は兄さんを貫いたが、何故か血は流れていなかった。まるで肉体ではなく、兄さんに宿っている何かを貫いたかのように。ヴオン。

突如、兄さんから、封と書かれた円形の陣のようなものが出てきた。兄さんを貫いたものとは別の色の光で、その陣は形成されている。

その陣こそ、『神天使』の魂を封じた陣だったのだ。

兄さんを貫かれた以上、その陣も貫かれてしまっていた。光の陣に、徐々にひびが入っていく。

パライイイインッ！

その陣がガラスの様に砕けたとき、兄さんが大きく目を見開いた。「うわあああああああああああああああああああああああああああああああっ！」

ゴオオオオオオオオオッ！

兄さんが悲鳴をあげたかと思うと、今度は兄さん自身から光が発生し、出てきた光は二つに分かれ、兄さんの背中でその形を徐々に作り上げていった。

カッと強い光が放たれ、辺りを一気にまぶしくした。目を開けたとき、さっきとは明らかに状況が違っていた。

兄さんの背に翼が生え、その翼を羽ばたかせ、兄さんは宙を飛んでいた。いや、その時既に、兄さんは兄さんではなかった。目の色が変わり、その目は狂気に満ち、俺のほうを見下すように見下ろしている。

「……我……『神天使』の名の元、黒き世界の扉を開き、現世を暗黒へと導かん……！」

この時だった。兄さんの中で『神天使』の魂の半分が目覚めたのは。

兄さんの後ろで黒い空間が広がり、やがてそれは部屋を飲み込んでいく。

「達哉、何があった！」

開けられた部屋の扉の外から、父さんが入ってきた。後ろに母さんもいる。

そして二人は、兄さんの様子を見て、こう言った。

「目覚めてしまったか……『背徳の神天使』……！見てしまったのか……『闇の黙示録』を」

勿論、当時の俺にはわけがわからなかった。

「祐、お前が『神術の仮面児』となる事を、何とかして避けたかった……」

『背徳の神天使』……？『神術の仮面児』……？謎だらけだ。ただわかるのは、祐兄さんの様子が、明らかにおかしい事だけだった。……兄の名。『背徳の神天使』の半分の魂を宿し、『神術の仮面児』となる宿命を背負った者。

そう、俺の両親は全てを知っていた。兄さんに『神天使』の魂が宿っている事も。そして俺が何であるのかも。

「冥界の扉よ……開け……！」

この瞬間、冥界の扉が開かれ、冥界と人間界つながった。

冥界の狂犬ケルベロスが、何処かへと走っていく……。殺しに行ったのだ。『聖血の封冥者』を。

そして、俺が自分自身の異変に気付いたのも、その瞬間だ。

脈拍が上がっていた。異常なほどに。ひどい頭痛もした。俺の心の中で、何かが解き放たれていくのがわかった。

「ああああああああああああああああああっ！」

突然の頭痛に耐え切れず、俺が悲鳴をあげたときだった。

兄さんのときと同じように、俺自身から光が放たれ、ある一つの形を作っていた。

「達哉……お前も目覚めるのか。『神威の邪碎靱』として……」

父さんは俺と光を見つめていた。母さんにいたっては、その場にかがみこみ、泣き出している。

「祐哉さん……私達は……太古の宿命を背負いすぎたのよ」

かがんだまま、泣きじゃくりながら母さんは父さんに目をむける。

父さんは、絶望に沈む母さんの目を、ただ見つめ返していた。

そして、光が形の形成を終え、俺の手に降りてきた。

刀だった。

「ガルルルル……ッ」

さっき出てきたケルベロスのうち何匹かが、俺に向かってきた。

このとき、俺は考える余裕をなくし、刃を鞘から解放し、向かってくるケルベロスを、次々に斬っていた。

何故六歳のガキがケルベロスなぎ倒せたか……。それは俺にもわからない。今の俺がやっても、恐らく再現はできないだろう。

目覚めたばかりの力を抑えきれず、バーサーカー状態だったのかもしれない。

「うああああああああああああああああっ！」

ケルベロスなぎ倒した勢いで、俺は兄さんに斬りかかっていた。ズバアッ！

斬った。確かに斬った。しかし、相手が違っていた。

俺が斬ったのは、兄さんではなく、兄さんをかばった母さんだった。

「うっ……ゴブッ！」

「……か……母さん？」

母さんが血を吐いた。俺は正気に戻った。母さんの口から吐き出された血が、俺の服を赤く染める。

「真由菜っ！しっかりしろ！」

父さんが母さんに駆け寄り、母さんの身体を揺さぶった。

わけがわからなかった。俺の目の前で、母さんが血を出してぐったりとしている。自分の手には、血の付いた刃物がある。自分がやったのか……？母さんを……斬ったのか？

追撃するように、兄さんが掌を母さんと父さんに向ける。

それを見た父さんは、俺のほうに振り返った。

「達哉、金庫の中だ。そこに全ての鍵を握る物が入っている。番号は——」

バシユッ……！

父さんが俺に番号を伝えた直後、兄さんの手から光線が放たれ、母さんと父さんを貫いた。

「頼むぞ……『神威の邪砕靱』よ」

そう言い残し、父さんは母さんと一緒に、動かぬ屍となった。

そこからしばらくは覚えていない。気が付くと、そこに兄さんはいなかった。

俺のことを気になかったのか、または兄さんの意志が蘇り、俺を見逃したのか……真相はわからない。しかし、俺の目の前には、父さんと母さんの遺体が転がっているだけであつた。冥界の扉も閉じている。

少しの間、俺は行動すると言う事を忘れていたが、父さんの最期の言葉を思い出し、金庫のある部屋へ向かった。

その部屋には、四角い小さな……しかし頑丈そうな金庫が合った。

父さんに言われた番号を入れると、金庫は開いた。中には、分厚い本があった。

第四章 現の裏世界2

気が付くと、フィアラが泣きそうな顔で俺を見下ろしていた。俺が気付いたのを見て、フィアラの表情は笑顔に変わった。

「神崎さん……！良かった……心配したんですよ！」

心底心配していたらしく、まるで自分のことのように喜んでいる。心配されている自分が、嬉しくもあり、情けなくもあった。

「……見ていたのか？」

「……………」

フィアラは黙り込んだ。

俺はついさっきまで、昔の夢を見ていた。『仮面児』と俺が目覚めたきっかけ……全ての始まりの夢を。

恐らく、フィアラは俺と同じものを見ていた。

「『封冥者』の力か……妙な力だな」

「す、すみません……」

フィアラが本当に申し訳なく思っているのがわかった。

多分俺を心配して、頭に触れるなり何なりしたのだろう。その瞬間にフィアラの感覚と俺の夢が繋がったのだろう。要するに、不可抗力と言うわけだ。

「気にする事はない。俺も……いずれ話さなければならぬと思っ
ていたからな」

『仮面児』が俺の兄であると言う事に、彼女は疑問を抱いている
はずだ。

それぞれ別の一族に与えられたはずの宿命……。そのうち『聖血
の封冥者』と『命狩の執行人』を除く全ての宿命を、俺の一族が背
負っているのだ。

『神威の邪碎靴』……『神術の仮面児』……『背徳の神天使』……
『光の黙示録』。そして『闇の黙示録』も。

「恐らく、現在に至るまでの間に、お前と『執行人』を除く一族と

結婚し、宿命の殆どが、俺の一族に集中してしまったんだろう。少しずつ……『黙示録』に記されている内容がずれてきているな」

当時六歳の俺が『光の黙示録』を開いた時、今とは違うシナリオが書かれていた。

『神威の邪砕靱』と『神術の仮面児』が兄弟などとは書かれていないし、ましてや『光の黙示録』と『闇の黙示録』が同じところにあるなど、記されているわけがない。

もしあの時、『神天使』に操られていた兄さんが、『光の黙示録』を見つけていれば、『神天使』は完全復活し、今頃はこの世にいる全ての人が、冥界へ送られていただろう。

どうやら、神達の予期したシナリオとは、全く違った方向へ進んでいるようだ。

「ここは冥界か……『執行人』はどうした？」

「呼んだかよ？」

レイトは意外と近くにいた。俺の意識が戻るのを待っていたのだろう。あぐらをかいて座っている。

「……ったく、やけに長い間くたばってたじゃねえか。待ちくたびれたぜ」

レイトは立ち上がり、大きく伸びをした。

相当待たせてしまったのだろう、かなり眠そうだ。

「で、これからどうするよ？」

ものの見事に冥界へ落とされてしまった。冥界の扉はもう閉まっているし、ここから出るのは簡単ではないだろう。

冥界とは無論、死者の集まるところだ。その中に三人も生きた人間が紛れ込んでしまったのだ。この世界の住人達にとって、俺達は招かれざる客……。場合によっては攻撃されるかもしれない。

「とりあえず、ここを出ようぜ」

「……『執行人』、何か考えがあるのか？」

正直、期待はしていない。

こいつはさっき、自分が望んでいる事を言ったただけだ。何かしら

の考えがあるとは思えない。

「ねえよ。けど出るんだよ！」

最早意味がわからない。

外に出たい。でも方法はわからない。でも出たい。どこのガキだ。とりあえず、冷たい目を向けてみる。

「……な、何だよその目は！」

まだ向けている。

「お、おい……」

まだだ。

「……」

まだまだ。

「……ああ、もう！悪かったよ。だからそんな目で俺を見るな！」
勝ったな。何の勝負かは置いといて、とにかく勝った。

「おい、『邪碎靱』」

さっきとは違うノリで、レイトが話しかけてきた。

「俺のことを『執行人』って呼ぶな！」

「？……お前も俺を『邪碎靱』と呼んでいるぞ」

はっ……！

言ってみて気づいた。

『邪碎靱』、『封冥者』と、『執行人』の決定的な差に。

「お前やフィアラはまだいい。けど俺の場合、『執行人』じゃ意味がわからねえんだよ！」

『邪碎靱』は、意味がわかればわざわざ『神威の』をつけなくても伝わる。邪を砕く刃だ。少し漢字が難しくなっているが、問題はない。『封冥者』はそのままだ。『冥界の扉を封じる者』縮めてある事がわかる。これも問題ない。

しかし、『命狩の執行人』の『執行人』は、『命狩の』をつけなければ、一体何を『執行する者』なのかわからない。俺やフィアラのように伝わらないのだ。

「いいか、俺はレイトだ！絶対に『執行人』って呼ぶなよ！」

「……わかった。わかったから静かにしろ。下手に見つかったら面倒だ」

何に見つかるか。それはわからないが、とりあえず用心しておくに越した事はない。

とりあえず呼び名については、適当に済ませておく。

「よし。じゃあ気を取り直して、ここから出る方法でも考えるか」
そう言って、レイトは頭を抱えて悩みだした。

忘れた人のために言っておくが、レイトは眼鏡をかけている。なので、初対面の人間は、あいつが頭の言い人間のように思えるだろう。だが、それは大きな勘違いだ。

こいつは別に頭がいいわけじゃない。むしろ精神論を吐いて壁を砕こうとするタイプだ。

……せいぜい、いい案が出ることを期待しておこう。

「あの……神崎さん？」

「?……どうした」

「ここ……冥界ですよね？」

「ああ」

「と言う事は、この世界をまとめる方がいらっしゃいますよね？」
「だろうな」

「太古に、『神天使』との戦いで、人を勝利に導いたのは、誰でしたっけ？」

「前に話しただろう。冥……」

——っ！

そうだった。ここは冥界なのだ。

気付くのがあまりに遅かった為、フィアラは半分呆れ顔である。

「……フィアラ、もう少し早く言ってくれないか」

「な、何だよ、どういうことだ？」

不思議に思ったレイトが話に入ってくる。

フィアラは意外と頭が切れる。……と言うより、気付かない俺がおかしいのだが。

「太古に人間に協力した冥王なら、俺たちを出してくれるかも知れない」

フィアラはこれを言いたかったのだ。

敗北しかけていた人と神の連合軍に冥王が参加した事によって、一気に戦況が覆ったのだ。何故人に協力したのかは知らないが、門前払いされることはないだろう。

「何だそういう事かよ。実は俺もそれを考えてたんだ」
嘘だな。

俺とフィアラは、もう一度レイトに冷たい目を向けた。

「う……すみません、嘘です」

……まあ、何はともあれ、こういう軽い雰囲気で行動するのも、なかなか悪くない。

俺は笑っていた。フィアラも笑っていた。レイトも笑っていた。ずっとこのままと言うわけにはいかないが、できるだけ長く、こういう時間が続いてほしかった。だが……。

「のんきなものね」

「……！」

どこからか声がした。声と共に殺気が辺りの雰囲気を一気に重くする。

この声……俺は知っている。一瞬ではあるが、俺はこの声の持ち主と会った事がある。それは俺よりも、フィアラのほうが先に気付いたはずだ。

「この声……まさか……」

「久しぶりねフィアラ。いえ、『聖血の封冥者』さん」

気が付いたら、私は叫んでいた。

昔からずっと仲良しだった友達の名前を。

「レイディル！」

私は走り出そうとした。

大切な友達が目の前にいる。もつと近くで話したい。

けれど、神崎さんが私の腕を掴んだ。

「よせ！行くんじゃない！」

「離して下さい！何で邪魔するんですか！」

必死で腕を振り払おうとしたけれど、神崎さんは私を放さなかった。

「落ち着いてよく見ろ。奴が手に持っているものを！」

「て、手……？」

言われたとおり、レイディルの手に目を向けてみた。

その手に収まっているものこそ、神崎さんが、私をレイディルに近づけなかった理由でした。

「け……拳銃……？」

「悪いわね、フィアラ。私はあなたとの再会を喜び合うつもりは無いの。むしろその逆」

ゆっくりと、拳銃を握り締めたレイディルの手が上がる。

その銃口は、私に向けられていた。

「私はあなたを殺しに来たのよ。『聖血の封冥者』」

衝撃的でした。銃を向けられたこともさることながら、名前ですら呼んでももらえない事に。

啞然としていると、神崎さんが前に出ました。その腰に納まった刀を、鞘から解放しながら。

「……どうやら冥界の住人と言うわけではなさそうだな。フィアラを殺しに来たと言ったが、何故だ？」

「簡単な事。レミネス様の意志……そう言えばわかる？」

レミネスか……！

それは、太古に冥界の扉を開き、人々に破滅を予感させた『背徳の神天使』の名。恐らく、レイディルの言うレミネスは、神崎祐……『神術の仮面児』のことだろう。

あいつ……まさかレイディルを助けているとは。

「……つまりは、俺たちをここで葬る為に来たのか？」

「そういうこと。私は命を助けてもらった身。レミネス様の意志は絶対よ」

まづいな。

フィアラは未だに啞然としているし、レイトは状況を理解していない。今この状況でともに戦えるのは俺ぐらいか……。とは言え、相手は遠距離用の兵器を持っている。近距離でしか戦えない俺やレイトでは不利だ。しかし、俺達の中に、遠距離で戦える人間はいない。厳しいぞ。

「刀や大鎌みたいな近距離武器では、遠距離兵器に勝てないわ。賢いあなたならわかるわよね？」

それにしてもレイディルめ……。やけに雰囲気が変わったものだ。

レヴィジット邸で会った時は、落ち着きのない騒々しい女にしか見えなかった。しかし今は、あまりにも落ち着いていた……。いや、割り切った言うべきか。そんな目で銃を向けてきている。

「確かに、現状でお前に勝てる可能性は低いだろう。だが、こちらこそ簡単に『封冥者』を死なせるわけにはいかない……！」

フィアラは言わば、人が全滅してしまう事を避けられる唯一の希望だ。

『黙示録』に詳しくは書いていなかったが、フィアラには『特殊な力を癒す力』、『他人と心を繋げる力』の他に、まだ見ぬ力を持っている。恐らくその力が、人類を救う為の力なのだろう。

今思えば、『黙示録』には肝心な事がかかれていないな。

「それはいいけど、どうする気？ そっちのお姫様は、半分気を失っているわ」

フィアラ……いつまでボウツとしているつもりだ。

かつての友が敵になったのだ。シヨックなのはわかる。しかし、このままでは、お前がその命を落とす事になる。それがわからない程、お前は馬鹿じゃないはずだ。

「止まった的を撃ち抜けないほど、私の腕は悪くないわよ」

「なら、狙う暇を与えなけりゃ良いだけだろ？」

ザクッ！

レイディルの後ろから、レイトが大鎌を振った。ぎりぎりで気付いたレイディルがそれをかわし、大鎌は地面に突き刺さる。

「お前とフィアラがどう言う関係なのかは知らないけどな、『封冥者』の命がかかってるんだ。俺も黙ってるわけにはいかないぜ！」

「どうやら、状況を把握しなければ戦えない……と言う訳ではなさそうだ。」

近寄り方と言い、今の一撃と言い、なかなかのものだった。

「さすがは命狩りの専門家ってところかしら。今のは危なかったわ」

「へっ！いつまでもそんな幸運が続くと思うなよ。おら『邪碎靱』、やるぞ！」

「……ああ！」

俺たちは同時に、レイディルを挟み撃ちにする形で走った。

ガウンッ！

静かな冥界に、高く太い音が響いた。銃声を聞いたのは久しぶりだ。

私がまだ冥王となっていなかった頃は、兵器の音など、休むことなく聞こえていたものだな。

それはさておき、一度安定した世界を荒そうとするのなら、放っておくわけにはいかん。冥界の秩序は、冥王たる私自身が守らねば。

第五章 『永劫の真冥王』 1

最初の一撃を外したのは痛い。

あれで決めるつもりだったのに、よけられちゃった。ここから先面倒だぞ。

遠距離兵器相手に近距離武器がともに戦う為には、相手が狙いを定める前にこっちの射程内まで近づいて、一気に決着をつけるしかない。短期決戦ってやつだ。

相手の射程は広い。一度離れられたら、もう一回近づくのは至難の業だ。

まあ、銃なわけだから、いつかは弾切れを起こすだろうよ。けど、そんなすぐに弾が切れるほど、備えを怠るような奴には見えないし、そこまで弾を無駄遣いするほど、腕の悪い奴とも思えない。

ガウガウガウンッ！

さっきから弾を撃ちまくって、一見無駄に弾を消費しているように見える。けど、実際は俺たち、避けるので手一杯だ。いつまで避けていられるかもわからねえし、ましてや攻撃に移る余裕なんてどこにもない。おいおい……いきなり絶体絶命じゃねえか！

「あはははっ！どうしたの、古来より受け継がれてきた戦士の力はそんなもの？」

あいつ……笑いながら撃ちまくってやがる。どう見ても危ない奴じゃねえか。

刃物を持っている俺たちも十分危ないって言われそうだが、それとこれじゃ意味が違う。

それとも……自暴自棄にならねえと人を撃てないほど、根はまともな奴なのか……。

「レイディル・ニアス！俺やフィアラはお前と戦う事を望んでいない。一度退け！」

何甘いこと言ってるんだ。

以前に何があったのかは知らねえが、あいつは敵なんだ。のんきな事言ってたら、こっちが殺されるぞ。

「はあ？馬鹿じゃないの？私はあなた達と戦う事を望んでいるのよ！」

ガウンッ、ガウガウンッ！

にしても、あいつは一体何者なんだ。『神天使』の意志でどうのこうの言ってたけど、『黙示録』には『神天使』に仕える人間なんて記されてないはずだ。

俺は最初、『光の黙示録』も『闇の黙示録』も持ってなかったから、何が何だか分からなかった。だから、俺は俺なりに、古代の事に関する情報をできるだけ集めたんだ。

数年間それに関する情報を集めていたら、『黙示録』に書かれている事の断片を見つけることができた。

そこに記されていた主な関係者は、『神威の邪碎靱』、『聖血の封冥者』、『命狩の執行人』、『神術の仮面児』。そして『背徳の神天使』だ。あの女のことなんてこれっぽっちも書かれてなかった。まあ、少しずつ『黙示録』に書かれている内容からずれてきてるみたいだし、予定外の人間が絡んできても、別におかしくないわけだけだ。

ガウンッ！

「ぐっ……！」

色々な事を考えているうちに、イレギュラー女の撃った一発が、

『邪碎靱』の足に当たっちゃった。

あの馬鹿が……あれじゃ良いのだ。

「あら、『神の威力』を持つ者も、攻撃できなければ無駄なことね。私みたいな一般人にやられるなんて」

『邪碎靱』の奴……間違いない迷ってやがる。

とは言っても、あいつに女の友達がいるとも思えねえし、そう簡単に他人を近づけるほど、社交的な奴でもないはずだ。直接的な原因があいつ自身でないとすると……。

「やめて、レイディル！」

フィアラの声が響いた。

『邪碎靱』の前に立って、両手を広げてる。馬鹿、お前が『邪碎靱』をかばってどうするんだ！

「どうして……？ あなたはこんなことできる人じゃ……」

「事情はさっき説明したはずよ。勝手に人の人格を自分の価値観で固めないでくれる？」

ああ、確かにそうだよ。お前の言っている事は正しいよ。

フィアラ……何があったのかは知らねえけどさ、今は離れたほうが良いぜ。向こうはお前を殺す気なんだ。のろいお前じゃ、あいつの弾丸が直撃するぞ。

味方だと思っていた奴が突然敵になる……。状況は違っても、世の中じゃよくある事だ。

いくら仲良しでも、簡単なきっかけで、争わなきゃいけなくなる。俺はそういう状況になった奴を、何人も見てきたし、おれ自身もそういう目に遭ってきた。

体験者として言うけど、そう言うときのショックは尋常じゃない。だから、フィアラの気持ちかわからないわけじゃない。けど、今はそんな事に迷ってる場合じゃないんだ。

俺がそれを味わったのは、高校受験の時だ。ダチと同じ学校を目指していたんだけど、その学校はかなり人気があって、よほど言い点を取らないと合格できないって、担任から言われた。

その時から、そのダチの態度が一変した。やたら嫌味を言うてくるんだ。

この時期になっても勉強しないなんて、余裕か？ だの、あの学校はお前に行けるほど甘い場所じゃない。だの、俺を見かけたら、瞬間そんな事を言いやる。

それに耐え切れなくなって、俺はそのダチだった奴を一発ぶん殴って、それから一切口を利かなくなった。

まあ、その程度の友情だったってことだ。

受験どうのこうので切れちゃうほど、薄っぺらい友情だったんだ。薄っぺらかったからかも知れねえけど、俺はそいつの事を割り切って、敵だと認識し直した。結局、あいつは不合格で、俺は見事に合格したわけだけど。

まあ……あれだ。敵になっちまったらなっちまったで、割り切れってことだ。

よし、後でフィアラにガツンと言ってやろう。絶対だ。

「……フィアラ、離れろ……」

「神崎さん……？まさか、戦う気なんですか？」

お、『邪碎靱』の目つきが変わったな。やっと戦闘モードに入りやがった。

思ったとおり、『邪碎靱』が迷っていた理由は、フィアラがあのイレギュラー女と戦いたくないと思っているからだ。けど、向こう側がフィアラに危害を加えようとしている以上、戦いたくないなんて意志にえるわけがない。あいつにとって一番大事なのは、フィアラの意思じゃなくて、フィアラ自身だからな。

「向こうがその気なら、やるしかないだろう。お前にここで死んでもらっては困る」

かすり傷だったのか、『邪碎靱』は打たれた部位をさして痛がる様子はなかった。

よし……戦闘に支障はなさそうだ。

「やめてください！あなた達が力を振るったりしたら、レイディルは……！」

「悪いな、フィアラ。今回は、相手が生きている保証はない」

『邪碎靱』がフィアラを押しつけた。

あいつ……怒ってるな。しかも、その怒ってる対象が一つじゃない。

まず一つは、イレギュラー女がフィアラに銃を向けた事。

『邪碎靱』は、フィアラとイレギュラー女がどういう関係なのか知っているはずだ。多分、そういうことを踏まえて考えると、あい

つ的には許しがたいことなんだろうぜ。

もう一つは、自分に対して……だ。

フィアラとイレギュラー女の関係を知る『邪碎靱』としては、何とかして平和的に解決したいだろう。けど、どうにもならない。戦うしかない。何とかする力が自分にないことを、あいつ自身は腹立たしく思っているはずだ。

「生きている保証はないって……」

「さっきからうるさいわよ、『封冥者』」

ガウンッ！

イレギュラー女がトリガーを引き、フィアラに向かって弾丸を放った。弾はフィアラの髪をかすめ、そのまま一直線に飛んでいった。フィアラが怪我をしかけた。そのせいで、『邪碎靱』の目が殺意に満ちてきやがった。

「『邪碎靱』さんはやる気なのよ？ 邪魔しないでほしいわね」

……ったく、あいつを見てると腹が立ってくる。

別に態度がでかいとか、そういうことじゃない。本来は望んでいない事を、まるで望んでいるかのように装っているのがまるわかりだ。わかってる人間から見れば、腹立たしい事この上ない。

「レイデイル……」

「どうしたの、『封冥者』さん？ まさかまだ、戦わずに何とかする気なの？ 残念だけど、それは無理よ。私もそっちの戦士さん達も、互いに殺しあう気になっているんだから」

ああ、もうっ、鬱陶しい！ 今すぐにでも本音吐かせてやる！

そう思って、走り出そうとした、そのときだった。

キューインッ！

何かがイレギュラー女の髪をかすめ、あいつの後ろにあった岩に当たった。さっきの状況と似ている。

「な……！」

イレギュラー女が驚愕した。

間違いない。今さっきはね返って来たのは、ついさっき、あの女

がフィアラに向かって撃った弾だ。けどなんで、銃の弾が帰ってき
たんだ？

その答が出たのは、ほんの少し後だ。

「あまり人の土地を荒さないでもらおうか、お嬢さん」

弾の帰ってきた方向から声がした。俺は振り返った。勿論。

その瞬間、俺は言葉を失っていた。

その男を見た瞬間、俺は恐怖で足が動かなくなっていた。

何だ、この男は……。五メートルぐらい離れているのに、男の圧
倒的なオーラが伝わってくる。そのオーラは、男がどれほどの力を
持つのかを、そのまま表している。

今この男は、「人の土地を」と言った。

と言う事は、この男が……？

「冥界と聞けば印象は悪いかもしれぬが、今この世界は、君達が思
っている以上に平和でね。折角平穏の時間が流れているのだ。それを
壊す者を、黙って見過ごすわけにもいくまい？」

男は淡々と語っている。

その対象は、本人の視界にいるレイディルだけではない。俺たち
にも、同様に語りかけている。これ以上続けるのなら、こちらにも
考えがある……と。

しかし、男の回りくどい警告に気付かなかったのか、レイディル
は男に銃を向ける。

「……ずいぶんと出てくるのが早いわね。『真冥王』しんめいおうさん」

言葉を訂正しよう。レイディルは警告を確かに受け取った。その
証拠に、冷や汗が彼女の頬を伝っている。

しかし、レイディルは警告を無視した。相手の力を理解し、言
いたいことも理解したうえで、その警告を無視したのだ。そこまでし
て、『仮面児』からの恩を返したいのか。

「『永劫えいじゅうの真冥王』……まさかその名の通り、今も冥王の座を守っ

ているとは思わなかったわ」

「古き名だ。私はただの年寄り冥王、ゼヴィル・ヴァデイルが……ただ、それだけだ」

俺もレイトも、レイデイルも、そしてフィアラさえも、その言葉は嘘だとわかった。

男の姿は、紳士と言うに相応しい。人間の年齢に例えれば、大体五十代前半と言ったところだ。見た目も老いてはいない。力も衰えていない。いや、衰えているのかもしれないが、少なくとも、俺が百人に増えて戦いを挑んでも、一蹴されるだろう。それほどの力が感じられた。

『永劫の真冥王』……。かつて、人と神の連合軍が、『神天使』の率いる、天使とケルベロスの軍団に敗れかけていた時、突如現れて人と神の連合軍を助け、勝利へ導いた存在が呼ばれた名。

つまり、この男は当時の『真冥王』本人であり、今までずっと、冥王であり続けていたのだ。

「だが、いくら老いたとは言え、冥王である以上は、この世界を管理する責任があるのだ。わかるな？」

『真冥王』は穏やかな口調で……けれども凄みのある声で、レイデイルをしている。

つい最近まで一介の使用人だったレイデイルにとって、それは恐怖以外の何者でもないだろう。

しかし、レイデイルは銃を下ろそうとはしない。戦う気なのだ。

「ふむ……見上げた勇氣だ。恩人に対する慈愛……それ故か？」

「……あなたには関係のないことよ」

そういうことか。

レイデイルは単に、『仮面児』に恩を返したいわけじゃない。

人として、『仮面児』……神崎祐と言う人間を、慈しみ愛しているのだ。

トッ……。

一瞬だった。『真冥王』ゼヴィルが、一歩前に踏み出した瞬間、

彼はレイデイルの後ろにいた。

恐ろしい速さだ。レイデイルに向かって真っ直ぐに動いたから、何とか目で捉えたものの、もしゼヴィルがもう少しややこしく動いていたら、見失っていただろう。

「すまないね。少し眠っていてくれたまえ」

ドッ……！

「……っ！」

ゼヴィルが当て身を入れ、レイデイルは気を失った。

倒れるレイデイルを、ゼイルが受け止める。

「レイデイル！」

慌ててフィアラが駆け寄る。

「何、命に別状はない。すぐに目も覚める。君たち三人には、私と一緒に来ていただく。ある程度見当はつくが、生きた人間が何故この世界にきているのか、説明してもらわなくてはならないのでね」
レイデイルを抱え、歩き出すゼヴィル。

特に説明を拒否する理由もない。俺達は、大人しく従うことにした。

第五章 『永劫の真冥王』 2

「なるほど。では君達が、かつての神界、人間界、そして冥界。それら三つの世界を全て巻き込んだ戦いから続く、宿命を継ぐ者達……と言うわけか」

俺達はゼヴィルの住まう館の応接間で、これまでの事を説明した。と言っても、ゼヴィル本人もかつての戦いに関わっていた人物だ。説明する事は殆どなかった。あるとすれば、俺達が宿命を継ぐ者であることを伝えたぐらいか。

むしろ、こちらから聞かなければいけないことがたくさんある。

「……今度はこっちが質問をしてもいいか？」

「うむ……構わんよ」

こうやって向き合っているだけで、押しつぶされそうなほどのオーラだ。さっきはただレイディルを気絶させただけなので、力の程はわからない。一体、かつての戦いではどれほどの力を見せ付けたのか……。

一方、気絶させられたレイディルはと言うと、この館内の一室で眠っており、未だに目を覚ましていない。

殺してしまったのかと心配したが、息はしていたので、大丈夫だろう……恐らく。

「……当時、あんたが既に冥王となっていたのなら、当然ケルベロスも、あんたの管理下にあったはずだ。なら何故、ケルベロスは『神天使』と手を組み、人と神に戦いを挑んだ？ あんたなら、簡単に止められたはずだ」

はじめから不思議に思っていた。

『神天使』は無論、神界に住まう者だ。対し、ケルベロスは冥界の狂犬……。この相對する二つの存在が、手を組む事ができたのは何故か……。

「その頃、私は新米冥王でね。死人の統治などに追われて、ケルベロスのことにまで手が回らなかったのだ。そのせいで、君達生きた者達に、大きな被害を与えてしまった。申し訳なく思っている」

冥界とは物騒なところで、ある冥王が全体の統治をしていても、多くの者達は隙あらば、冥王の地位を奪わんと、常に機会をうかがっている。かつての戦いが起こる少し前まで、ゼヴィルもそのうちの一人だったというわけだ。

そして前の冥王と戦い、その地位を奪ったのだ。

「次辺りの問いに先に答えておくと、私が人と神の連合軍に協力したのは、その罪滅ぼしだ」

つまり、ケルベロスが冥界から出てしまった事に責任を感じ、協力を申し出た……というところか。

己を最優先するものが多いと聞く、冥界の住人にしては、責任感の強い……。もしかしたら、俺の冥界に対する考えは、間違っているのかもしれない。

いきなり冥王が協力すると言ってきて、当時の神や人は、どれほど驚いた事だろう。

きつと何処かの漫画みたいに、目が飛び出すほど驚いたに違いない。

「ところで、君は神崎達哉と言ったね？」

「?……ああ、そうだが……」

ゼヴィルが立ち上がり、後ろにある棚をあさりだした。何かを探しているようだ。

「君の母親は、この者ではないかね？」

ゼヴィルは俺に、一枚の写真を差し出した。

受け取った写真に写っていたのは、俺の母、神崎だった。隣にいるのは……ゼヴィル？

「!……何故、こんなものを？」

どこかで知り合ったのか?しかし、ここは冥界……。

「神崎と結婚してからは、彼に合わせて名を変えたようだが……彼

女の本名はレーマイン・ヴァディルガ。……私の娘だよ」

「な……何っ？」

冥界と言うのは、何も死人だけが集まる世界ではない。

冥界で生まれ、冥界で育つ者もいる。中には、冥界から人間界に移住する者もいるそうだ。

母さんも、そのうちの一人だと言うのか……。

「とんだじゃや馬でね。一昔前に、親子喧嘩をやらかして、そのときに出て行ってしまったのだよ。心配していたのだが、人間界で幸せに過ごしていると聞いて安心した。しかし……まさかその相手が、太古の宿命を背負う者だとは、思わなかったがね」

親子喧嘩だと……？

あんたが本気で親子喧嘩などしたら、母さんは即死だぞ。

「戦いの力における才能は凄まじかったが、根は争いを好まぬ子だった。やろうと思えば、私をも超えられたものを、彼女はそれを選ばなかった。平和に生きたい……いつもそう言っていたよ」

『永劫の真冥王』をも超えられた……？

母さん……あなたがもし争いを好んでいたら、今頃の冥王は母さんだったと言うのか？

言われて見れば、母さんは大人しい性格で、一見父さんに尽くしている様に見えるが、実際は、俺たち一家の指揮官的存在だった。何だかんだ言って、本当は父さんを尻に敷いていたようだ。

「少し前、冥界に帰ってきたようだから不思議に思っていたのだ。思ったとおり、宿命の輪廻に巻き込まれ、命を落としてしまったようだな」

心の中に、何か重い感情が渦巻くのを感じた。

実際に止めをさしたのは『神術の仮面児』である。だが、俺は『仮面児』を殺す勢いで刀を振り、結果として母さんを斬ってしまった。あのときの罪悪感、今でも覚えている。

シヨックが強すぎた為、頭の中が真っ白になっていくのだ。それだけではない。俺は、俺自身が母さんを斬ってしまった直後、父さ

んと母さんが殺されるのを、目の前で目撃した。

元々受けていたショックがさらに増し、俺は気を失った。

「君の力が目覚めた際に、何があったのかは想像がつく。突然自分の中に強大な力が生まれれば、自分で抑えることができなくなり、破壊衝動にかられる。それは、止めようがないことだ」

「……………」

ゼヴィルが俺を慰めようとしているのはわかる。しかし、ゼヴィル本人は納得できるのだろうか？

太古からの宿命の輪廻……そんなもののせいで愛する娘を失ったことに、ゼヴィルは納得しているのだろうか。それはもう昔の事だと、割り切れているのだろうか。

「勿論、私は彼女の死を知り、それまで味わった事のない絶望に襲われたよ。その時は、何事もどうでもよくなり、冥王の座など、塵ほどの価値もないことを実感したものだ」

俺の疑問を察したのか、それとも話を続けているだけなのか。ゼヴィルは悲しそうに語っていた。

娘を失った……それだけではない。

いくら悲しんでいても、いずれは皆、その者の死を乗り越え、忘れていく。ゼヴィルは、自分もそれと同じ状態なりかけている事を、何よりも悲しんでいるのだ。

俺も、似たようなものなのかもしれない。

「さて……そろそろあのお嬢さんも目を覚ますだろう。それまで、老いぼれのティータイムに付き合ってくれたまえ」

ゼヴィルが紅茶を差し出した。

ティーカップに入れられた紅茶は、心の何かを溶かすように、小さく揺れていた。

「……………」

「おっ、起きたか。大丈夫か？」

私はベッドに横になっていた。目を開けるとほぼ同時に、『命狩の執行人』が声をかけてくる。

記憶を辿って、さっきまでも状況を思い出す。

『神威の邪碎靱』達と戦っていて、そこに『永劫の真冥王』がきて……。意識が途切れたのは、その直後だ。

「……動けるか？」

それを確認する為に、上半身を起こしてみた。起きられた。痛みもない。何も問題ない。けどそれは、『真冥王』にそれほど手加減されたと言う事だ。気分良くはない。

起き上がったとき、フィアラが横で、頭だけをベッドに乗せて、眠っているのに気付いた。

「フィアラはここにきてから、ずっとお前のそばにいたんだ。いくら大丈夫だって言っても、落ち着かなくてよ」

彼女らしいと思った。

普段はポケットとしていているけれど、身近な人に何かが起こると、落ち着きがなくなる。大した事なくても、その人のことが心配で、勝手に混乱する。

そのせいで他のことに頭が回らなくなり、色々なところで失敗してしまう。

なのだ。

今時、他人のことで精一杯になれる人が、一体何にいるだろう……。…。

「……馬鹿ね」

銃は取られていなかった。きっと『執行人』さんは取ろうと思っただろうけど、フィアラが「人のものを勝手に触っちゃだめです」とか言って、彼を止めたのだろう。

彼女は子供のような心のまま、この歳まで生きてきた。だから純粹でいられる。

けど、純粹であるからこそ、物事を適当に受け止める事ができず、心の負担を自分だけで背負ってしまう。

それに、ふらふらしているように見えて、実は頑固だったりもする。実に困った性格だ。

「フィアラが寝ている間に、私を殺しておかなくていいの？ 後々邪魔になるわよ」

「フン、その気があるなら、最初からやってるぜ。敵とは言え、一般人を殺す趣味はねえんだ」

『執行人』が鼻で笑う。

眼鏡をかけているけど、光が反射していない……伊達眼鏡？

一般人を殺す趣味はない……か。彼もフィアラも、私を敵としてみていない。事件に巻き込まれた被害者として、私と接している。

「甘いわね。どうなっても知らないわよ？」

「同じ台詞何度も言わせるな。お前、そんなに殺されたいのか？」

「……………」

何故だろう、ちゃんと否定できない。

私は、レミネス様に恩を返さなければならない。そのために、まだ死ぬわけにはいかないのに……。

「……お前、親は？」

突然の問いだった。

「？……どうして、そんなことを？」

「いや、その……何だ。まあ、気になったただけだ。で、どうなんだよ？」

何故気になったのか……とは聞かなかった。

人間は、何となく何かをすることがある。特に理由もないのに、何故か、何となく、何かをするのだ。彼の問いも、それと同じだろう。

「生きているわ。二人ともね。田舎で暮らしているはずよ」

昔からあまり両親のことが好きじゃなかった。

別に虐待されていたわけじゃないし、可愛がられていなかったわけでもない。それなりに幸せだったし、それなりに不幸な事もあった。家庭としては一般的なものだ。

私は都会に憧れていた。だから、田舎でのんびりと暮らしている両親が好きじゃなかったし、そこから抜け出せない自分が情けなかった。田舎の暮らしに満足して、ゆったりと過ごしている両親……。独立する力が無くて、そこに居ることを強いられていた私。一刻も早く都会に行きたいと、いつもそう思っていた。

そんなある日の事だった。小学二年生になった私は、田舎の暮らしから逃げたくて、ありったけのお小遣いをもって、都会にむかった。

交通機関を利用し、途中でご飯を食べる……。そうこうしている間に、都会につくことはできたけど、私の小さな財布は空になっていた。遠くまで来てしまった。帰ることもできない。迷子になってしまった私は、大声で泣きながら、都会の住宅街を放浪し続けた。

しばらく歩いていると、とても大きな家が目に付いた。

そして、その家の前に、ワンピースを着た女の子がいることに気付いた。

きっとこの大きな家に住んでいる子なんだろうな。女の子が悪いわけじゃないのに、私は彼女を睨んだ。けれど、その子は目を逸らさず、それどころか、手に持っていたボールを差し出して、こう言った。

「一緒に遊ぼう！」

その子こそ、フィアラ・レヴィジットだった。

私達は、しばらく一緒に遊んだ。暗くなってきた、迎えの人が来た。そのおかげで、両親に連絡を取ってもらえて、私は帰ることができた。

八年後、レヴィジット家の使用人として、私はフィアラと再会した。彼女は私を覚えていた。

「あ……！」

フィアラは全然変わっていなかった。相変わらずポケットとしていたし、八年前のものと全く同じデザインのワンピースを着ていた。

私達は友達として、一緒に日々を過ごした。

「お前はまだ、幸せなほうだ」

「え……？」

『執行人』は、かすかに笑っていた。ただの笑みじゃなくて、どこか悲しみを帯びた……。

「お前は『帰っても』、迎えてくれる人がいるだろ？いくら自分が心に傷を負っていても、それを包んでくれる人がいるだろ。癒してくれる人がいるだろ。俺は……違うんだ」

今にも泣き出しそうな口調だ。

前に、宿命を継ぐ者が力に目覚めた時、大きすぎる力を抑えきれずに、その者は暴走してしまうと、レミネス様に聞いたことがある。レミネス様はその際、自分の両親を、自分の手で殺してしまったと言っていた。

「俺にはもう、『帰っても』で迎えてくれる人がいない……。殺しちゃったんだ、自分の手で。親父も、母さんも……。その場に居合わせた、俺の好きだった人も……ッ！」

違う……。レミネス様は、対立してはいるけれど、『神威の邪砕軀』……神崎達哉と言う弟がいる。本来の自分を知ってくれている人がいる。けど、彼は違う。

彼は本来の自分を知っている人を、全て失ってしまった。近くにいるくれる人がいない。本当の自分を知っている人がいない。『帰っても』、迎えてくれる人がいない。彼は……。力が目覚めた時に、何もかも失ってしまった。

きつと、これまでの時を、孤独と戦いながら過ごしていたのだろう。

現在に至るまでの間に、友達は何人もできたと思う。けれど、本当の自分をさらせるほど、これ以上ないほどに信頼できる友達とは出会えなかったのだろう。

冥界の扉が開いてから十年、彼はずっと、孤独と戦い続けていたのだ。

「……………てるんだ」

「え……？」

彼が何かを呟いたけど、聞き取れなかった。

もしかしたら、本人にさえ聞こえなかったのかもしれない。それぐらい小さな声だった。

「いや、何でもねえ。何でもねえよ……」

何でもない……何でも……。彼はしばらくの間、同じことを呟き続けた。

第六章 過去の残影、現の迎え1

「…………イト君、レイト君ってば！」

「んえ……？」

実に間拔けな返事だった。何が『んえ』だ。

間拔けな返事をした、俺の間拔けな顔を、一人の女の子が覗き込んでいる。

「もう、何でこんなところで昼寝なんかしてるのよ」

「何でって……お前がここに呼び出したんだろ？」

彼女の名はレイゼ。六歳。小学校一年生。

俺の同級生であり、憧れだ。

「そうだけど……こんなところで寝てたら、大事なものを盗られるよ？」

レイゼと仲良くなったのは最近だった。

それまでは、他の男子どもと同じように、憧れの眼差しって奴で見てたんだけど、ある日、レイゼが悪ガキに鞆を取られているのを目撃して、その鞆を取り返してやってから、多少会話をするようになった。

それから一緒に遊ぶようになって……今じゃ特に親しい間柄だ。

俺がレイゼと話すようになってから最初の内は、他の男子からの嫌がらせが凄まじかった。たかが小学校一年生がこんなことするか普通？って言いたくなるぐらい凄かった。

それぐらい、レイゼの人気も凄かったってことだ。本人は気付いてないみたいだけど。

「大丈夫だ。もう盗られてるから」

「え？」

お前に……とは言わない。小一の言うべき台詞じゃないし、第一恥ずかしい。

小一とか、幼い時期の恋って言うのは、薄っぺらい感情で成り立

つ事が多い。実際、俺の身近に、すきな女の子が毎日変わってる奴がいる。大してイケメンなわけでもないのに、次から次へと女の子にアタックしているのだ。まったく……自分の器を弁えろっての。まあ、そんなわけだから、俺の心も薄っぺらいように思われるかもしれないが、絶対に違う。

俺は別に、レイゼへの恋が初恋ってわけじゃない。だから、今の心が薄いかな、そうでないかは、自分でわかる。

「……で、何の用だよ？」

「うん。それがね……」

レイゼの言葉を、俺は絶望と共に聞いた。

ゼヴィルの出してくれた紅茶を飲み終え、俺は館の庭に来ていた。世界全体が暗いものの、この景色は悪くない。この景色に、人界の光が加われば、どれほど綺麗に見えることだろう……。悪くない。

ただ景色を見ていた俺の後ろに、人とは違う気配を感じた。

「レイディルが世話になっているね。達哉」

「今さらのこのこと現れて……何のつもりだ、『仮面児』……ッ！」

彼女の話が終わってから、俺はただ立ち尽くしていた。

彼女の話はこうだ。

「あのね、さっき突然言われたんだけど、引越すんだって、田舎に。お父さんとお母さん、ずっと農業をやりたいって言ってたから、きっとそのためだと思う。それで、私も一緒に。本当に突然だったの。だってさっきだよ？何で今なのって聞いたら、何にも教えてくれないの。それから黙ってると思ったら、いきなり『お前の大切な人を連れて来い』って言うの。それで、悪いと思ったけど、レイト君を呼んだの。明日、私の家に来て。お父さんとお母さん、何だか

大切な話があるみたいだから」

そう言って、レイゼは立ち去った。

彼女が去ってから、俺はずっと立ち尽くしている。

レイゼが引越す……？ 田舎に……？ お父さんとお母さんが農業をやりたい……？ 知るかよそんなの。冗談じゃないぞ。何で……なんで今、一番失いたくない人を失わなきゃいけないんだ？

どんなに見栄を張っても、俺は小学校一年生のただのガキだ。大切な人が引越してしまう……そんな事さえ、自分じゃ何も解決できない、無力なガキなんだ。

レイゼがすぐに立ち去ってくれて助かった。こんな姿、フィルに見せられるものか。

俺はしばらく、その場で泣いた。

ことなく、俺は刀を抜いていた。その刃を、『仮面児』に向けていた。

俺は怒っていた。それはもう、怒り狂っていた。他の誰でもない。

『仮面児』に対して。

「何故……何故レイディルが、フィアラを殺しに来た？」

「僕が彼女を助けて、君達のところに差し向けたからだよ」

「そんなことは聞いていないっ！」

俺はとつとに冷静さを失っていた。すぐにでも『仮面児』に斬りかかりたかった。その衝動を必死に抑えて、俺は『仮面児』に問うている。

何があったのか……それを知らないまま、こいつを斬るわけにはいかない。こいつがどういう意図で、どういう目的でレイディルを助けたのか。それを聞かなければ。

「レイディルを助けた事に問題はない。むしろ礼を言おう。だが、あいつは一般人だ。何故一般人を、この宿命の輪廻に巻き込んだ！」
疑問形ではなく、むしろ断定する口調で俺は叫んでいた。

俺達は古代の宿命に選ばれた。いくら拒絶しても、避ける事はできない。それは仕方ないだろう。しかし、レイディルは違う。あいつは元々、一般の人間だった。命が助かったのなら、そのまま歴史の表舞台に返してやればよかったんだ。なのに、こいつはレイディルを『黙示録』の舞台に巻き込んだ。そのことが、どうしても許せなかった。

「答えろ『仮面児』……何故だ！」

「……何故かな」

『仮面児』は後ろを向いた。

自分の何かを、翼で覆い隠すように。

「何故かな……だと？ ふざけるのも大概にしろ」

「僕自身にも、よく分からないんだよ。彼女を何故助け、『黙示録』の舞台に誘ったのか……」

『仮面児』はため息をして、天を仰いだ。

翌日、俺はフィルの家を訪れた。

意外にも、それほど大きな家じゃなかった。普通の家って感じだ。けど、俺にはその家が、俺の希望を喰らう、大きな妖怪に見えた。

インターホンを押した。程なくして、扉が開く。

「あ……レイト君」

扉を開けたのはレイゼだった。昨日、俺に引越しの話をした時と同じ、暗い表情だ。

「入って……」

暗い表情のまま、レイゼは俺を招き入れる。いつもの調子で話すことは、どう考えても無理だった。

俺は今日、レイゼの両親から何を聞かされるのか……。この状況……ただの引越しじゃないのはすぐにわかった。わざわざ『大切な人』と限定しているわけだから、きつととても重要な話だろう。

「……今日、私にも本当のことを話してくれるって、お父さんたち

は言ってるわ」

「……うん」

一体何が『うん』なのか、言った俺にもわからなかった。レイゼの両親が彼女になんて言ってるかを理解しての『うん』なのか、それとも、今まで隠していた事を、今初めて話されると言う今の状況に、彼女がおびえていることを理解しての『うん』なのか。色々と浮かんだけど、結局わからない。

玄関から居間を繋ぐ廊下は、思ったよりも短かった。あつという間についてしまい、俺たちを包んでいた空気が、更に重くなった。レイゼがドアノブに手をかける。

ゆっくりと……扉が開く。中では、フィルの両親が怖い顔でソファーに座っていた。その隣に一人、女の子が座っている。レイゼの姉妹かな……。

その子も暗い顔をしていた。場の雰囲気为重過ぎるからだろう。

「レイト君、私のお父さんとお母さん。それから、双子の妹の——」

レイゼが少女の名を覚えてくれたけど、覚えていない。その辺の話を聞く余裕がなかったかもしれない。

「よく来たな、レイト君。そこに座りなさい。フィル、お前もだ」俺とフィルが座ったのを確認して、フィルの父親は話を始めた。

「レイゼのことだが……」

冥界の怪しく渦巻く空を、『仮面児』は眺め続けていた。

無防備すぎる……。俺を警戒する気など全くない。何の注意も払うことなく、刀を持った俺に背を向けている。何かの罠か……それとも本当に警戒していないのか。

「達哉、君達の持っている『光の黙示録』もそうだと思うけど、神達が未来を見越して記したはずの『黙示録』に、少しずつずれ生じてきている。僕の持つ『闇の黙示録』には過去が記されている。だ

から、時がたつごとに、その内容が記されていく。だけど、僕がレイディルを助けた事は記されていない。勿論その後、『黙示録』の舞台に姿を現すことも同様に……」

実際、『黙示録』に記されている内容がずれ始めたのは、俺とフィアラが会った瞬間からだった。

『封冥者』を探していた当時の俺が『光の黙示録』を開いた時、『封冥者』がケルベロスと戦っている際、『邪碎靱』が『封冥者』を発見する」と記されている。

そう記されていたから、俺は各地へ行ってケルベロスと戦っていた。

戦って、戦って、戦い続ければ、いつかは『封冥者』に会えると考えたからだ。しかし、実際は違った。『封冥者』であるフィアラには、戦闘能力もなければ、戦闘意欲すらなかった。しかも、フィアラは自分が『封冥者』として目覚めていた事さえわかっていなかった。これは決定的な違いだ。

おかしいと思ってもう一度『黙示録』を開くと、その内容はガラリと変わっていた。

まるで新しく書き換えたかのように、全く別のシナリオが描かれていたのだ。恐らく、今『黙示録』を開いても、内容は変わっているだろう。思っていた以上に不便な代物だ。

「僕の考えでは、内容が現実と食い違う『黙示録』は、何かを基準にして、現実にはシナリオをあわせようとしているのだと思う。『闇の黙示録』は過去を記すから、何かを基準にした時にはもう修正がきかなくなっている、間違っただけの内容が記される。それに対し『光の黙示録』は未来を記す。その何かを基準にしたことで、内容が書き換わる。多分、定期的にその何かを基準にして、内容を書き換えているんだと思う。何故この二冊が、そんな不完全な状態で存在するか……それは、双方の『黙示録』が、もとの一冊だった時は完璧だったけれど、二つにわかれてしまったことによって、その完全さを失い、不安定な状態だから。その元の一冊こそが、全てを司る真

の『黙示録』……」

「かつて、その本を所有していた『神天使』が、その魂を半分宿した事によって、不安定な二冊にわかるしかなかった……。かえって、世界はバランスが取れるようになったな」

神が人間界と縁を切ってから、人間は独自の力で文明を築き、現代に至るまで、科学的進化を繰り返してきた。それは恐らく、神と言う反則的な存在が消えた事で、世界全体のバランスが取れたからだろう。

ありがたいことだ。

「けれど、あまりにも内容が書き換わりすぎると、逆に世界がバランスを崩し、崩壊する。僕の私見では、もうその時はすぐそこだよ」「何だと……？」

『黙示録』の内容が書き換わると言う事は、でかい建物を支えている、土台そのものを作り直す事と同じだ。それが頻繁に繰り返され、手抜きになっていく土台はやがて崩れ、その上に建っている建物自体も崩れる。

つまり、今こうしている間にも、土台は作り直され、少しずつ不安定になってきているのだ。

「この事態を回避する方法は二つ」

『仮面児』が日本の指を立てる。

「一つは『神天使』を復活させる事によって、本来の『黙示録』にもどし、世界を安定させる事」

早い話が、さっさと『神天使』を復活させて、この宿命の輪廻に決着をつけると言う事だ。

二つあると言ったな……まだ方法があるのか？

「そして、もう一つは……」

第六章 過去の残影、現の迎え2

レイゼ達の引越しには理由があった。

勿論、理由のない引越しなんてそうないだろうけど、そっち側のほうが、家賃が安いとか、家が広いとか、そんな下らない理由じゃない。

体の弱いレイゼは、本来なら、家の中でじっとしていなければいけなかった。けれど、本人の希望で、学校に行くのを許可したそう。しばらくは何の変化もなかったんだけど、レイゼが最近、よく咳をするようになったので、病院に連れて行ったらしい。検診結果は、最悪だった。

肺結核……。今の医療技術なら、治す事なんてわけないはずの病気だ。普通は数ヶ月病室でちゃんと治療を受けていれば治る。けど、レイゼの場合、症状に気付くのが遅すぎた。今から手を尽くしても、またかかってしまう可能性は高いそうだ。そこでレイゼを担当した医者は、空気の綺麗な田舎に引っ越す事を提案した。

今は落ち着いているけど、いつ症状が悪化するかわからない。空気の汚いここよりも、田舎に引っ越せば、結核は完治するかもしれない。と言っても、あんまり田舎過ぎるところに引っ越すと、まともに治療が受けられない。適度の治療ができて、空気が綺麗な場所へ引っ越す。それがレイゼの病気を治す、最善の方法だった。

病気を治す為……。それが引越しの理由だ。

「病院に連れて行ったとき、検診の結果をレイゼに教えなかった。自分がどういう病気か、レイゼは今知った。決して君に黙っていたわけじゃない」

それが本当かどうかは、レイゼ本人を見ていればよく分かる。自分が肺結核だと言われた時、レイゼは驚愕していた。レイゼは

賢い子だ。肺結核が普通なら治せる病気だということも知っていただろうし、発見が遅れたせいで、それが難しくなった事も理解しただろう。

彼女が一番驚いているのは、彼女の両親が嘘をついていたことだ。「どうして……言ってくれなかったの？」

「言おうとした。しかし、それを言ってしまうえば、お前はここに残りたいと駄々をこねるだろう。レイト君のいる、この街に残りたいと言うだろう。それを避ける為だ」

しかし、本当のことを知らずにいるのはかわいそうだと思い、今日打ち明けた……だそうだ。

「引越しを止めてくれと言っても、やめるわけにはいかない。それはレイト君、君もわかっているだろう？」

勿論わかっていた。

この街にいれば、レイゼの症状は悪化するばかりだ。引越して、少しでもよくなると言うのなら、俺は引越しを止める気はない。何故って……そっちのほうがいいからだ。

レイゼと離れるのは辛いけど、それで彼女の病気が何とかなるのなら、安いものだ。

「しかし、突然さよならだと言うのは、君もレイゼも不満だろう。そこで、明日一日の間、君にレイゼを預けようと思うのだが……どうだ？」

「え……？」

俺は戸惑った。

言っている事を簡単にすれば、明日レイゼと遊んでやってくれと言う事だ。それだけの事なのだが、予想していた事と違う為、すぐにはそれを理解できなかった。

「ただし、明日が最後だ。明後日の朝六時、レイゼを迎えに行く。その時までに別れの挨拶を済ませておきなさい」

明日が最後……。レイゼといられる、最後の時間だ。

今までで一番楽しくなるようにしなければ、レイゼや、時間をく

れた彼女の両親に申し訳ない。

俺は気を引き締め、姿勢を正して、言った。

「はい！」

馬鹿な……！そんな方法で、本当に世界は安定するのか？

俺の疑問を察し、『仮面児』が再び口を開く。

「確証はないよ。これは僕の勝手な判断に過ぎない。実行するかどうかは、君次第だよ」

「しかし、そんな事をすれば……」

方法自体は、先ほどのものと殆ど変わらない。だが、ただこの宿命の輪廻に決着をつけるだけではない。決着を付けた時、もし世界が崩壊へ向かい続けている場合、この方法を実行すれば、世界が安定するかもしれない。

しかし、それにも失敗すれば、世界は終わりだ。失敗しましたじや済まない。

「君が考えている通りになってしまうかもしれない。でも、うまくいくかもしれない。可能性は五分五分だよ」

決着を付けた時に、世界が安定さえすれば、この方法は取らなくてもすむ。世界全体を危険にさらさずに、この戦いは終わる。『仮面児』が言ったのは、もしそうならなかったときの保険だ。

その保険すら通用しなかった場合は、それこそ世界は終わり……。諦めるしかない。

「参考にはさせてもらう。だが『仮面児』……何故俺にそんな事を教える？」

「勿論、君が僕の兄弟だからだよ」

『仮面児』が微笑んだ。

「あら、レイゼちゃん。いらっしやい」

いつの間にか、母さんがレイゼを出迎えていた。
慌てて、俺は玄関へ。

「おはよう、レイト君！」

「あ、ああ」

元気の言い挨拶だった。それに比べて俺は小さな声で返事をするだけ。どっちが病人なんだか……。

昨日の間に、親父と母さんには『レイゼが泊まりに来る』とだけ言っておいた。深く詮索はされず、二人は快く、レイゼの宿泊を認めてくれた。そういう意味では、いい親を持ったと思う。

「ほらレイト、早くレイゼちゃんを自分の部屋に案内しなさい」

「う、うん……レイゼ、こっち」

「お邪魔します」

丁寧にお辞儀をして、レイゼは靴を脱いだ。

まず俺の部屋で、当時はまっていたブロックを使って遊んだ。俺はとにかくでかい物を作ろうとしたけど、レイゼは小さくて、可愛げのある家を作っていた。ブロックで遊ぶのに限界を感じたら、今度はテレビゲームで遊んだ。レイゼはテレビゲームが初めてだった。操作方法のわからないレイゼに、手本を見せたりした。そうしている間にレイゼは上手くなり、数十分で俺じゃ勝てないようになってしまった。恐るべし。昼ごはんを食べた。父さんと母さん、そしてレイゼは寿司を食べたが、俺はカップ麺だった。カップに湯を注いでいる俺を、レイゼは困惑しながら見ていた。このくそ親め……。昼食を終えると、さっきとは違うゲームで遊んだ。やっぱり数十分で勝てなくなった。どういう才能だ。次のゲーム……一時間で負けた。次……結構頑張った。なのに一時間半で勝てなくなった。次……一回目で負けた。くっ……やるじゃないかレイゼ……。夕食。今度は俺も同じメニューだった。どうやらレイゼが両親に進言してくれたらしい。こんな時にまでレイゼの世話になってしまっている自分が情けなかった。食事を済ませてからトランプをして遊んでいた。外はすっかり暗くなってしまっていた。

「もう夜だね……レイト君」

「うん……」

「明日になったら、お父さんが迎えに来ちゃうね」

「うん……」

「そうしたら、お別れだね」

「うん……」

俺はただ、うんとだけ答えた。

何て返せばいいのかわからなかったし、レイゼがいなくなることなんて、考えたくもなかった。いつの間にか、辺りの空気が重くなっ
てしまっていた。

「ね、ねえ、レイト君」

「ん……？」

「私達の名前、似てると思わない？」

あ……。そのとき初めて気付いた。レイト、レイゼ。違うのは最後
の一字だけだ。

「本当だ……」

「フフ……面白いね」

レイゼのおかげで、場が少し和んだ。

その後、俺達はそれぞれの布団で眠った。いや、眠ったのはレイ
ゼだけ。俺は起きていた。と言うより、眠れなかったのだ。

明日になれば、レイゼは行ってしまう……わかっていたことだけ
れど、いざその時が近づいてくると、怖くて仕方なかった。俺の前
からレイゼが消えてしまう事が怖かったし、時がたって、互いが互
いを忘れてしまうかもしれない……それが怖かった。

いっその事、明日が来なければいいのに……。

「……っつ！」

悲観的な考えを並べていると、突然強烈な頭痛が俺を襲った。

頭を何発も鈍器で殴られているようだ。頭が……割れる！

「うああああああああああああああああっ！」

あまりの激痛に耐え切れず、大声を上げた。すると、俺から光っ

ぼいものが出てきて、何かを形作っていく。しばらく後、この瞬間に冥界の扉が開いていたことを知った。

もやもやだった光の形がはっきりしてきた。やがてそれは光ではなく、巨大な鎌となった。

俺自身から力があふれてくる……抑えられない……！

「レ、レイト……君？」

最悪のタイミングだった。大声を上げたせいで、レイゼが目覚ましてしまった。破壊衝動を抑えられない俺は、巨大な鎌を持って、レイゼへと近づいていく。

レイゼは怯えていた。狂った俺から離れようと、壁に張り付いている。

頭を押さえたまま、俺は大鎌を振り上げていた。

ブシャアアッ！

そのときの光景を、俺は今でもよく覚えている。レイゼの首が飛び、体と首から、大量の血が噴き出し、俺の服を、床を、壁を、家具を……赤く染めていった。

「どうした、何があった！」

「ひっ……！」

父さんが部屋の扉を開けた。母さんが老婆のような悲鳴をあげる。

「レ、レイト……！お前、一体何を……」

両親は何も知らなかった。時が流れるにつれ、古代の宿命は信じられなくなり、今に至るまでの間に、宿命の輪廻はこの一族の記憶から消えていたのだ。

混乱するだけの両親に、俺は襲い掛かっていた。

時間通りレイゼを迎えに来た彼女のお父さんが、首を刈り取られたレイゼと俺の両親を発見し、同時に、大鎌を持ったまま倒れている俺を発見した。

「……！」

「どうした？」

突然、何かに反応するように、レイディルが窓の外を見た。特に何かがあるわけでない。暗くて荒れた土地が広がっているだけだ。

「来ていたの……？」

そう呟き、部屋のドアへと走る。

「お、おい待てよ！どこに行く？」

「レミネス様が……あの人が近くにいる！」

そのまま外に出ようとするレイディルの腕を、俺の手が掴んでいた。

「離して！あの人がいるの！」

「行っちゃダメだ！今お前が行っちゃったら、今度こそ俺は……」

その先の言葉が出てこなかった。今度こそなんだ？どうするんだ？何とかして、こいつが『仮面児』のところに帰るのを止めなくちゃいけない。それは最初からわかっていることだ。けれど、それだけじゃないような気がする。

俺は一体……何を恐れている？

「『執行人』さん、あなた、本当の名前は？」

「え……レイト。レイト・アレクジール」

そう……と、レイディルが呟いた。そのときの表情は、悲しみに満ちていた。

「ごめんなさい。私はこの場に残れない。耐えられない」

「！……やっぱり、お前……！」

完全に思い出した。この少女が誰であるか。そして、覚えていなかった名前も同時に。

「そう、私はレイディル・ニアス。あなたを恨んでいる人間の一人よ」

俺に殺意の満ちた目を向ける。

啞然としている俺の手を振り払い、レイディルは走っていった。

「そうだよ……な。似てて当然だよ……双子なんだから……」

レイゼ・ニアス。レイディルの双子の姉……。そして、俺が殺し

てしまった、一番守りたかった人。

俺が三人を殺してしまった後、レイゼの家族は、俺を恨みながら田舎へ引っ越していった。レイゼの両親は、さっきのレイディルのような、さっきに満ちた目を、俺に向けていた。

「……ああ、そうか」

俺は……彼女に殺されたかったんだ。

中が騒がしいな……。

そう思った瞬間、館の扉が勢いよく開き、レイディルが姿を現した。『仮面児』が来ていることに気付いたか……レイトめ、何をやっている……。

「レミネス様！」

「レイディル……何ともないみたいだね。ちょうど君を迎えに来たところなんだ。行こうか」

「はい！」

『仮面児』に寄り添うレイディルは、本当に嬉しそうな顔をしていた。最早、歴史の表舞台は、こいつのいるべき場所ではないのかもしれない。

「それじゃあ達哉、先に人間界へ行って待っているよ」

そう言い残し、『仮面児』はレイディルを抱えて飛び去った。

第七章 罪惡の定義1

『仮面児』が飛び去った後、俺は何か行動をするわけでもなく、ただ、冥界の空を見上げていた。もし、この空が人間界と同じように青かったら、ここが死者の集う世界であるとは、誰も思わないだろう。自分たちが普段見上げている空だと思い込み、あの先には広大な宇宙が広がっていると勘違いするはずだ。

冥界の黒い空は、人間界の夜の空に酷似していながら、この世界に住まう者の思惑の集合体のようにも思える。何故なら、この空は渦を巻いている。常に、ゆっくりと、着実に、空を構成するものが、中心部分に向かって動いている。

いつかは、すべてが中心部に集まり、冥界の空は消えてしまうのだろうか……。

そしてもし、この空が消えるのなら、その奥はどうなっているのだろうか。今の空とは対照的に、白い空間が広がるのか、さらに黒い空が広がるのか、あるいは、消えた部分が人間界と繋がるのか……。

あの渦は……一体何を求めているのだろう。一点に集まる事によって、一体何を得るのだろう。何も求めていないのかもしれない。何も得られないのかもしれない。ただ、空自体が流れていくことに抵抗せず、流されているだけなのかもしれない。実際どうなのかは、空だけが知っている。

我ながら意味不明なことを考えている。だが、今は『仮面児』やケルベロスの事を考えていたくない。

何故だろうか……つい最近まで、宿命の輪廻に決着をつけることだけを考えていたのに、いつの間にか、たまには息抜きをしたいと思うようになっていた。

少し……フィアラに影響されたのかもしれない。

彼女はついさっきまで寝ていたようだが、レイデイルがいなくな

ると同時に目を覚ましたらしい。寝ぼけた顔でこの庭きていた。フィアラは、レイディルが去ってしまったことに、大してショックを受けていなかった。ある程度、そうなる事を予想していたのだろう。問題なのは、フィアラよりもレイトの方だ。フィアラの話によれば、ずっと俯いたまま、何かを呟き続けているらしい。フィアラが寝ている間に、何があったのか……。

ともあれ、そう言う事は本人に任せるしかない。今まで通り、軽いノリで部屋から出てきてほしいものだ。

それを待つまでの間に、ずっと気になっていた事を考えてみるでしょう。宿命の輪廻についてだ。

俺たち関係者は、今回の戦いのことを『黙示録』の舞台、もしくは宿命の輪廻と呼んでいる。『黙示録』の舞台については簡単だ。戦いの中心に『黙示録』という台本がある。俺達は、舞台の上に立つ役者のようなものだ。『黙示録』を扱っているつもりだが、実際は『黙示録』に扱われている。そういう含みを持って、『黙示録』の舞台と呼ぶ。

だが、宿命の輪廻については説明がつかない。

『黙示録』によって定められた宿命……それが何故、輪廻なのか。現状で俺が考えつくのは、俺たち関係者全員を相関図にしてみると、ちょうど円形に繋がっているのではないか……と言うものだ。

とりあえず、俺から道を繋げてみよう。

まず俺と『神術の仮面児』……わかりにくいから名前で考えよう。神崎達哉と神崎祐は、兄弟と言う事で、繋げる事ができる。それから神崎祐からレイディル・ニアスへ、主従関係を繋げられる。レイディル・ニアスからフィアラ・レヴィジットへは、旧友として繋がられる。そしてフィアラ・レヴィジットから……誰に繋げる？

失敗した。フィアラから繋がるものがない。しかも、このままでは、レイトが完全に孤立してしまう。もしかしたら誰かから繋がられるのかもしれないが、俺はレイトについて、詳しいことを知らない。本人から話し出したりしない限り、この輪廻を繋げる事はでき

ない。

しかも、俺や神崎祐からゼヴィルへ……など、複数繋がる者もいるので、さらにややこしい。

完成はしなかったものの、この仮説は、なかなかいい線をいつているような気がする。また今度考えてみよう。

気が付けば、レイディルはいなくなっていました。神崎さんのお兄さんが迎えに来ていたそうです。

起きた時は本当に驚きました。

レイディルのことじゃありません。彼女の事は、すぐにいなくなってしまうだろうと、何となくわかっていましたから……。驚いたのは、レイトさんの事です。

私が目を覚ました時、レイトさんは床に座って、小さく何かを呟き続けていました。寝ている間に何かがあったとすれば……レイディルが関係していると見て間違いないと思います。それを聞くべきなのかどうか……さっきからずっと悩んでいます。

知らなくて良い事もある……そんな言葉を聞いたことがあるけれど、本当にそうなのでしょうか。

全てを知るなんて無理だと思うし、知っている事全てを理解する事もできないと思う。けど、知らない事を知ろうとして、理解しようとする事はとても大事だと思う。きれいごとのように思われるかもしれないけど、私はそう思っています。知るタイミングは、考えなくてはならないですけど。

レイトさんから話してくれるのを、待った方がいいのでしょうか……。

「!……レイト」

「悪いな。お前とフィアラを驚かせちゃって」

意外と早く、レイトは顔を出した。いつもよりテンションは低いが、当然の事だろう。レイディルと話でもして、昔の辛い思い出を掘り起こされてしまったのだろうか。

どうでもいいことだが、庭にやってきたレイトは、眼鏡をかけていなかった。伊達眼鏡だったのか……。眼鏡をかけていないほうがまともでは……。

「俺は別に驚いてはいない。だが、ということがあったのかは説明してもらいたい」

「わかってるって。けど、しばらくここにいさせてくれ」

いい眺め……とは言えないが、今冥界に、心地よいそよ風が吹いている。心の闇を洗い流してくれる……そんな感じのする風だ。

その風が吹いているから、この庭も居心地が良い。寝転がっていれば、そのまま寝てしまいそうだ。こういう落ち着いた場所は嫌いじゃない。

多分、レイトも同じ意見だろう。

「……なあ、『邪碎靱』」

適当な場所に座って、レイトは俯いていた。

「どうすれば、自分に罰を与えられると思う？」

「自分に……罰？」

考えもしなかった問いだった。己が罪を犯し、それを己で浄化する方法……そんなこと、わかるはずがない。むしろ聞きたい。どうすれば……己の罪は消える？

「どう思う？ やっぱ、自分の命を絶つことか？」

「……断言はできないが、それは違うだろうな。死ぬと言う事は、己の罪から逃げることだ。己の肩にのしかかった罪から、己を解放する為、追い詰められた人間が行う逃走だ。何をどうすれば、罪は償えるのか……それは俺にもわからない。いや、わかっている奴はいないだろう。わからないから、逃げる方法を選ぶ奴もいる。別の方法を選ぶ奴もいる。それぞれが、それぞれの罪を償う方法を探して、迷走する。そしていつか、これが自分の償いだと思うものがある

ったら、それがそいつの償い方だ。結果的にそれが死ぬことだった
ら、それがそいつにとっての償いなのかもしれない。どんな方法を
償いとするか……それはお前次第だ。お前がこれなら償えると思え
る何かを見つけたら、それがお前の償いになる……すまない。最初
に言った事と違うな」

命を絶つことは償いにならない。これはあくまで、俺個人の意見
だ。他の人間がどう考え、どう行動するかはわからない。

それぞれの意志を持っているから、人間は己を確立し、世界をや
やこしくするのだ。

「結局は……自己満足の世界ってことか」

その通りなのだろう。

例えば、誰かを殺してしまったでしょう。殺された被害者が、ど
んな償いを求めているか、そんなことはわかるはずがない。

親族か何かがごちゃごちゃ言ったりするだろうが、それもそいつ
らの自己満足でしかない。

罪を償う気があるのなら、自分でそれが何かを見つけ、自分で実
行し、自分で償った気になる以外、方法はない。死人の意志など、
わかるわけがないのだから。

「仕方ねえ。自分で探すしかないか」

レイトはそれっきり何も言わなくなった。俺は、黙って館に戻っ
た。

「紅茶はいかがかね？」

「あ、いただきます」

レイトさんの事を、私はゼヴィルさんに相談しました。一人で考
えていたら、頭がこんがらがりそうだったから。

ゼヴィルさんは、私の話を黙って聞いてくれました。それだ
けで、安心します。私の周りには、私の悩みを聞いてくれる人がい
る。家族みたいに接してくれる人達がいてくれるんだって。

「フィアラ……ここにいたのか」

ゼヴィルさんが私に紅茶を渡した直後、部屋の扉を開けて、神崎さんが入ってきました。

レイトさんが庭に行ったはずですから、きっと彼に気を遣って戻ってきたでしょう。神崎さんって、意外と優しいですし、空気も読めるんですよ。

「達哉君、ちようどいい。茶を入れるところだね。君もいかがかね？」

「……あ、ああ。もらっておく」

私も神崎さんも、ここに来てから紅茶を飲むのは何回目でしょうか……。もう覚えていません。

出してくれる紅茶が美味しいので、困りはしないのですが……。

「ところでフィアラ君、さっきの話だがね」

「は……はい？」

ゼヴィルさんは紅茶を入れるための準備をしています。作業をしながら、私に話しかけてきました。

余談ですが、ゼヴィルさんは私達全員の事を君付けで呼びます。最初は戸惑いましたが、だんだん慣れてくると、そんな言葉遣いも、ゼヴィルさん自身を表現しているように思います。

「昔の事は、本人が直接言い出すのを待ったほうが良いだろう。こちらから問い詰めても、彼を傷つけるだけだ。少しの間待ってれば、彼のほうから話してくれるだろう」

やっぱり……そうですね。

私は心の中で納得しました。もしかしたら、この意見が聞きたくて、ゼヴィルさんに相談したのかも。

「！……どうやら、待つ必要はないようだな」

「え……？」

ゼヴィルさんの目線を追うと、そこにはレイトさんがいました。まだ元気ではなさそうですけど、レイディルのいなくなった直後よりは、目つきもしっかりしていますし、健康そうに見えます。

心の整理は……ついたのでしょいか。

「……待たせちゃったか？」

「ああ。おかげで『真冥王』の入れる紅茶が一杯分多くなった」
珍しい事に、神崎さんが笑いながら冗談を言いました。

「うむ。紅茶を入れるのも、なかなか手間がかかるのだよ」

「そいつは悪かった！許してくれ！」

「……………」

ゼヴィルさんも少し笑いましたし、レイトさんもニカッと笑顔を
見せました。神崎さん本人も、僅かに笑っています。私だけが、た
だ驚いていました。

「どうかしたかね、フィアラ君？」

「あ……いい、いえ！」

「ふむ……。ならば良い。早速だが、本題に入ろう」

レイトさんは頷き、レイディルさんとの事について、話し始めま
した。

第七章 罪惡の定義2

「あの、レミネス様。この名は……」

「勿論、君の事だよ。今さっき、僕が勝手につけた」

僕は今、宿命の輪廻を示す相関図を書いている。昔から文字の綺麗さには自信があった。こういうものを書くのは好きだよ。

さて……『神威の邪砕靱』から『神術の仮面児』へ、兄弟と言う事で。『神威の邪砕靱』と『神術の仮面児』の両方から、祖父と孫の関係という事で、『永劫の真冥王』へ。それから『神術の仮面児』から、主従関係を示して『慈愛の銃撃手』……つまりはレイディルへ。ここからがややこしい。『慈愛の銃撃手』から旧友という事で『聖血の封冥者』、恨む相手という事で『命狩の執行人』、そして姉妹としてレイゼ・ニアスの三人へ。レイゼ・ニアスから幼き恋愛という事で『命狩の執行人』へ繋がって、彼に關係する事は全部繋がった。最後に、『聖血の封冥者』から『神威の邪砕靱』へ……どう言う繋がりなのかは、あえて伏せておくことにするよ。達哉に感謝してもらわないとね。

とりあえず、いびつな形ではあるけれど、宿命の輪廻は完成した。それぞれの関係を繋げることで一周し、始点に帰ってくる。これが、『黙示録』の舞台を宿命の輪廻と呼ぶ由縁さ。

「私の名を、わざわざ考えてくださったのですか？」

「まあ、ほんの気まぐれでね」

今考えると、僕は気まぐれという言葉で、その場凌ぎに使うことが多い。ちゃんとした理由があるくせに、それを言えないから嘘をつく。やれやれ……僕も人間だね。

何にせよ、レイディルの異名は考える必要があった。彼女はもう、『黙示録』の舞台に足を踏み入れ、この宿命の輪廻に巻き込まれているのだから。

なのに、彼女だけ異名がないなんて、可哀そうだからね。

「レミネス様、『封冥者』たちを迎え撃つ準備は、いつごろ始めるのですか？」

「うーん……正直に言うとな、僕は準備なんて必要ないと思うんだ」
実際は、少し違う。正確に言うと、準備をしたくない……だ。

「しかしレミネス様、彼らを甘く見るのは……」

「わかっているよ。さあ、彼らにばれないよう、冥界の狂犬を集めよう」

そういう事情か……。俺やフィアラよりも、遥かに深い事情だ。

全てを話し終わり、レイトは紅茶の入ったカップを見つめていた。
いや、俯いたら、たまたまそこにティーカップがあっただけだろう。
ともあれ、これで宿命の輪廻は繋がった。大量にある謎のうちの
一つが解けた。

「俺のことはもういいだろ？これからどうするんだ？」

昔のことを話して辛くなったのか、レイトはう俯いたまま話を変えた。

俺たちも、本人が嫌がる話を無理矢理展開させるつもりはない。
少々強引なレイトの振りにのことにしよう。それが最善のはずだ。
「人間界のほうでは、『仮面児』が俺たちを迎え撃つ準備をしているはずだ。こっちも、それなりの策を練ってから、ここを出たほうがいいだろう」

はずだと言いつつも、俺は今『仮面児』がどうしているかを確信していた。当然といえば当然。本人の口から聞いたのだからな。

「より確実に『仮面児』とレイディル、そして『背徳の神天使』を倒すために……『永劫の真冥王』ゼヴィル、あんたの力を借りたい」
かつての戦いの情勢を一気に覆した『真冥王』の力。本人が言うように、多少の衰えはあるかもしれないが、俺たちにとって大きな力になることは間違いない。

この戦いを早く終わらせる為には、ゼヴィルの力が必要不可欠だ。

「頼む、ゼヴィル。あんたの力を貸してくれ」
少しの静寂が訪れた。

何故だ……迷っているのか？ゼヴィル……。

「……………すまないが、その頼み、聞き入れるわけにはいかん」
驚いた。まさか断られるとは思っていなかった。ゼヴィルは戦うことを望んでいないのか……。

とは言え、こちら「はい、そうですか」と諦めるわけにはいかない。

「何故だ、ゼヴィル！あんたの力で、一体どれだけの命が助かると思っている！」

俺たちを迎え撃つ為に、『仮面児』はケルベロスを集めている。しかし、集まる間にも、何人も人間が犠牲になっているだろう。それに、中には『仮面児』の指示を聞かないケルベロスもいるはずだ。『仮面児』を無視して、人狩りをするかもしれない。それが何匹いるかも分からない。

ゼヴィルの力があれば、世界全土に散ったケルベロスを一気に掃討できるはずだ。

「そうだぞ、オッサン！俺たち二人だけじゃ、『封冥者』を守れないかもしれない。もしもの時のために、オッサンの力が必要なんだよ！」

「……………」

俺達は何を言っても、ゼヴィルは黙っている。腹を立てた俺は、思い切り机を叩いていた。

「あんたは『永劫の真冥王』だろう！他を圧倒できる力を持ちながら、何故それを振るわない？この『黙示録』の舞台とあんたは、決して無関係じゃないはずだ」

力を持つ者が力を振るわないのは罪悪だ。救えるかもしれない何かを、見殺しにする。

力の使い方を誤れば、それが罪悪になることは少くない。しかし、ゼヴィルはそんな過ちを犯すほど愚かな人物ではないはずだ。

何をつている……ゼヴィル。

「勝手なことを言ってすまない。しかし私は既に老いた。今や『黙示録』を揺るがすほどの力を持つてはいない。仮に持っていたとしても、力を持つ者がその力を振るうのは罪悪。協力することはできません」

それが『永劫の真冥王』の論理か……要するに「弱い者虐めはしない」と言ったところだ。恐らく、娘である母さんの考えを敬ったのだろう。

いくら力が必要とは言え、本人が望まない事を強引にさせるのは気が引ける。仕方ない……俺たちだけの力で、何とかするしかないのか。

「……そうか。悪かった」

レイトが俺を呼ぶが、それはそれを無視し、部屋を出た。

少し……庭で冷静になろう。

達哉君が部屋を出ると、部屋は静寂に包まれた。口を開くことさえ躊躇するほどの、重い雰囲気紅茶を冷ましていく……。

「……あの、私……神崎さんのところに行ってきます」

フィアラ君が席を立ち、達哉君と同じく部屋を出て行った。

「……君は追わなくてもいいのかね？」

「ああ。二人の邪魔をしたくねえから。それに、そんな余裕もねえしな」

特に理由はない。しかし、私は紅茶を入れなおす事にした。

冥界の住人のほうが、人間界の正しい論理を知っている……笑えないな。まったく笑えない。

確かに、力を持っているからといって、ただそれを振るえば良いと言うものではない。力の使いどころを選ばぬものには、更なる力

を持った者によって裁きが下る。そのはずだった。

しかし、今の人間界は違う。親しいようでいて、腹の中では何を思っているのか、見当がつかない。自分の首を狙っているかもしれない。本当に親しく思っているのかもしれない。人間という生き物は、その複数ある候補のうち、一番悪いものを「こいつの本性だ」と思ってしまった。

だから人と人の関係は、常に殺伐としている。何の関係もない者同士が相手の時は特にそうだ。

友と友……そういった関係にあるのなら、本当に親しく思っている可能性のほうが高いだろう。しかし、社会という世界に出てみると、無関係者と無関係者の間には、常に火花が散っている。

それを恐れ、社会を捨てるものもある。それを変えようと、社会に挑む者もある。社会の基本構造が固まった瞬間から、人の心には冥界の闇よりも深い闇が生まれてしまった。

人間界の人間よりも、冥界の住人の方が、本来の人間らしい心を持っていると言っても、過言ではない。そんな状態になってしまっている。

なら、人間界に住む人は、本当に人と呼べるのだろうか。

「大丈夫ですよ。神崎さん」

「！……フィアラ。一体何が大丈夫なんだ？」

俺の考えをまるで聞いていたかのごとく、フィアラは俺を励ました。

まさか……顔に出ていたのか？

「今、神崎さんが何を考えているのか……大体はわかります。色々なことを考えて、人間界を救う事に、意味があるのか……そういう疑問にたどり着いていますよね？」

まさにその通りだった。

俺たちが必死になってこの世界を救ったとしよう。人々は何も知らぬまま、他人を警戒し、他人を恐れ、他人に嫉妬し、他人を憎み、他人を渴望し……終わりのない負の感情の螺旋が渦巻き続ける。

そんな薄汚れた世界を救ったところで、何にもならないのかもしれない。

「神崎さんまで、暗い感情に流されちゃだめですよ」

暗い顔をしていたのだろう。だからこそ、フィアラは俺にこれ以上の笑顔で接していた。

今まで勘違いをしていたが、フィアラは決して現実を知らないわけではない。むしろ、他との関わる事を恐れて、他人を拒絶していた俺なんぞよりも、今の人間界の状況をよく分かっている。

しかし、現実を知っても、現実を恨むことはしなかった。現実に沈むことはなかった。知っているからこそ、それを変えるために、まずは自分が努力する……そういう結論に至ったのだ。

フィアラは本当の意味で、人間界の希望なのかもしれない。

「ほんの少しでも、何かを変えようとしている人がいれば、その何かは変わります。それは……人間界全体も、例外ではないと思うんです。だから……」

そこから先はわかっていた。

だから聞く必要はなかった。だから俺は、フィアラを抱きしめていた。

「すまない。少し……迷ってしまった。お前の言うとおりで。世界は変えられる。変えよう……俺たちで……変えようと思ってくれる皆で……！」

「……はい！」

フィアラは笑顔だった。多分俺も……笑顔だ。

今の人間界よりも遥かに澄んだ風が、フィアラの髪を揺らした。

「フィアラ、この戦いが終わったら……」

「さて……そろそろ、『邪砕韌』とフィアラの様子を見てくるぜ」
「うむ……。しかし、庭には出るな。庭に出る扉の前で、彼らが戻ってくるのを待て」

へえ……わかってんじゃねえか。このオッサン。

色々複雑な事があるとは言え、オッサンは『邪碎靱』の爺さんだ。あいつと同じように、そういう系統の物事には鈍いんじゃないかと思っただけ、そうじゃないみたいだ。

「わかってるよ。上手くいくといいけどな。あの二人」

軽い調子でオッサンに言ってから、俺は部屋を出た。確か庭は、この廊下を……こっちか。

庭へ行く為に廊下を歩いていると、『邪碎靱』達と出くわした。

何だ、もう戻ってきたのかよ。ったく、わかってねえなあ、『邪碎靱』は。

「レイト、すぐにここを出る。準備はいいか？」

「あ？それは問題ねえけど、オッサンはどうするんだよ」

『邪碎靱』の顔には、笑みが浮かんでいた。発明の天才が、世界を動かすほどの発明をひらめいたような感じの笑みだ……。怪しい。「大丈夫だ。力を振るってはいくらなくても、別の方法がある」
「……………」

『邪碎靱』とフィアラが互いに目を向け、互いに微笑んだ。

何だ、結構進んでんじゃねえか。心配いらねえな。こりゃ。

「レイト、フィアラをつれて、先に行っていてくれ。俺はゼヴィルと話してくる」

「お、おお」

『邪碎靱』と分かれてからも、フィアラは微笑を絶やさなかった。

扉を開けて、達哉君が入ってきた。

先ほどとはどう見ても違う……何かを決意したような、曇りの一切ない目をしている。どれ、少し試してみるとしようか。

「何用かな？言っておくが、私はどうあっても戦うつもりはないぞ」

「ああ、わかっている。戦ってもらうのは諦めた。代わりに……ひとつ頼みがある」

準備は万端だ。すぐにこの宿命の輪廻を断ち切ってやる。

俺とフィアラとレイト、そしてゼヴィル。これだけの戦力が揃えば、勝てる。

「お、おい『邪砕靱』。ひょっとしてオッサン、来てくれるのか？」
「……ああ」

答えると、レイトは「すげえー」とでも言いたげな顔をした。そしてその直後、「どうやって？」と言いたげな表情に変わる。

「一体どんな説得をしたんだよ？聞かせてくれ、な？」

「ゼヴィル、冥界の扉を開けてくれ」

「……よからう」

レイトを無視して、俺はゼヴィルに頼んだ。ゼヴィルは冥界の王だ。扉を開くぐらいの事は、造作もない。と言っても、これは前々からわかっていたことで、さっき頼んだ事とは違うわけだが。

ゼヴィルが中指と親指を勢いよくこすり合わせ、そのまま人差し指に当てた。つまりは指パッチンというわけだ。高くて強い音が、辺りに響く。

空間にひびが入った。少しずつひびは広がっていき、やがて、音を立てて割れた。

扉は開いた。この先に、『仮面児』がいる。

「さあ、道は開けた。『黙示録』の終焉は近い」

「行くぞ……俺達の宿命を終わらせるんだ！」

性にあわなれないと思いつつ、俺は叫んでいた。

第八章 役目終えし者の願い1

冥界を出た先では、既に数百ものケルベロスが集まり、その狂犬軍団の最後尾に、『仮面児』とレイディルが佇んでいた。

「よく来たね、達哉。葬られる準備はできたかな？」

「……フン、余裕ぶった顔をできるのも今のうちだ」

相変わらず『仮面児』は微笑を浮かべている。その後ろでは、いつでも攻撃を開始できるよう、レイディルが片膝をついて、『仮面児』の指示を待っている。

レイディルの目に迷いはない。狩る者の目で、こちらを睨んでいる。

「……レイディル……」

「……………」

レイトが複雑そうな表情でレイディルに目を向ける。しかし、レイディルはその迷いなき眼で、俺たち全員を睨むだけだった。

最早レイディルは一般人ではない。『神術の仮面児』を守る、れっきとした女戦士だ。

一方レイトは、レイディルに彼女の姉、レイゼの姿を重ねている。そんな心情で、レイディルと戦えるのか……。心の整理はできたと言っていたが……。

「へっ、余計な心配は無用だぜ、『邪碎靱』」

レイトが不敵に笑う。最初に会ったときと同じ、自信満々の目だ。唯一違うのは、伊達眼鏡をかけなくなったところ。それだけでイメージが以前と全く違うが、この笑みを見ていれば、こいつがあの子のレイトだということが確信できる。

「宿命に振り回されるのはこれで最後だ。これが終わったら、俺は俺の、自由な人生を生きる！ 足引っ張るんじゃないぞ、『邪碎靱』」
「どうやら……本当に問題はないようだな。」

フィアラのほうは……迷いはない。こちらを睨んでいるレイディ

ルを、その澄みきった目でにらみ返している。珍しく強気な目だ。

二人ともやる気に申し分なし……後は、俺が割り切るだけだ。

「……ゼヴィル、さっき言ったとおりだ。頼むぞ！」

「うむ……。孫よりの頼み、しかと聞き入れたぞ」

ゼヴィルが体の向きを変え、先ほど通ってきた扉へと戻っていく。当然、レイトは驚きを隠せない。

「お、おい！どこ行くんだよ。『邪碎靱』、どういことだよ！」

悪いな。今ここで話せば、『仮面児』に聞こえてしまう。それだけは避けなければならない。いや……聞かれて困るのは『仮面児』じゃない。むしろ、『背徳の神天使』……奴のほうだ。

レイト、全てを話すのは、この戦いが終わってからだ。

「……達哉君、祖父としての願いを込めて言わせてもらう」

俺達とゼヴィル……どちらかが失敗すれば、この戦いに勝ちはない。必ず、それぞれの役目を果たす。願わくは……皆が無事でいることを……。

「必ず、持ちこたえてくれ……！」

「……ああ。こんなところで消えるつもりはない！」

俺の返事を聞いて安心したのか、ゼヴィルは冥界の扉へ入っていった。

「……なんかよくわからねえけど、何か考えがあるんだな？」

俺は頷いた。レイトは俺を信用してくれたようだ。

よっしゃああ！と気合を入れなおし、もう一度視線を俺に戻した。「おら、行って来いよ！」

突然『仮面児』のほうを指差したので、レイトが何を言いたいのか、しばらくわからなかった。レイトはあいつなりに、俺に気を遣ったのだ。

身近な奴との決着は、身近な奴がつける……そのために。

「勝手な兄貴とタイマン張って、今までの鬱憤晴らして来い！」

「……フィアラを……頼むぞ！」

大丈夫だ。レイトなら必ず、ケルベロス達からフィアラを守って

くれる。いつの間にか、俺はレイトに絶対的な信頼を寄せていた。他人を信じないと決めたのはいつだっただろうか……そんなものは、何処かへ行ってしまった。

「……さあ、冥界の狂犬たちよ。『聖血の封冥者』を汝らの故郷へ送れ！」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

『仮面児』の命令で、全てのケルベロスが雄叫びを上げた。

来る。だが、俺はお前達の相手をするつもりはない。一気に突撃してくるケルベロス達を飛び越し、一気に『仮面児』のいる場所へと向かう。

早く近づこうと、思い切り跳躍した直後、レイディルとすれ違う。レイトと決着をつける気か……。

「愛しの『封冥者』を守らなくてもいいのかしら？」

「心配は無用だ。誰よりも優れたボディガードを雇っておいたからな」

すれ違っている間の短い会話……。それぞれの道と共に、俺達の距離は離れていった。

流石に数が多いな。けど、そのうちの殆どが雑魚だ。一発斬れば死んでいく。『仮面児』が集める奴らを間違えたのか、それとも……。

「大丈夫か、フィアラ！」

「大丈夫です！レイトさんは、戦いに集中してください！」

俺がフィアラを守っている間にも、俺を無視して突っ切っていくケルベロスもいる。けど、『封冥者』の能力である障壁に触れたケルベロスは、解けるように姿を消していく。消滅しているのだ。

一気に来られたら厳しいかもしれないけど、数匹ぐらいがフィアラのところに行っても、彼女がやられてしまう心配はない。

意外に、俺たちよりも『聖血の封冥者』のほうが強かったりして

な。

十数匹ぐらいを蹴散らしたときだった。ケルベロスの死体を踏むことなく、レイディルが無音で着地した。閉じていた目を開き、俺を睨む。

「甘ったるい考えは捨てられたかしら？ 言っておくけど、こっちはあなたを殺す気よ」

「だろうな。けど、こっちは違うぜ」

宿命の輪廻に巻き込まれたお前を……絶対に死なせない。

それが、俺の見つけ出した償いの方法だ。なあ……レイゼ、それで許してくれるか？ ダメだったら、いくらでも償ってやるよ。お前のところに行った後でな！

「なめないでよ。そんな甘い考えじゃ、私には勝てないわ！」

おお、怖い怖い。悪いけどな、いくらすぐまれようが、俺は考えを曲げるつもりはないぜ。一度決めたことは絶対にやり通す。それが、俺の流儀なんだよ！

「そっちこそなめんな。フィアラを守りながらお前と戦うぐらい、造作もねえよ！」

罪を償う！ 『邪砕靱』との約束を守る！

やるべきことはたかが二つ。今まで迷いながらやってきた事に比べれば、このぐらい、本当に造作もねえ。レイゼ、もしお前ところに行けなかったら、俺は俺の日常を生きる。その時は……許してくれるよな……お前は優しいからって、勝手に納得させてもらうぜ。

「行くぜ。本気できやがれ、レイディル・ニアス！」

特に何もしていない。目をつて、俺を待っている。

純白の翼を背に、『仮面児』は、ただその場に佇んでいた。

「……………」

「君らしくないね。てっきり、近くに來た瞬間斬りかかってくると思っていたけれど……」

ゆっくりと、『仮面児』が目を開ける。

あくまで穏やかだ。こいつだけ、まるで違う世界にいるかのよう……時間軸がまるで違って感じられた。そこに佇む『仮面児』は、天の使いと呼ぶにふさわしかった。

まったく……現実離れした兄を持ったものだ。俺自身も、人のことは言えないが。

「……僕を斬るのかい？」

「勘違いをするな。俺の敵は『神術の仮面児』ではない。『背徳の神天使』だ」

嘘だな……。俺は『仮面児』を完全に敵視している。

宿命だから……それだけではない。俺は昔から、全てにおいて完璧な神崎祐に嫉妬していた。

一教えただけで十を理解する。正しく、天才と言う言葉の似合う少年……それが神崎祐だ。人当たりが良く、学問もでき、スポーツも完璧にこなす。同学年から、憧れの眼差しで見られていた。

そんな神崎祐と、俺はいつも比較され、そのたびに親に呆れられていたものだ。と言っても、父さんと母さんは俺の今後に期待し、反骨心をあおっていただけなわけだが。

当時、そんな事さえ理解できなかった俺は、神崎祐を恨み続けていた。今考えると情けない。

「けど、敵である『背徳の神天使』を復活させようとする僕は、君の敵……かな？」

俺の心を読み、『仮面児』は微笑んだ。レイトとは別種の笑みだ。

「フン……理解が早いのは助かるが、その笑みはいただけない」

「それは残念。の含みもないつもりだったんだけど」

微笑み続ける『仮面児』に対し、俺は奴を睨みながら刀を抜いていた。

「『神天使』……長き封印より目覚めるか」

「我々を裏切り、神界、人間界、冥界の全土にを走らせた背徳者。未だ野心を捨てずにいようとは」

「腐っても我らが同胞……わずかでも、誇りは保っている事を期待していたが……違ったようだな」

「神界が人間界を操作する時代は終わった。古き考えを捨てられぬ者には……死が待つのみ」

「それを、我々にせよ……そう申すか、『永劫の真冥王』よ」

無限の白い空間……。その世界に住まう彼らは、私の招集に応じてくれた。

しかし、ここからが問題だ。彼らの大半は頭が固い。そう簡単には、動いてくれぬだろう。とは言え、こちらにも約束がある。引き下がるわけにはいかん。

多少、威嚇を含んで話したほうが良さそうだな。

「左様……。宿命を継ぎし者達のみでは、神たる『神天使』を打倒するに及ばず。背徳者と同等たる汝らの力が必要不可欠と判断する」
「汝の言う事、微塵の誤りもない。されど、我らは既に、人間界より縁を断ち切った身……。今になって彼らと関わるのは得策とは思えぬ」

思ったとおりの意見だ。予想通り過ぎて、かえって面白みに欠ける。

ともあれ、私の頼みを聞き入れるつもりはないようだ。仕方あるまい。こういう手は、あまり好きではないのだが……。

「かつては全知全能とまで呼ばれた者達の言葉とは思えぬ。腐ったのは、背徳者のみならず……か」

「我らをするか、『真冥王』。我らと汝はあくまで同格。過ぎた言葉は許さぬ」

どれ……軽く脅してみるとしよう。

ゴゴゴゴゴゴ……ッ！

私の力があれば、この無限世界を揺らす事など造作もない。この空間を消滅させることも同様だ。

「我と汝らが同格とは……汝らは余程の恩知らずと見える。今我が力振るおうものならば、汝ら全ての死のみならず、この世界の崩壊も免れぬぞ」

「愚弄の次は脅迫か。時の流れと共に腐ったのは汝のほうぞ」

「我は確かに老いた。腐りもした。されど、力のは無に等しい。さあ、選ばれよ。汝らと世界の死か……『黙示録』の完結か」

彼らは黙り込んだ。彼らはそれぞれ、口を開かずして意志を伝え合う事ができる。

私が彼らに劣る、唯一の能力だ。

「我らはかつて、人と共に戦いし身。同士たる人が救助を求むるなら、我らの力、貸して進ぜよう」

「よき決断、感謝いたす。さあ、背徳者に汝らの鉄槌を……！」
達哉君、もう少しだ。持ちこたえてくれたまえ。

「頑張るじゃない？本当にケルベロスと戦いながら、私の銃弾を避け続けるなんて」

「けっ、なめるなって言っただろうが」

強がっては見たものの、正直言ってきた。

ケルベロスが一気にフィアラに襲い掛からないように注意しながら、休むことなく繰り返し出されるレイデルの銃弾を避ける。最初の内は本当にきつかった。

けど、だんだんケルベロスの数も減ってきて、フィアラにまわす集中力をレイデルにまわせる。かと言って、油断はできないけど。「けど、このままじゃ負けるのはあなたよ。いつまでも避け続けていられないだろうし、フィアラのことも気にしていないといけないしね」

「眼鏡取った俺の力をなよ。総合の力が二倍なんだからな」

嘘だ。勿論。それだけ楽にパワーアップ出来るなら、苦労しない。まあ、俺は冥界の扉が開いたことで力を手に入れたわけだから、

実際楽にパワーアップしている。詐欺だと言われても仕方がない。

「それは凄いわね。是非ともその力を見せてほしいものだわ」

「バーカ。秘密の力をそう簡単に見せられるわけないだろ。もっと追い詰められてからじゃないとな」

どこのヒーローだ、俺は。

考えてみると懐かしいな。俺も昔は、そんなヒーローの番組を必死になってみてたっけ。劇にも行ったな。そのたびに叫びまくってた記憶がある。

その度に母さんに殴られてたな……俺。

「秘密の力……ね。その力で、姉さんを殺したのかしら？」

「……ああ、そうだ」

否定する気はなかった。何でって、事実だからだ。

俺があいつの姉を殺した。その現実を俺は素直に受け止めているし、背負うべきものも背負っているつもりだ。だからこそ、迷わない。

『邪砕靱』が俺に気を遣って館に戻った後、俺なりに色々考えたんだ。

今更迷ってなんか……いられねえんだ。

「いつになったらかかって来るの？ そうやってただ逃げられるだけっていうのも、結構腹立たしいのよ」

「ほほう、それは言い事を聞いた。もっとイラつけ」

ふざけて言うように思われがちだけど、これが俺のやり方なんだ。適当にやっているフリをして、相手をイラつかせて、その隙を狙う。何にも考えていないように見えて、実は結構考えてるんだぜ。

「調子乗ってられるのも今のうち……よ！」

「……………！」

レイディルが突然銃撃をやめ、俺に向かって走ってきた。

わかってる。方向は俺だけど、レイディルの狙いはフィアラだ。

通すわけには行かない。けど、あいつは殺さないって決めた……どうすればいい？

迷っている間に、レイディルは俺の横を通り過ぎ、フィアラに銃を向けた。

ガウンッ！

「きゃあっ！」

フィアラが悲鳴をあげた。当たってしまったのかと心配したが、大丈夫だ。この間みたいにな、髪をかすっただけだ。けど、そのせいでフィアラが『光の黙示録』を手放してしまった。

「あ……っ！」

フィアラは急いで『黙示録』を拾おうとしたけど、若干レイディルのほうが早かった。

「残念だったわね、『命狩の執行人』さん。私達の勝ちよ」

しまった……！悪い、『邪碎靱』！

第八章 役目終えし者の願い2

俺は『仮面児』に刀を向けている。『仮面児』はそれを意に介していないかのように微笑を絶やさない。そんな状態がどのぐらい続いただろう。

一分かもしれない。数十分かもしれない。本当はどのぐらいなのか、俺にはわからなかった。

「冥界で、父さんと母さんの挨拶ぐらいはしてきたかい？」

「残念ながら、そんな余裕はなかった。お前のおかげでな」

冥界にいる間、死んだ父さんや母さんに会おうと言う発想は、不思議と浮かばなかった。

そんな事を簡単に思いついたら、皆そうしてしまうと、冥界自体が、そう思わせないように機能していたのかもしれない。

得体の知れないものは……どこにでも転がっているものだ。

「だろうね。仮にできても、向こうがそれを望まなかっただろうし……」

そのことについては、俺も同感だった。

俺たちに宿命の事を黙っていた両親は、あわせる顔がないとでも言って、俺を避けただろう。確証はないが、そんな気がする。

「それにしても、君は変わったね。力が目覚める前は、とても気が弱かったのに」

「……人は変わる。良くも悪くもな。いつもそう言っていたのは、お前だろう？」

力が目覚める以前から、神崎祐は他とは違う、かけ離れたなにかがあった。

それが何なのか、今になっても分からない。けど間違いなく、神崎祐は、他の一般人からは突出した、人間を越えた人間だった。

それを本人も自覚していた。あいつのやけに落ち着いた性格は、そのせいなのかもしれない。

「確かにそうだったよ。覚えていたんだね。僕の言葉を」

「憎い敵の言葉だ。誰が忘れるか」

できれば、平和な日常を過ごしていたかった。当たり前前に慣れてしまった人は、何か特別なものを求めるが、それは間違いだ。力が目覚めた時に気付いた。

普通な日常が、俺たちから見ればどれだけうらやましい事か……。

「憎い敵か……もう少し、いい覚え方をしてほしかったよ」

『仮面児』がため息をついて、目を閉じた時だった。

「レミネス様ーっ！」

レイディルの叫ぶ声が、俺達のずれた時間軸を元に戻した。

目を向けると、レイディルの手には『光の黙示録』が握られていた。奪われてしまったか……！

しかし、当然ながら、レイトやフィアラに対する怒りはなかった。怒る事など、誰ができるだろうか。

「……どうやら、君の本当の敵が現れるようだね」

「『仮面児』……奴を復活させれば、お前の体が……」

魂は完全復活しても、体までは蘇らない。となれば、『神天使』は当然誰かの体を奪おうとするだろう。まず狙われるのは、一番近くにいる『仮面児』だ。

それを知つての上か、レイディルが俺達のところまで来て、『光の黙示録』を『仮面児』に手渡した。

「レミネス様……」

「わかつているよ。今までご苦労だったね」

『仮面児』の微笑みに、レイディルは満面の笑みを返した。

銃を捨て、レイディルが後ろを向く。彼女の目線の先には……。

「レイディル……まさか……」

「君の思っている通りだよ。彼女は彼を許す。己の望みを叶えてもらうことを条件に……ね」

一瞬見えた……レイディルの目に憎しみはなかった。大役を果たした後の、幸せそうな光だけが、レイディルの目に宿っていた。

『仮面児』に『光の黙示録』を渡した後、レイディルが銃を捨てた。

自分の役目は終わったと言うように、自分の武器を手放したのだ。それと同時に、本当のレイディルが、何かから解放されるような感じがした。

レイディルがこちらを向いた。恨みとか、そういう負の感情が全て消え去ったレイディルの姿は、十年前のレイゼが、生きたまま成長した姿にも思えた。

俺に向かって微笑みながら、レイディルがこっちへ戻ってくる。驚いた。初めてなんだ。レイディルが、俺に向かって微笑んだのは……。

「レイディル……お前……」

俺はいまいち状況がわからない。

困っている俺に対して、レイディルはただ微笑みを見せている。

「レイト君……その……ごめんね」

「えっ……何……が？」

突然謝られても、俺には何に対する謝罪なのかわからない。そんな自分が、情けなく思えた。

「本当はね、最初から許してたんだ。あなたの事」

口調の変化があまりに突然なので、傍から見れば、軽く演技をしているようにも取られるかもしれないが、間違いなく、こっちが本当のレイディルだ。

そのことは、長くレイディルと一緒にいたフィアラが、一番よく分かっているだろう。

「あの事件の後、お父さんから詳しい話を聞いて、すぐにおかしいと思ったの。あなたの両親は、大鎌を使う仕事なんてやってないで

しょ？前に姉さんから、あなたの両親は不動産屋で共働きをしているって聞いたから、それぐらいは知ってるの。不動産屋で働いているような人が、自分の家に大嫌なんて置いているわけがないのよ」

事件の起きた瞬間には、そんな事を考えられなかったはずだ。俺がレイゼを殺したとだけ聞いて、俺を恨んでいただろう。

しかし、冷静になって聞いてみると、何かがおかしいと言う事に気づいたのだ。

「そのことが、何か深い事情があったんじゃないか、本人の意思じゃないんじゃないか。そんな風に、私の考えを変えさせたの。父さんと母さんが、あなたを恨むのはわかるわ。こういう事情であれ、姉さんを殺した事には変わりないもの。でも私は、あなたを恨めなかった。仕方ないと思える事情があるのなら、あなたを恨むのは筋違いなもの。それを確かめる為に、あなたに本当のことを聞こう聞こうと思っている内に、両親が引越す事に決めちゃって、結局聞けずじまいだった」

正直、聞かれなくてよかったと思う。

当時の俺が何を聞かれても、説明のしようがなかった。俺が『黙示録』について知ったのは、事件の三年ぐらいあとのことだ。事件当時の俺が説明を求められても、分からないとしか言いようがなかった。

もしそんな俺の態度を見たら、レイディルも俺が何の理由もなくレイゼを殺したのだと思っただろう……考えるだけでも恐ろしい。

「本当のことを知ったのは、つい最近。レミネス様が、私を助けてくれた時。まさかと思って、レミネス様に聞いてみたら、あなたの事を教えてくれたわ。と言っても、あなたが『神威の邪碎靱』と『命狩の執行人』、その内のどっちなのかは、わからなかったけど」

思えば、本格的に『黙示録』が動き出したのは、最近だ。

『邪碎靱』たちに会うまで、俺は昼に学校へ通い、夜にケルベロスを狩る……こういった生活を、十年近く続けていた。

その時間に比べて、あいつらに会ってから、事態の進展が驚く

ほどに早かった。

「お前……『仮面児』についていなくていいのか？お前はあいつを……」

「いいのよ。私の役目は……もう終わったわ。後は、あなたに願いを一つかなえてもらうだけ」

願い……？レイディルが、俺に……？

気が付くと、レイディルの目は潤んでいた。

「レイト君……私を殺して」

「な……っ！」

今、レイディルは言った。間違いなく、俺に「殺して」と。

「レイディル、どういうつもりですか！殺してだなんて……」

さっきまで黙って俺達の様子を見ていたフィアラが、大声を上げた。

まさか……レイディルは……。

信じたくないことだが、考えれば考えるほど、確信は深まっていた。彼女はこう思っている。昔に生き別れた、自分の姉に会いに行きたい……と。

「フィアラ……私はあなたを殺そうとしたわ。それは誰よりも、私自身が許せないことなの」

「そんな……っ！あなたは神崎祐さんのために……それに、今まであなたが撃った弾は、一回も私にあたってなんていません！」

そうだ。

今までレイディルがフィアラに放った弾数は二発。その両方は、フィアラに直撃せず、髪をかすめただけだった。最初から、フィアラを殺す気がなかった証拠だ。

「あなたはもう戦わないんですよね？だったら、今のあなたは昔と同じ、私の友達です！」

「気持ち嬉しいけど、ダメなのよ。もう、私自身が、あなたを殺そうとした罪悪感に耐えられないから……。それに、今私は、姉さんに会いたい……そう、強く願っているから」

「レイゼだけじゃなくて、お前まで俺が殺さなくちゃいけないのかよ……。お前までいなくなったら、俺は将来……。誰に……。償った事を伝えればいいんだよ……」

情けねえ。泣いてるぜ、俺。けどダメだ。いくら情けないと思っても……。止まらねえ……。

情けなくて俯いていると、暖かい手が俺の頬に伸びてきて、優しく顔を上げさせた。

「大丈夫よ、レイト君。私を姉さんに合わせてくれることが、私と姉さんへの、償いになるから……」

畜生……。涙が止まらねえ……。こんな時に、男が泣いてどうするんだよ！

女が死ぬ決断をしてるんだぞ……。泣きたいのは向こうだろ！泣きたいのを必死で我慢してるんだ、男が堂々と答えなくてどうするんだ！

「だから……。だからお願い。姉さんに会わせて」

レイディルが俺の鎌を持って、自分の胸に近づける。近い……。振れば斬れる距離だ。

おい俺、いつまで泣いてるんだ！十分に泣いただろ。十分休んだだろ。振れるだろ！

「……。少し痛むぜ？」

「大丈夫よ。覚悟はもう……。できているから」

悪い、フィアラ。俺はお前より、レイディルの願いに答えたい。

俺の手が震えている。レイディルの手も震えていた。その手を強く握って、俺が鎌を振るのを待っている。これ以上待たせるほうが、レイディルにとって酷だ。

「うあああああああああああああああああああつ！」

ザンツ！

思い切り大鎌を振った。傷口から大量の血が噴き出し、俺の顔に、服に、返り血が飛ぶ。

俺が初めて……。自分の意志をもって、人の命を狩る瞬間だった。

「あり……が……とう」

糸の切れた操り人形のように、レイディルは倒れた。

「レイディル……いやああああああああああああっ
！」

フィアラが必死で流れる血を止めようとする。しかしレイディルの血は、流れる事を望んでいるように、地を赤く染めていった。

「レイディル……レイディルッ！」

レイディルがレイゼに会いに行ったとわかってからも、フィアラはレイディルの名を呼び続けている。

「……………」

その様子が、ひどく痛々しかった。

「レイディル、レイディル！レイディルーツ！」

「もうやめろっ！もう……死んだ」

死んだ……。その言葉が、俺の中で響いた。

遠くで、フィアラの泣く声が聞こえる。レイディル……姉には会えたか？

フィアラの後ろで、レイトが地面に鎌を投げつけた。無理もない。フィアラの感覚と同じかそれ以上に、レイディルはあいつにとって、特別な存在だった。

その人を斬った武器で、それ以上戦おうと思えるはずがない。

「あれが……レイディルの願いか」

「そう……そしてあれが、『慈愛の銃撃手』の、最期の姿だよ」

一番遅れて『黙示録』の舞台上上がった者が、一番早く『黙示録』の舞台を去った。『黙示録』にとって、俺たちなど、こまの一つに過ぎないと言うのか……。

「さあ、今度は僕が、『黙示録』に逆らう番だね」

「……『仮面児』？」

『仮面児』が『闇の黙示録』を懷から出してくる。

「待て！『神天使』を復活させるな！」

「光と闇に別れし『黙示録』よ……かつての姿にもどれ！」

ブアアアアアアアアアアアア……ッ！

二つの『黙示録』が共鳴し、互いが強い光を放った。

未来と記す光と、過去を記す闇……その二つが一つになる時、それに記されるのは全てか……それとも……。それを知るには、これから始まることを乗り越えなければならない。

——我、長き封印を破り、今こそ真の姿現さん……！——

『神天使』の声が響く。巨大な影が、『仮面児』の上に現れる。

——我が魂を知る者よ、その体を我に捧げ、我が力となれ！——

『神天使』が『仮面児』に手を伸ばす。まずい……奴が体を手にしてしまつては……！

俺は焦っていた。しかし、あくまで落ち着いている『仮面児』の手には、光が灯っていた。

カッ！

『仮面児』が手を掲げると同時に光が激しく輝き、『仮面児』に乗り移ろうとしていた『神天使』を下がらせた。あれは……光系の……。

——『神術の仮面児』よ……主たる我に逆らうか……！——

「誰が君を主と認めたのかな？そんな記憶……僕にはないけどね」

『仮面児』は微笑んでいた。間違いない。俺は確信した。

『仮面児』は逆らったのだ。『黙示録』に定められた未来に。

あいつはもう敵ではない。『神術の仮面児』ですらない。

あいつは神崎祐だ。帰ってきたのだ。十年の時を経て、俺の兄が……！

「兄さん……」

「ポケットとしていちゃだめだよ、達哉。これからが大変なんだからね」

——神に逆らうとは愚かな下級生物よ……。かくなる上は、その体、力ずくで奪わん！——

終章 『黙示録』の終焉1

神崎祐が帰ってきた……！

兄さんはもう敵じゃない。戦わなくて……いい。

「さて、逆らったのはいいけれど、これからどうしようか」

兄さんが『神天使』を見上げる。

かなり困っているはずなのに、本人は微笑を絶やさない。やはり、変わっていないな……。

——我、世の統括者なり。統括者に逆らう者には、死を！——

『神天使』め……何となくそうではないかと言う気はしていたが、典型的な悪役だ。神の中にも、馬鹿なやつはいるのか。

「達哉、何か手は無いかい？」

「……『神天使』に聞かれるわけにはいかない。だから詳しく話すことはできないが、今はただ、持ちこたえてくれ。そうすれば……必ず！」

やつに聞かれれば、その手段が潰されてしまうかもしれない。そうやってしまつては、俺たちに勝ち目は無い。今は耐えるときだ。

反撃のをあげるのは、そのときが来てからだ。

「……信用していいんだね？」

「ああ。耐え切ることが出来れば、俺たちは勝てる！」

理由も話さず、ただ「耐えろ」としか言わない。こんなので、いったい誰が納得してくれるだろうか。

しかし、兄さんは頷いた。俺の言葉を信じてくれるのだ。その心に応えなくてはならない。急いでくれ……ゼヴィル！

——覚悟するがいい……愚かなる貧弱な生き物よ！——

魂の状態のまま、『神天使』が両手を近づける。

バチバチバチバチ……ッ！

濃い青色の光珠が発生し、周りでは電気が流れている。さすがに完全なだけはある。魂だけの状態でも神術を使えるとは……。

——サンドール・ブラスト！——

「達哉、僕の後ろへ！」

ババババババババババ……ッ！

放たれた雷系の神術を、兄さんが防御系の神術で防ぐ。しかし、兄さんの神術は、彼の中に『神天使』の魂がいたから、まともに扱えたのだ。

その『神天使』が自分の中にいない今、兄さんが神術を使える回数や時間は限られている。

「……さすがに……きついなあ。格好つけなきゃよかった」

「兄さん、三つ数えたら、それぞれ別の方向へ逃げるぞ。一……二……」

ドオオオオオオオオオオ……ッ！

俺たちがどいたことで、雷の珠が地に落ちた。

地面に触れると同時に、珠は強い光を放ち、周辺に地震を起こした。

「あらら……当たると痛そうだね」

「のんきなことを言っている場合か。次がくるぞ！」

気がつくと、空中に岩が舞っている。巨大な岩が、俺たちめがけて、突撃してくる。が、岩が俺たちに当たることは無かった。

ピイイインッ！

岩が真っ二つに斬られ、俺たちの横を通過していく。岩はそのまま、大きな音を立てて地面に落ちた。

「よう、楽しそうじゃねえか」

「レイト……」

岩を斬ったのはレイトだった。これには俺も驚いた。

ついさっきまで、レイトは鎌を地面にたたきつけ、戦いを放棄していたはずだ。それが、この短時間で立ち直ったというのか……。

「気の抜けた顔してんじゃねえよ。敵が目の前にいるだろ」

完全に立ち直っている。それどころか、戦う前よりもまっすぐな目をしている。

こけてもただで起き上がりはしない……か。

「……フィアラは？」

俺が問うと、レイトは鼻高々に笑った。

「心配御無用！ケルベロスどもは片付けたぜ。ってか、ほとんどの奴がフィアラのフィールドに触れて消えていきやがった。俺の守りなんて要らなかつたんじゃないか？」

さっきまでレイトがいた方向を見ると、不安そうな顔でフィアラがこっちを見ている。

見たところ外傷は無い。なんとも無いようだ。

「……レイト」

「あ？」

「感謝する」

「へっ、これが終わったら何かおごれよ」

それぐらいならいくらでもしてやる。何せフィアラを守ってくれたのだから。何をおごってやろうか……飛び切りうまいものでないとな。

——おのれ……我の邪魔をするならば、死あるのみ！——

「はん！てめえごときに殺されるほど、俺は落ちぶれちゃいねえよ！」

レイトは強気だが、実際そんな余裕は無い。レイト自身はさっきまでケルベロスやレイディルと戦っていた。その疲労が簡単に回復するはずが無い。兄さんは神術を使ったことで、かなり疲れている。まともに戦えるのは俺ぐらいだが、力の差は歴然だ。

悩んでいる間に、『神天使』は次の攻撃を構える。

——受けよ……神の怒りを！——

ブオッ、ブブオッ、ブオッ！

突然の事だった。空からいくつもの光が放たれ、その光が『神天使』を貫いた。

——ぬっ……！臆病者どもめ、今更現れるとは——

「待たせたな。達哉君」

同等の力を持つ者を倒すことは出来ない。何とかして、それを超える必要がある。

「その不足している力を、神たちに借りようというのかね？」

「ああ。神たちの力を借りれば、少なくとも、『神天使』を無防備にすることが出来るはずだ。一撃とはいかなくても、それなりのダメージは……」

与えられるはずだ。ありったけの魂を集めれば、行動不能にはなるはず。

底に何らかのダメージを与えれば、あいつを倒すこともかなうだろう。回りくどい方法だが、俺の陳腐な頭脳では、これが限度だ。

「ふむ……。その方法であれば、私は力を振るわずともよい……と言わうわけだな？ 確かに君の言っていることは正しい。黙示録を終結させることもかなうだろう。任せたまえ」

その後すぐ、俺たちは戦いに挑んだ。

多少予定とは違うが、概ねよしだ。これならば。

「何をしているのかね、達哉君」

「ゼヴィル……？」

ゼヴィルは空を指差した。そこでは、神達が『神天使』を捕らえ、何かを待っている。

「まだ終わってはいない。さあ、決着をつけてくるのだ」

「決着？ しかし、俺の力では……」

それなりのダメージが限度。と言いかけたのを、ゼヴィルにさえぎられた。

「君個人の力ではない。君と、もう一人の力で、奴を倒すのだ」

もう一人？ いったい誰……。

問おうと思った瞬間、ある人物が場に到着した。

「神崎さん、お怪我はありませんか？」

……まあ、この人物だ。

俺やレイゼは一瞬で移動したが、俺たちが最初にいた場所と、今俺たちがいる場所は、かなり離れている。そのため、フィアラは息を切らしていた。

俺たちに目立った怪我がないことを確認したフィアラは、兄さんとは違う笑顔を見せた。

「あ、ゼヴィルさん。ありがとうございました」

深く頭を下げるフィアラ。何のことを言っているのか、それは言うまでもないだろう。

ゼヴィルに神たちを呼んできてもらう……。このことは、俺とフィアラ、二人で決めたことだ。だからフィアラはゼヴィルが何しにいていたかを知っているし、神たちが現れたこの状況も理解している。

「何、私もかつては『真冥王』と呼ばれし者。これぐらいはせねばな」

神たちよりも強大な力を持ったゼヴィルなら、神たちを『黙示録』の舞台に引きずり出す事ができると思った。実際に力を振るわずとも、威嚇した程度で神達の説得は可能だっただろう。

そして今、思ったとおり神達は姿を現し、『神天使』の動きを封じてくれている。ゼヴィルなくしては、できないことだった。

「さあ、達哉君。『黙示録』の幕を下ろす時だ。君が『神天使』を『黙示録』の舞台から消滅させたまえ。神たちも、それを望んでいる」

神達は、俺が『背徳の神天使』を消滅させるのを待っているのか……？

自分たちでは『神天使』を殺せないということもあるかもしれないが、何よりも、宿命の輪廻を断ち切る責務は、宿命の輪廻に巻き込まれた者にある。と言う事だろう。

勝手に巻き込んでおきながら何を言っているのか。と言いたいところだが、彼らはもう人間界そのものとかかわりを断ち切った身だ。『黙示録』の核心である『神天使』に関わる事は、何としても避け

たい。奴を倒す事を人に託した上で、彼らは神界に帰ったのだから。
「何やってんだ、さっさと行って来いよ。『邪碎靱』」

レイトがバシバシと俺の背中を叩く。

そうだ……。このまま『神天使』を放置するわけには行かない。
あいつが世界に存在すれば、間違いなく人間に危害を及ぼす。消さなければ。

「『聖血の封冥者』と共に、神の力を振るいたまえ。そうすれば、
神威はの力に変わる」

「え……。わ、私ですかっ？」

フィアラが驚いて自分を指差す。

どうやら、皆わかってるようだ。そんなにわかりやすかったのか？ 決定的な行動を取った覚えはないのだが……。

「何不思議そうな顔してんだよ。お前、フィアラが撃たれた時に、
完全にキレただろ？ それでわかったんだよ。つつうか、隠してるつもりだったのか？」

皆に悟られるような行動は避けているつもりだったが、どうやら無意味だったようだ。今まで隠そうとしてきた俺が情けない。

フィアラはと言うと、思ったとおり顔を赤くしている。否定する気はない……。というわけだ。

「ほら、フィアラも何照れてんだよ。どでかいケーキ入刀だ。しっかり決めて来いよ！」

今度はフィアラの背中をバシバシと叩く。

レイト、言っている事がおかしいような気が……。しかし、その言葉を真に受けて、フィアラはすっかり赤くなっている。まったく……気持ちを隠せない事も問題だな。

仕方ない。今更はぐらかしても無駄だ。

「……フィアラ」

「は、はい！」

何緊張してるんだ。最早決定的とかそういう次元じゃないな。

「……『黙示録』の最後だ。一緒に戦ってくれ」

「……はい！」

俺達は二人で刀を持った。何故二人なら神を消滅させる事ができるか……それは理解していた。恐らくフィアラも。

「さて、今一度巨大な扉を開けるとしよう」

ゼヴィルが空中と手の甲で軽く叩いた。それによって、空間にひびが入り、今まで見てきた中で飛び切りでかい冥界の扉が開いた。

冥界中の魂を全て集める……そういつているのだろう。

「……行くぞ、フィアラ」

「はい」

魂を集め始める。すると、一瞬でたくさんの魂が集まった。

巨大な冥界の扉から、一つ、また一つと、魂が刀へ集まってくる。

——達哉……——

「……………」

二つの魂が俺の近くへ来て、声をかけてきた。

昔から一度も忘れた事はない。この声は母さんだ。そしてとなりにいるのは恐らく父さんだろう。

——私達も力を貸します。だから自信を持って！——

——大丈夫だ。ありきたりかもしれないが、お前ならできる——

俺への激励を済ますと、二人はゼヴィルの下へ移動した。

ゼヴィルの反対を押し切って人間界へ出てきた母さん。冥界の住人であることを知りつつも、母さんと結婚を決意した父さん。

時間はないが、いろいろと話したいことがあるはずだ。

——父さん……——

「何も言う必要はない。君達の想いはわかっていているつもりだ」

ゼヴィルのほうも、未だに怒っていると言うわけではないらしい。当然だろう。

怒っているのなら、俺に対してな態度はとらないはずだ。悪態について、俺の存在など無視したはずだ。そういった理由から、俺は確信していた。

ゼヴィルはとっくに二人を許している……と。

終章 『黙示録』の終焉2

——レイト、元気にしてた？——

「その声……レイゼか！」

俺の前を、二つの魂が浮いている。

一つはレイゼ。そしてもう一つはレイディルだ。

「レイゼ……えっと……何て言うか……」

言葉が見つからない。そりゃそうだ。

昔に自分が殺してしまった人が、今日の前にいるのだ。一体どう言葉を出せばいいのだ。この状況では、笑顔で「よう！」とも言えない。言えるわけがない。

——大丈夫よ。もう全て知っているから。あなたはもう、私達に束縛されなくていいの——

思えば力が目覚めてから十年……俺はずっと、自分の罪を償い方法を探していた。何をすれば、レイゼは許してくれるだろうか。

『邪碎靱』達と出会う前、ケルベロスを狩っている間にも、そんな事を考えていた。

——そうよ、レイト君。あなたはもう、自由よ——

「お前ら……」

畜生……一体何回泣かせたら気が済むんだ。

一回目はレイゼを殺してしまったとき。二回目はレイディルを殺した時。あ、今回の涙は、今までのものとは質が違うな。

二回目までは、俺は悲しくて泣いていた。けど今回は違う。

レイゼは俺を許してくれた。俺の願いは叶ったんだ！

心から喜んでいる俺を見て安心したのか、二人は『邪碎靱』の刀に向かう。

「あ、待って、レイディル！」

近くに來たレイディルに、フィアラが叫んだ。

——大丈夫。何も言わなくていい。あなたは、私がいたことを覚えていてくれればいい——

「……………うん！」

二人の魂は、光る刀の一部になった。あの二人が『黙示録』を終わらせる手助けになると思うと、自分のことのように嬉しかった。

レイディル……姉と再会できたんだね。

言葉は要らない。それを知っただけで、十分だよ。

「……だめだなあ。僕、こんなに涙もろかったっけ」

涙のせいで、目の前がはっきり見えない。ずっと我慢してたからなあ……。

父さんや母さんへの罪悪感……そしてなによりも、達哉への罪悪感……ずっと我慢してきた。もう……我慢しなくてもいいのかな……。

いいのなら、思い切り泣いてしまおう。

「……フィアラ」

「大丈夫です。もう」

フィアラの目は涙で潤んでいる。

しかし、その目はまっすぐだった。

「一気に刀を振る下ろすんだ。できるな？」

「大丈夫です。神崎さんがいますから」

まったくこいつは……。よく平気でそんなことが言える。照れるところを間違っているんじゃないか？

そう思っても、俺は笑っていた。フィアラも笑顔だ。俺は……この笑顔を守りたい。だから、『背徳の神天使』、フィアラの、みんなの幸せを奪うお前を消滅させる！

「覚悟しろ、『神天使』！」

ヴォオオオオオオオオオオ……ッ！

刀が光を帯び、どんどん長くなっていく。その光は、雨雲のなくなった夜の世界を、明るく照らしていた。これが……希望と言う兵器だ。

いや、もう一つあるな。それこそが、人の最終兵器だ。

「！」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！

大きな音と共に、青い光が辺りを包んだ。

「よくやってくれた。我々の勝利だ」

『背徳の神天使』は消滅した。刀を振り下ろした跡が、地面に残っている。

疲れ果てたのか、フィアラは眠っている。その様子を、レイトが見守っていた。

『神天使』の消滅を確認し、神達は自分達の世界へ戻った。これ以上、俺たち人間に関わるのは、人間の歴史を変えてしまう可能性があると思うたのだろう。

『神天使』が消えた後残ったのは、一冊の本……。その本を、ゼヴィルが拾い、俺に差し出した。

「見てみたまえ。これが光と闇、二つの融合した『黙示録』だ」

言われるままに、俺は『黙示録』を開いた。未来と過去の記される『黙示録』……。その二つが融合した真の『黙示録』は、ただ白い。白いページが、何枚も続いているだけだった。

「白紙……」

「そうだ。宿命の輪廻の鍵となった二つの『黙示録』……。その二つの書物は、それぞれ先に起こることと、前に起こった事を記していた。だが、元々の『黙示録』は白紙……。それは何故か。何のことはないのだ。真の『黙示録』が記すのは、『今』。今であるから、

なにあるのかを記す事はできない」

今……その内容を記す事は、不可能なのだ。不可能だから何も記されえる事はなく、ただ空白名だけのページが続く。

それは、『今』何が起こるのか……。その可能性は無限であるということを表していた。

「達哉、『神天使』は消滅した。だけど、まだ世界は安定していない。あのときに言ったよね？」

そうだ。まだ世界は不安定なままだ。この『黙示録』が、世界の安定することを妨げている。

不安定な世界を安定させる方法は、ただ一つ。レイディルを迎えに来た時、兄さんは前もって、その方法を教えてくれていた。

「さあ、これが本当の、君の最後の役目だよ。現世に『黙示録』は不要さ」

俺は刀を抜いた。縦向きにして、刃を『黙示録』に向ける。

「『現の黙示録』よ、安らかに眠れ！」

刀を突き刺すと、『黙示録』は煙のように消えていった。

少し、月日は流れる……。

『黙示録』は歴史の表舞台から消え、世界は安定。一般的な日常が、十年ぶりに帰ってきました。と言っても、私だけは、一年も経っていませんけど。

私と神崎さん、そしてレイトさんは、本来あるべき場所へ、戻ってきました。

「おら、早くしねえと遅れるぞ！」

「……レイト、もう少し静かにしろ」

外では、学生服を着たレイトさんが叫んでいます。

同じく学生服を着た神崎さんが家を出ます。私は、家中の鍵のか

け忘れがないかを確認してから、外に出ました。泥棒に入られたら大変ですから。

あれから、私と神崎さんは一緒に暮らしています。そのことをレイトさんに伝えると、彼はいつの間にか隣に引越してきて、同じ学校に通う日々を送っています。

「大丈夫だったか？」

「はい。鍵という鍵、全部閉めておきました」

そうか、と返事をして、神崎さんは歩き出しました。口数が少ないのは相変わらずです。

でも、私はとても充実した日々を過ごしています。神崎さんと同じ家で暮らし、同じ学校に通い、同じことを勉強する。それだけで、私の日々は満たされています。

「おい、フィアラ。あれから少しは進んだかよ？」

神崎さんと対照的に、登校中もよく話すレイトさんのほうも、相変わらず。

結局眼鏡は伊達眼鏡だったらしく、レイトさんは裸眼で日常を送っているそうです。伊達眼鏡は世界最高のファッションだ。本人談です。

「え、そんな……あ、レイトさん。一年生の靴箱は向こうですよ」

「……すげえ強引な振り方だな」

私たちが通っているのは、何の変哲もない高等学校。レイトさんだけは学年が違うので、一緒にいるのは校門までです。

「んじゃな。フィアラ、もっと積極的じゃねえとダメだぜ！」

そう大声で叫んで、レイトさんは走っていきました。一瞬で私達の視界から消えていきます。

もう……周りの人に聞かれたら恥ずかしいじゃないですか。そう思いながら神崎さんを見上げました。しかし、何の動揺も見せることなく、ただ堂々としていました。

「……フィアラ、授業の開始までまだ時間がある。裏庭へ行くぞ」

「あ……はい」

この学校の裏庭には、小さな霊園があります。そこに行って、レイディルと彼女のお姉さん。そして神崎さんのご両親のお墓参りをするのが、私達の日課です。

「……こうやって見てみると、『黙示録』のことを知っているのは、本当に一部だな」

問題の大きさは世界規模でしたけど、その問題に関わったのは、今言った方々を合わせても、私と神崎さん、レイトさん、ゼヴィルさん、神崎さんのお兄さん。計僅か九人です。

ほぼ全ての人は、『黙示録』のことを知ることなく、日常を送り続けています。

ちなみに、神崎さんのお兄さん、神崎祐さんにも一緒に暮らすことをお勧めしたんですけど……。

「僕にその資格はないよ。それに、君達の邪魔をしたくないしね」

そう言って、何処かへと行ってしまいました。今はどこで、何をしているのか……。

「……フィアラ」

「はい？」

神崎さんは空を見上げています。

「俺は一般になれていない。慣れるまで、迷惑をかけると思うが……」

「わかっています。大丈夫ですよ」

神崎さんは十年前に一般に世界から離れ、『黙示録』の舞台に立っていました。レイトさんの方は、私たちに会うまで学校に通って、人と関わっていたので問題ないのですけど、神崎さんはずっと、一般と言うものと無縁でした。だから、どうすれば一般をわたっているか、まだよくわからないそうです。

一度離れてしまったことにもう一度慣れるのは、とても大変な事です。その大変な神崎さんを支える事が、今の私の役目だと思っています。

「一緒に歩きましょう。『黙示録』から離れたこの世界を。この時

を」

「……ああ、そうだな」

いつの間にか、私達の距離はなくなっていました。

終章 『黙示録』の終焉2（後書き）

『現の黙示録』、いかがだったでしょうか？

この小説完成までの間、リメイクを含め全てを作品数として計算すると、『現の黙示録』は十二作目と言うことになります。

十二作目でようやく初完成。「は？」と言う声が聞こえてきそうですが、皆さんの意見を参考にしたりして、ようやく完成に至りました。感謝しています。

その後、『汚れなき邪悪な心』、『終わりのなき邪悪な心』、『アンチテーゼ』を書いていきますので、そう作品数は誤差を含め十五、六作品ということになります。われながらよく書いたな……。

さて、『現の黙示録』は、簡単に言うところ『影で起きている事』と言うのをテーマとしています。

私達がこうやって日常を生きている間に、どこかでは、彼らのように戦っている人がいるかもしれない……そういうことを忘れずにいてくれれば、今回の作品は大成功です。

作者自身が今作で印象に残っているのは、主人公神崎達哉もさることながら、レイト・アレクジールについてです。

彼の設定は、悲しいものが多かったです。レイゼ・ニアスや両親を殺してしまい、レイデイル・ニアスまでも、自分の手で殺さなくてはなりませんでした。

『黙示録』の終結後、彼がどのように心の整理をしたのかは、それぞれ考えるところがあると思いますので、コメントは控えさせていただきます。

『神術の仮面児』神崎祐については、彼は自分の責任を感じて、弟である神崎達哉の許を離れた。と思っただければいいと思います。

では具体的にどこに行ったのか……それは、それぞれの判断にお任せします。しかし、彼と神崎達哉がどこの出身かを考えていただ

ければ、簡単なことだと思います。

それから、物語中の最後の最後に、「いつのまにか、私達の距離はなくなっていました」と書きました。

具体的にどうしたかを書いても良かったのですが、そうしてしまうと終わり方が微妙な感じになってしまうと思い、あえて抽象的な表現で終わらせました。

「なんだよそれ!」と思っている方、申し訳ありません。二人がどういう行動を取ったかは、読んだ方々それぞれで判断してください。といっても、それほど複雑な状況には発展しませんので、すぐに見当はつくかと思われます。

かと言って、行き過ぎた発想は、今まで書いてきた物語の雰囲気完全に崩してしまいますので、そこまで考えが飛ばないよう、お願いいたします。

それにしても……「読者の判断にお任せします」と言う部分の多い小説でございます。こういう終わり方が嫌いである方、申し訳ありません。

読んだ方、叩きたいところは、直接私に伝えていただけるよう、お願いします。

著 者

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6151b/>

現の黙示録

2010年10月8日15時58分発行